世界を廻すのは…

たたみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
世界を廻すのは…

【Ｎコード】
Ｎ５８３９Ｗ

【作者名】
たたみ

【あらすじ】
ナカムラ、三度目登場です。
未練です。妄想です。
生ぬるい目で見守ってやって下さい。

（1）

ダダがボクのＰＶを編集してる。曲は“愛は時の彼方に”（ウゲゲッ）
歌はもちろんクチパク。画像は踊ったり、演技したりのボク。
イメージの断片が何重にも重なり、画像フィルターもそれなりに効果良く使われ
出来もマァマァ…って
冷静に見れるかー！こんな恥ずかしいモノ！
ダダが蔑むような、感心するような目でボクを見て言う。「よく、こんな事できるなー。」
「オマエがさせてるんだろうがー！！！」大声出しすぎて頭がクラクラする。

ボクの失恋をネタに稼ぎ続けて半年。そろそろ飽きられたのか、僕らの事務所も落ち着いてきた。Ａちゃんやボクのキャラも今や勝手に歩き出し2次作品へと移行しつつあった。
そんな時にダダから食事の招待が…。

「フロルがオマエを夕食に呼べって言ってるんだが、来るか？」
久々の手料理。「行く！」

ダダの奥さんフロルの手料理はウマイ。ボリュームもある。申し分ない。さすがに毎晩ゴチソウになるわけにはいかないが、独り者のボクを気遣ってかよく招待してくれる。

都市部のハズレに田舎風の庭付きの家。ダダ念願の庭付きの家。今時はかなりの高額物件だ。それもこれも全部あの恥さらしのＰＶや

らポスターやら握手会の稼ぎのお陰だ。
ダダ、ボクに感謝しろよ。

玄関が開いてフロルが現れた。地球で見たラファエロ・サンツィオの聖母を思わせる美貌。
金髪の巻き毛。青い瞳、頬に紅さす白い肌。ひと目見てタメイキが出た。
そして、ばら色の唇が発する言葉は…。

「ナカムラー！よく来たな！」

このギャップ。初めて会った時はダダが悪ふざけでアフレコでもやってるかと思ったくらいだ。さすがに慣れては来たけど相変わらずだ。そしてダダには彼女に良く似た双子の女の子とダダに髪の色と利口そうな広い額が似ている男の子がいる。彼女と子ども達が一緒の様はルネサンス期の聖母と天使の絵を髣髴させるが内容は「母ちゃん、腹へった。」「待ちな、客が先だよ。おとなしく待ってろ」「マテねーよ。コレいただき！」「コラッ！」なカンジ。相変わらず、にぎやかだなー。

食後、リビングでダダとコーヒーを飲んでると例の双子がやってきた。
「ナカムラのおじさん、コレ読んで！」
“おじさん”じゃない。“お兄さん”だ。それに、“読んで下さい”でしょ？」
こんなに可愛くて、あと10年もすれば美しい娘に成長するだろうにこの家の躾はどうなっているんだ。「おいで。」二人をヒザに乗せ絵本を読んでやる。いつものようにしばらくすると二人はウトウトしだす。寝てしまわない内に彼女たちを子ども部屋のベッドに寝かしつけ絵本の続きを読む。しばらくすると2人とも寝てしまう。

毛布を掛けなおして明りを消す。二人の寝顔を見ると、ちょっとだけAちゃんを思い出し切なくなる。
…未練だな。

リビングに戻るとダダとフロルが酒を飲んでいる。
マズイ、彼女の酔いは早い。からまれるぞ。
目がトロンとして上気した頬が色っぽい。しかし、その口から発する言葉は最低だ！
「なんだ、ソノ顔は？」
「何が“Tと仲良くね”だ。もったいぶってるから未練が残るんだ。さっさとヤッチまえば良かったんだ。」
ボクもさすがに怒った。「黙れ！バカフロル！」
他人の傷心を商売にする旦那も旦那だが、そのキズに塩すりこむこの女房も女房だ！
「Aはお前と一緒の“今”が欲しいだけなのに、お前はバカだ。」
「彼女が私が考えてるような女なら、Tと暮らしてるワケないね。」
フロルが言い返してくる。
“飲め”とばかりに適当に作った水割りのグラスをボクに突き出す。
泣いてくれるのか？フロル。
今となってはそんな事…。
ダダが咎める。「子どもの前だぞ、二人ともヤメロ。」

エッ？ムゥがいた！さすがに大人げ無い所を見せてしまった。

ムゥはボクと同じ能力者の卵だ。能力はココでは皆が持ってる力だ。その質も力も多種多様、千差万別。ただ、なかでも抜きん出て強い力とコントロールを持つ者が現れる。それが能力者と呼ばれる者たち。能力者と認められた者は早くから力の使い方を指導してくれる後見人を付けられる。相棒の子という事でボクはムゥの後見人を引き受けた。といっても遊び相手になるぐらいだけど。

「ナカムラのおじさん」ムゥがボクを呼ぶ。
「“お兄さん”だ、ムゥ。ごめんよ、恐かった？キミのお母さんとケンカしてるワケじゃないんだヨ。」
ムゥがキョトンとしてボクにいう。
「母ちゃん？関係ねーよ。おじさんを呼んでる子がいるんだ…。」
「ボクを呼んでる子？」
「その子がおじさんのガードが強くて呼んでも気づいてくれないって言うんだ。」
「だから、“ボクの事を伝えて”って言ってる。」
「誰？」
「ススムって名の子だ。」

ススムくん？まさか。だってあの星はもう無いのに。

ボクはガードを外す。小さく頭に響く声。集中していないと消えてしまいそうだ。
「ナカムラさん？ボク、ススムです。覚えていますか？」
「ナカムラさん、地球に来て下さい。助けてください。」

本当にススムくんなのか？信じられない。

最近は調査委員会からの召喚が執拗でずっと無視してた。あの“龍”の件だ。
宇宙をリセットさせる高エネルギー体の夫婦との遭遇なんて、そうアル話じゃないしね。
そして、ダダは「只でデータ取られて管理されてお蔵入りじゃもったいない。」と近々あの“龍”の件をデータ付でレポートにして販売するつもりだ。「知識、経験は公表してナンボだ。あとは、勝手に転がせておくのが面白いんだ」と。それでも委員会は勝手に公表

される前にＳＴＯＰを掛けたいらしい。曰く「類似する宇宙において類似の存在は在り得る。よって“龍”の存在は社会を不安に陥れる」と。始まりがあれば終わりはある。そんな事、心配してどうする？そん時はそん時だ。隠しておく方が不健全だ。表現が変か？調査委員会は能力者を使ってボクやダダの考えを探ろうとする。当然、ガードも強くなってしまった。
そして、このススムくん。本物なのか？ガードを外させる為の囮なのか？

試させてもらおう。もし、囮なら許さない！

ボクとイシカワ家しか知りえない事。
「ススムくん、ボクが残した映像メモリの中でＢＧＭに使われてる曲を知ってる？」
しばらく間があって、
「ナカムラさんの映像メモリは知らないけど、お母さんが作ったナカムラさんとＴさんが出てくるお話をしてくれる時、歌ってくれる歌があるんだけど、それかな？」
“ｙｏｕ　ａｒｅ　ｍｙ　ｓｕｎｓｈｉｎｅ”ボクの子守唄だよ。
それがどうかしたの？」

ススムくんだ！本物だ！

まだ、信じられない思いだけど（だって、あの星は…）ボクはススムくんに呼びかける。
「ゴメンネ、ちょっと信じられなくて。試したんだ。本物のススムくんなんだね。」
「ススムくん、何があったの？」

「ごめんなさい、もう時間が…。また来ます。」頭の中の声が小さ

くなって消えた。

我に帰る。喉が渇いた。先程のフロルの水割りをいっきに空ける。
思わずムセる。酒9に水1なんて水割りじゃねー！バカフロル！

撒き散らした“酒割り”を拭きながら迷惑そうにダダが言う。
「で？何なんだ、今度は？」
オッ、さすが相棒。騒動の前触れを感じたのか？

「信じられないと思うけど…。ススムくんだ。ホラ、イシカワさん所の赤ちゃん。」
「赤ちゃんじゃなかったけど、確かにススムくんだ。」
「でも、地球もあの宇宙も消えてしまったのに…。“助けてほしい”って。」

ダダは表情を変えない。信じてないのか？
金儲けしか考えない前頭葉をピタピタと指の腹で叩く。
何か心当たりでもあるのか？

「飲も！飲も！」フロルが割って入って来た。例の“酒割り”を持って。
「フロル！それ、水割りじゃないぞ！前に教えただろ、酒1に対して水2．5だ！」
「細かい事言うなよー。酔っちまったら同じだ。」フロルが笑う。

「フロル、ナカムラと書斎で話があるんだ。酒盛りは今度ナ。」ダダが言う。
ダダの考えを察したのか素直に
「わかった。ナカムラ今度ナ。帰る時は声かけてナ。」と言うとダダにキスして

その場を片付け始めた。独り者の目の前でよくもヌケヌケと見せ付けやがって。

（1）（後書き）

前回でナカムラの話は終了。と爽やかに（？）ｅｎｄしたのに…。未練です。まだ、いじり足りない！

事の起こりはナカムラの相棒、ダダ。この名前どこから来たンだ？と考えたら…。思い出した！「１１人いる！」のタダトス・レーン、愛称タダ。１字違うけど、アノ優等生タダが金儲けが大好きなちょっと腹黒なオジサンになったら…。そしてあのフロルが奥さんで…と考えだしたら妄想が止まらない。萩尾望都ファンの皆さんスミマセン。同一人物ではないのでお許しください。

それと、思い出した事がもう一つ。ＨＯＳの名前。どっかで聞いた事あるなと思ってたら、機動警察パトレイバー　ｔｈｅ　Ｍｏｖｉｅ、に出てた「ハイパー・オペレイティング・システム」ＨＯＳでした。ウチは「ホーム・オペレイティング・システム」ですが。あの映画も良かったー。押井守作品の中で私の中ではＮｏ．１です。

（2）

屋根裏のダダの書斎。扉はカギ付。
当然だ、あのフロルに子ども達だ。何をやらかすか判らない。
天窓にレトロな天体望遠鏡。意外とロマンチスト？

モニターに宇宙空間を漂う人工衛星の残骸のような物が映っている。
「見せたい物ってコレ？コレが何か？」
間をおいて、ダダがしゃべり始める。
「コイツは最近見つかった宇宙ゴミだ。それで、こいつが話題になったのは見つかった場所がこの星から１２０００万ｋｍ離れた深宇宙だから、なんだが…」
「アァ、聞いた事ある。そんな遠い所まで宇宙ゴミが広がってるのかって、ＴＶのワイドショーで言ってた。」
「そうだ、アレはこの星の人工衛星だと思われてる。ナカムラ、何か似たモノ見た覚えないか？」
「似てるもなにも、あんなに壊れてもとの形もナイんだろう？」

モニターの画像が切り替わる。宇宙ゴミのアンテナのような部品の根元へカメラが寄っていく。小さなノートほどの金属板。ヒト形の生物の絵。見た事ある。地球で…。
まさか、この残骸がパイオニア１０号！

驚いた！ダダを見る。“そうだ”という風にうなづく。

じゃぁ、地球はボクらの星と同じ宇宙に存在してるって事？
じゃぁ、今までヒトの血液の中の宇宙へ覗きに行ってたのは何だったの？

「オレは専門じゃないし、推測でしか言えないけど…。」
「あの血液の中の宇宙というのは“覗き窓”のようなモノじゃないかと思ってる」
「細胞の中に実際には宇宙は存在しない。遠くにある天体を見せてくれる“窓”のようなモノだとしたら。」「宇宙が膨張して光の速さで星が遠ざかっているとしたらあの“窓”の中が恐ろしい速さで時間が過ぎて行くのも納得できる。見える“ウラシマ効果”だよ。」

ダダの考えはこうだ。

あのパイオニア１０号は地球を離れて目的のアルデバランを通り過ぎ彷徨ってる。
恐らく少なくとも地球からは２００万光年の彼方だ。今オレ達があの機体を見てる現在、地球は無い。恐らく太陽系さえも様変わりしてるだろう。逆を考えれば、あの機体が地球を離れた頃、オレらの星系はどうだったろう。生命の発生すらなかったかもしれない。

オレ達が宇宙へ出てゆくようになって、知的生命体に出会えなかったのはそういう事なんじゃないか?それでもオレ達は“誰か”を捜しつづけた。そして見つけたのは宇宙ではなく自らの身体の中に“窓”を見つけた。人類全体の希求がそういう形で現れた。
この世界の中で自分達と相なす“誰か”を求める強い想いが時間も空間も越えた。
“接触”は出来なくてもこの世界で一人ぼっちではなかった“確認”が出来た。
そんな風に考えるんだ。

恐らくオレの考えは地球への新しい“窓”が発見されれば立証されるだろう。

オレの本業は医者だから時々思う事がある。何故、身体の毛細血管と葉の葉脈は似ているのだろう?宇宙地図はシャボンの泡を思い出させ、肺の肺胞にも似ている。血液の顕微鏡写真は銀河宇宙に似ていなくもない。何故、自然や宇宙のような広大な事象がこの小さな身体の中で見つかるのだろう。ってね。

タメイキの出るような話だ。

「ダダは金儲けの事しか考えてないと思ってたよ。」

ダダが睨んでる。

「それじゃ、地球への新しい“窓”が見つかればススムくんの所へ行けるのか?」

「いや、ススムくんにリードしてもらえば行けるんじゃないか?」

「オマエ自身もそんな気がするんだろう?」

「前から思ってたんだが能力者がアノ世界へ行く時に場所の特定が必要というが、結局は“確認”する事でそこへ行く“意思”を強く持てるという事じゃないのか?」

そう、言われればソンナ気もする。…という事はソノ場所ソノ時間を強く意識すれば

ボクは“窓”を使わずとも自由に地球へ、Aちゃんの所へ行けるという事か?

オレはダダを見る。

「まだ、“…だろう”の話だからね。無茶はよせ。身体に帰ってこれなくなる危険はあるんだ…。」

「パイオニア10号の件、委員会に報告するのか?」ダダに聞く。

「冗談!只でさえ“龍”を恐れてるのに同じ宇宙に存在すると知

ったらどうなる?」とダダ。
「じゃあ、ガードはいよいよ外せないな。」
「よし、明日行く準備を整えてムゥと待機だ。ムゥがススムくんが来たのを教えてくれるはずだ。」
時計を見ると日付が変わりそうだ。帰らなくちゃ。

階下のリビングでフロルがうたた寝してる。
起こさないように静かに家を出ようとしたのだが、起こしてしまった。

目をこすりながらフロルが言う。
「帰るのか?遅いぞ。泊まっていけよ。」
「ウチのベッドは広いからオマエとダダとワタシの3人で眠れるゾ。」
冗談を言ってるのか?
苦笑しながら、「遠慮しとくよ。」と答える。
「じゃぁ、コレ。明日の朝ゴハンだ。」
スープの入った密閉容器。サラダとパンとハムを袋にいれて差し出す。
「ありがとう」イイ所もあるんだが…。どっか変な人。

別れ際にふざけて「フロル。お休みのキスは?」とダダに聞こえるように言う。
すぐに、ダダが飛んできて「人の女房に手を出すな!」と怒鳴られた。

笑いながら退散!

帰る道すがら、Aちゃんの事を考えてた。
もしも地球に行けても、Aちゃんに会ってはいけない。

彼女の幸せを祈って身をひいたんだ。
今さら…。

高層マンションの最上階、事務所兼自宅。アチコチにAちゃんポスター並びにグッズ。
切ないなー。

「オハヨウ、おじさん。」ムゥに起こされた。
「おはよう。ムゥ。“おじさん”じゃなくて“お兄さん”だ。」
ダダが準備を始めてる。
「朝食もまだだゾ。早くないか？」
「ムゥがススムくんが来てるって言うから急いで来たんだ。」

ススムくんが来てる！
ボクはガードを外す。
「ナカムラさん、ボクがリードするから今から来れる？龍さんの力を借りてるんだけど、それでも、ソコに長くはいられないんだ。」
そうか、子どもながらボク並みの働きをすると驚いていたが、龍のお陰か。
「わかった、急いで準備してキミにリードしてもらうから少し待ってて。」

ベッドに横になったボクに栄養とクスリを入れるためのカテーテルを射しながら
ダダがボクに忠告する。“ムリはするな”と。
脳波を計測するためのセンサーを取り付け、
ボクの視覚を電気信号に変える機械のチェックをしている。
テストは成功。準備は整った。
ダダがボクに言う。“今回はチャンネルには接続しない”と
“思いっきりやってこい”と、どういう意味だ。

目を閉じボクはススムくんを呼ぶ。
「準備できたよ。連れて行って。」
「はい。」

（2）（後書き）

昔、カールセーガンの「コスモス」をＴＶでやってて、知的生命体同士のコンタクトがいかに希少な事かというのをやってて、今回はその話がもとネタです。

…とか言ってますが、本音はナカムラに地球でヒト踊りさせたい為だけのこじ付けです。お許しを！

（3）

彼の小さな気を追い掛け暗い空間へ。
気がつくと懐かしい部屋。目の前のベッドにススムくんらしき少年が寝ている。
マズイ！不法侵入で騒がれる！意識をロビーへ…。

イシカワ家のＨＯＳのセンサーへ手をかざす。
「ナカムラといいます。イシカワさんに会いに来ました。」
（小さくなったな。）
「ナカムラ様ですね？しばらく、お待ち下さい。」
（言葉が流暢だ。男性音声なのがちょっと…。）

「ナカムラ！」声は後ろから…。エッ？
振り返るとイシカワさん。別れた時のまま、そこに立ってる。
勤めの帰りに出くわした？
髪に白いモノが。少し年取ったかな？
イシカワさんが抱きついてきた。やめて下さいよ。
オジサンに抱きつかれても嬉しくナイ…って羽交い締めにされてる！

「よーし、もう逃がさないからな。」イシカワさんが言う。
「旦那様、通報致しましょうか？」
壁からスタンガンを持つＨＯＳのロボットアームが出て来る。
「そうだな…。どうするナカムラ？」イシカワさんが笑う。

「ナカムラくん？驚いたわ。…十年になるかしら？」
「変わらないのね。」
ミセス・イシカワ、少しふくよかになったけどキレイだ。

そして、相変わらず鋭そう。“変わらないのね”にボクへの不信感が見えかくれしますよ。“まるで幽霊のよう”昔アナタがボクを見抜いたように。

あれから、十年になるんだ。

「なッ、いつか帰って来ると思ってたンだ。」バンバンとボクの肩を叩くイシカワさん。

「逃げも隠れもしませんから、放して下さいよ。」イシカワさんが掴んでいた腕を放した。「もう、逃げるなよ」と笑う。なんか、すまない気分。

ボクら大人3人を少し離れたトコロからびっくりしたように見てる女の子。

年は5、6才?ダダのところの双児と同じぐらいかナ。

「リン、おいで。ナカムラさんだよ、あいさつして。」イシカワさんが女の子を呼ぶ。

女の子が駆け寄ってきてイシカワさんの後ろに隠れるようにコチラを覗いてくる。

ボクは屈んでリンちゃんを見る。ススムくんの妹かァ。

クセのない髪と広いヒタイはお母さんに似てるかな、よく動く丸い目はお父さんだね。

「こんにちは、お父さんの子分のナカムラっていうんだ。よろしくネ。リンちゃん。」

笑いかけるとニコっと笑い返す。「こんにちは、ナカムラさん」そうそう、女の子はこうでなくちゃ。しかも“さん”までついてる。どこかの双子とは違うね。

小さな手にハイタッチ。

…ススムくんほどではないけど、明らかに彼女もチカラを持ってる。

「ススムくんは？」
ボクが尋ねると、２人の表情が曇った。
間があってイシカワさんが答えた。
「寝てるんだ。ずっとじゃないけど。食事とトイレだけ起きてきてアトはずっと寝てる。」
「具合が悪いのか？と聞くと“ナカムラさんを捜してる”と“病院には行かない“と答える。」
“お母さんが心配している”と言うと悲しそうに“ごめんなさい。でも、捜させて”と寝てしまうんだ。」

「そんな状態が今日で１週間になる。」
「あの子は小さい時から、覚えてもいないはずのオマエの事を聞きたがった。
ナカムラ、何か知っているのか？」

そうか、ボクを捜してたんだね。皆にも心配かけさせてしまった。
「ススムくんに会わせてもらえませんか？」
イシカワさんがミセス・イシカワを見る。彼女は横を向いてボクを見ない。
「お願いします。」ミセス・イシカワが目をふせ、“しかたないわネ”というふうに
「こっちよ。」と案内してくれた。

さきほどの部屋、ベッドにススムくんが寝ている。
１０才か…。大きくなったね。そこのバルコニーから二人で“場所”へ行ったのは
この間の事みたいなのに。
「ススムくん、起きて。ナカムラだよ。キミのお陰で来れたよ。」
彼の目がパチッと開いてボクを見る。
「よかったァ、目を覚ましたらナカムラさんがいないから、失敗し

たと思って、もう一度…」そこまで言いかけて泣き出した。
「ごめんね。イロイロあってね。」答えにならない言葉を掛け彼にあやまる。
ミセス・イシカワがボクを押しのけススムくんをハグする。
ボクはイシカワさんに
「もう大丈夫です。彼はボクを連れて来てくれましたから。」
表情に“納得できない”が出てる。

「オマエが隠している事がススムに関係している事なら親としては知る権利があるはずだ。オマエはそれでも、打ち明けてはくれないのか？」

どうしよう？正体を知られて面倒くさい事になるのはイヤだ。
でも、ススムくんが助けてほしい事がチカラに関する事なら…避けれない。
「ススムくん、ボクに助けて欲しい事はキミやボクが使うチカラの事なの？」
彼はしゃくりあげながらウナズク。

ダダの声が頭に入ってきた。
「イシカワさんの要求は真っ当だ。同じ親として同感だな。チャンネルは繋がってないし、委員会にばれなきゃイイんじゃないの？」
「オマエの“ルール破り”は今に始まったワケじゃないし…。」皮肉か？

「奥様、お茶の仕度が整いました。」ＨＯＳの声。
「ナカムラ様、先程は失礼いたしました。無礼の程、お許しください。」
「気にしてないから…。」
ＨＯＳの人工知能は進歩してる。十年はすごいや。

イシカワ夫妻にボクが地球の人間ではなく、ある星から意識のみで地球を覗きに来ている事、そしてソレが商売である事。決して悪意は持っていないむしろ皆が大好きだという事。そして１１年前の龍の事、その時の太陽風の影響でボクと同じチカラを持つ者が生まれてる事。そして、ススムくんもリンちゃんもそうだという事を一気に話した。

信じてくれるかな？

「ボクはススムくんがこれから増えていく仲間たちの先生になってもらう為に“場所”に連れていきました。」「彼はそのあと“場所”で例の“龍”に出会ったようです。」

「そして、彼は龍の力を借りてボクを探しに来てくれました。彼がボクに何を助けてほしいのかは、まだ聞いてません。」

ススムくんはまた寝てしまった。疲れたのだろう。

“龍”のチカラを借りたとはいえ、大変だったハズだ。

「じゃぁ、この身体は何なんだ？」イシカワさんが聞いてくる。

昔、あなたのご先祖が同じセリフ言ってました。思い出してクスッと笑う。

いったん消えて見せて、再び現れる。

「地球人のフリをするには必要なので…。」「イメージを相手にぶつけて錯覚させるカンジです。」「チカラのかけ方にもよりますが、ボクの場合は半径２０ｍ内であれば見えてるハズです。」「イメージに自分の身体を同調させる事で圧も感じます。相手にも反発します。ですから捕まりもしますし、痛みも感じます。」「イチイチ、そんな細かい事を意識して出来てるワケではありません。すべては“こうしたい”と思えばできちゃうんで本当の身体と大差はないで

す。今説明した事も学者の後付です。」

説明してる間、イシカワさんはボクの身体をいじってる。
顔そんなに伸ばさないで下さい。痛いですってば！
真似て、リンちゃんまで…。

ミセス・イシカワがリンちゃんをボクから引き離す。ボクを気遣ってくれたのかな？
…違う。警戒してるのかな？相変わらず考えが読めない。

ボクの説明は続く。
このチカラはボクの星では皆が当たり前に持ってる力です。その中でも強いチカラとコントロールを持った者を“能力者”と呼んでいます。“能力者”の事は追々説明しますが
皆が持ってるチカラにおいて、重要なのは“感応力”です。“場所”ですべてのヒトがつながってるという意識です。安心感です。孤独を感じる事はありません。そして、考えを誤解なく相手に伝え、受け取れるのです。このチカラは地球の人類にとって文明を大きくシフトさせます。彼らは大事な最初の世代になるはずです。

ミセス・イシカワが言う。
「この子たち、いつもニコニコして夜泣きとかなくて…。そんなものだと思っていたけど、そういう事なの？」
ボクがうなづく。
「それもありますが、あなた方の愛情をちゃんと受け止めてるからです。」
「そして、その愛情に応えようとしてます。心当たりあるでしょ？」
ミセス・イシカワがタメイキをつく。ニコッと笑って。
「この子達が私のカワイイ子ども達である事に変わりがないように、アナタも以前のナカムラ君と変わりナイと思ってイイのね？幽霊さ

ん。」
ボクはホッとして「ありがとうございます。」と返事する。

「でも、困ったわね」エッ？まだ何か？
「Aちゃん、まだ一人でアナタの事待ってるのよ。でも、アナタ幽霊さんだし…。」
Aちゃんが一人でいる？Tは？あのバカはどうしたんだ！
ボクの考えを読んだように彼女が続ける。
「Tくんね、アノ後すぐ2年の研修が決まって彼女さそったんだけど振られて、帰ってからも何度かアタックしてもダメで、あきらめたみたいよ。」
「もったいナイわよねー。顔もルックスもいいし、お仕事もできるし、優しいし、どっかの幽霊さんより絶対イイのに。」チラッとボクを見る。言い返せないのが悔しい。
小さなカードをボクに渡しながら
「彼女、お金貯めて小さな輸入雑貨のお店やってるの。覗いてくれば？」
「そりゃイイ。お前金持ってるか？これで花でも買っていけ！」
イシカワさんが札を3枚ボクのポケットに突っ込む。
そしてボクを玄関へ押し出した。
「ススムは寝てるし、ヒマだろ？行ってこいよ。
泊まる所ないなら、ススムの部屋で泊まればイイ。…消えるなよ。」
「HOS、今日からナカムラは客だから。頼むよ。」
「承知いたしました。旦那様。」

マンションのロビーで呆然とするボク。
Aちゃんとは会わないって…。でも、待ってるって…。
どうする？ボク？

（3）（後書き）

今回、こじつけ多くてスミマセン。
次回ナカムラ踊ってもらいます。ヒヒヒ…。

（4）

迷いながらも気がつけばＡちゃんの店の前。
せめて、外から姿だけでもと道を挟んだ街路樹の影から店内を伺う。
店内には褐色の肌の女の子。整った顔。深い色の大きな瞳。クセの強い髪を束ねてる。額に赤い印。
外国人？客ではなさそう。バイトの娘かな？
時刻はそろそろ閉店の時間。Ａちゃんは留守だろうか？

「永遠のお暇を“勝手に”頂戴した騎士さま、何をしているんですか？」
懐かしい声。振り返るとＡちゃんがクスクス笑って立っている。
「コレは姫さま、ご機嫌麗しく。お顔を拝見いたしたく潜んでおりました。」
彼女が笑う。久々の笑顔。嬉しい。涙が出るほど嬉しい。

彼女がボクの腕に手をまわし店へ引っ張っていく。
「小さいけど、私のお店よ。すごいでしょ？」
ボクがうなづく。彼女が笑う。幸せな気分。
店へ入るとさきほどの女の子がボクらを見て少し驚いたよう。
「ララァ、私の騎士さま。ナカムラさんよ。」
アァという顔で「お話は聞いています。初めましてナカムラさん。」
「ララァって呼んで下さい。」言葉が流暢だ。
彼女と握手する。アレ？君は…。彼女も気づいたよう。
「彼女は友達の紹介でココで働いてもらってるの。インドからの留学生よ」
「ララァ遅くなってゴメンね。帰ってもいいわよ。」
「では、お先に失礼します。」ララァは帰っていった。

Aちゃんがボクを振り返って言う。
「お店閉めるからちょっとだけ待ってね。」
「手伝おうか？」「じゃぁ、店頭の日よけをお願い」

改めて見るとAちゃんすっかり大人の女性だ。年齢も３０過ぎてるから当然だろうけど、前のAちゃんならハグするように簡単に近づけたけど、今は何だか眩しくて簡単には手を触れられない。見とれちゃうよ。

店のカギを閉めると彼女が腕を組んできて
「ナカムラさん、アパート近くなの。お茶していって。」とボクを見上げる。
ボクの腕をギュッとにぎってくる。“断らないで”って言ってるみたいに。
表通りから中へ５０mほど歩いた所にあるアパート。その三階にAちゃんの部屋。
誘われるままについてきたけど、まだ迷ってる。
ボクは彼女とずっと一緒にいられない。でもフロルの言葉を思い出す。
“Aはお前と一緒の今がほしいだけ”　そうなの？それで、いいのAちゃん？

それでも気がつけばボクは彼女の部屋の小さなダイニングテーブルで彼女がお茶の仕度をするのを頬杖ついて眺めてる。
彼女が剥いたリンゴと紅茶をテーブルに置く。
「おいしそうなリンゴでしょ。」とふざけてフォークに刺したリンゴをアーンと食べさせようとする。ボクもふざけて「姫の御手から、何たる幸せ！」とリンゴに食いつく。
二人で笑う。…言わなきゃ。ハッキリと。
「Aちゃん、ボクはキミが好きだ。でも、キミとずっと一緒にはい

られない。」
「だから、ボクはキミを幸せにできない。でも、キミが好きだ。」
ボクは何を言ってるんだろう。ココにいちゃいけない。
立ち上がると、彼女が「それでもイイの。今、一緒に居られれば…」
イイのかな?ボクが今言った事ちゃんと聞いてる?コレ酷いよ?自
分勝手だよ?
ボクはキミが不幸になるのにそれでもヌケヌケとキミに受け止めて
って言ってるんだよ?
涙が出て立っていられない。また座り込む。
「何が幸せなんて、本人にしかわからないじゃない。」
彼女が屈みこんでボクにキスしてくれた。リンゴの味がする。
ボクは彼女の目を覗き込む。
「リンゴ、つまみ食いしたでしょ?」「ばれた?」彼女がクスッと
笑う。

もう、考えるのよそう。ボクは彼女を抱き上げベッドを探す。
もう、彼女を手放せない。彼女は恥ずかしそうに隣の部屋を指差す。
もう、今はそれだけ。二人でベッドに倒れこむ。
彼女の髪をなで、キスをしながらブラウスをぬがす。
この期におよんで胸を隠そうとする彼女の手をどける、
想像通りの小さくて白い胸。
胸に耳をあてる。彼女の心臓の音がする。
彼女がココにいる。もう、それだけで十分だ。

気がつくと朝だった。
隣に、彼女はいない。
あの後を思い出せない。
ボクは服をちゃんと着ている。
なんか変だ。
部屋を出る。

彼女が朝食の仕度をしてる。
「おはよう」と声をかける。
「おはよう」と返してくれるけど変。
顔はにこやかなのに怒ってる？
彼女の考えが流れ込んでくる。
「胸が小さいからその気になれないのかしら？」
「私を女として見てないのかしら？」
「だったら、なんで思わせぶりな事するの！」
なんなの？何があったの？うろたえるボク。
突然、ダダの声
「おはよう！ナカムラ。お前サイコー、ギャハハハ！」
何があったんだ。お前、ヒトのHなんか覗くな！
「覗くつもりはなかったんだがAちゃんがお前を呼ぶから何事かと思ってみたら」
「ヒヒヒ…。お前寝てるんだもの！Aちゃんの心臓の音聞きながら！」
エッ？じゃ、“十分だ”ってそのまま寝ちゃったワケ？
「彼女、怒ってるだろ？」
怒ってるヨ。
「アーハハハ、じゃまたナ。ヒヒヒ…」

「ゴハン食べたら、帰ってよね。」Aちゃん怒ってる。
「ゴメン、疲れてたんだ。きっと。」
「そう？」
「好きだ、愛してる。」
「ふん！」

彼女には今、何をいっても伝わらない。
ボクは早々に彼女の部屋から追い出された。
Aちゃーん！

「ただいま、ＨＯＳ」ため息まじりにＨＯＳを呼ぶ。
「お帰りなさいませ、ナカムラ様。何か御身体の具合でも悪いのでしょうか？」
「大丈夫だよ。」

朝帰りのボクをイシカワ夫妻は興味深そうに見てる。
子ども達の前です。やめて下さい。
アナタ達の期待通りの事なんて何もなかったんです。情けない。

（4）（後書き）

「めぞん一刻」を超えた！…なワケないでしょ。あー、面白かった。

ララァ出してみました。今回チョイ出ですが、後からまた出てきます。

当時は「何故、シャアごときにー！」と残念で残念で。

（5）

集中出来なければ滝の水圧は身体を容赦なく叩きのめす。
キミはすべての雑念を払い。只ひたすらその圧に攻しなければならない。
…というのが、やりたいのかい？ススムくん。
「はい！」
アァ、そんなキラキラした目で期待してくれるな。現実は地味なもんだ。
何、うしろで似たような目してるんですか、イシカワさん。

休日のイシカワ家のダイニング。
少し遅い朝食の後、ボクとイシカワさんはテーブルでコーヒーを飲んでる。
イシカワさんはタブレットパソコンでニュースを読むフリしながらタメイキばかりをもらすボクを気にしてる。
リンちゃんの身支度を終えてミセス・イシカワがやって来た。
ボクの様子を見て「うっとうしいわネ。Ａに振られたの？」と聞いてくる。
そんなに、ズケズケと。
「振られてはいません。…怒らせてしまいました。」とボク。
この男は…！って顔で
「１０年アナタを待ってたＡを怒らせたって、何をしたの？」
そんな事、言えるワケないでしょ。
話題を反らそうと、ポケットの札を出しイシカワさんに返す。
「使いませんでした、お返しします。」
イシカワさんが

「お前にやった金だからイイよ。花買っていかなかったから怒ったんじゃないか？」
イヤ、そういう事じゃなくて…。ミセス・イシカワもそれはナイって顔してる。
相変わらず大雑把だな。
「小遣いぐらいはナイとな。週明けオレと来い。仕事探してやる。」
「…ありがとうございます。」何もかもが情けない。

ＨＯＳが終わったハズの朝食の仕度を始めた。
「おはよう。」ススムくんが起きてきた。リンちゃんもいっしょ。
お母さんにハグ。お父さんにハグ。そしてボクにハグ。
「ナカムラさん、やっと会えた！」
「キミの家は毎朝こうなの？アメリカのＴＶドラマみたいだね。」
ちょっと、茶化す。
「なんか皆久しぶりに会うみたいで…。」ススムくんがはにかんで言う。
「いつもなら、寝坊した子にゴハンはあげません。ＨＯＳありがとう。」と、ミセス・イシカワ。
「坊ちゃまが元気になられて良かったです、奥様。」ＨＯＳが答える。
ＨＯＳは気配りが出来るんだ。スゴイ。

牛乳を飲みトーストにハムや野菜を挟みパクつきながら、
彼は事も無げに聞いてきた。
「Ａお姉ちゃんの所に泊まったの？」
ボクはコーヒーを吹きそうになった。
「…何で知ってるの？」
「夜中に目が覚めて、ナカムラさんがいないからＨＯＳに聞いたんだ。そしたら、お父さんやお母さんの会話の内容だと、Ａお姉ちゃんの所に行ったらしいって、この時間まで帰らないなら泊まってる

んじゃないかって。」
「それと、リンがナカムラのお兄ちゃんの頭の中「情けない」「眠っちゃうなんて」「きっと疲れてたんだ」「何も出来なかった」「今度は」ばっかりグルグルしてるって言うんだ。」
「なんか、あったの？」
しまった！ガードがら空きだった。リンちゃんに読まれた！
ミセス・イシカワが堪えきれずに笑い出した。
イシカワさんが「どういう意味だ？」と彼女に聞く。
子ども2人はキョトンとしてる。
目を伏せ眉間にシワをよせ顔を赤くしてうつむくボク。
ボクの様子を気にしてＨＯＳが聞いてくる。
「ナカムラさま、具合でも…。」
「大丈夫！」ボクは答える。
ＨＯＳ，成年男子への気配りもお願いしたい。

ススムくんの食事が終わったので、本題に入った。
「ススムくん、ボクに助けてほしい事って何？」
ススムくんが“弟子にしてほしい”と言う。“修行をしたい”と言う。
修行？なんで、また？
彼をターゲットにしていじめる上級生がいる。
逃げて相手にしないようにしてたけど一緒にいた子がつかまった。
上級生から彼を助けようとしたけど結局、2人とも殴られた。悔しいし友だちも守りたい。だから、ナカムラさんに弟子入りして強くなりたい。とススムくんは言う。修行ねー。滝に打たれるとか？階段うさぎ飛びとか？（イツの時代だよ）必要ないんだけどね。
遊んでりゃイイんだよ。皆が笑ってくれる事とか考えながらサ。

バルコニーに場所を移動する。イシカワさんもオモシロそうだとついてきた

「ススムくん、キミ上級生につかまった時、殴り返せなかったでしょ？」
ススムくんは思い出して答えた。
「だって、殴ったら相手の痛みとか、悔しいとか、コノヤローとか伝わってきてイヤなんだ。」
「じゃぁ、キミがチカラを使って相手をこらしめたくても、出来ないんじゃない？」
アッとススムくんが気づく。
「ボクたちはそういう人間なんだ。」
「キミがお父さんぐらいの歳になる頃には悔しい思いしなくてすむんだろうけどね。」

「殴り返せないって…。ススムはこの先、自分の身を守れるのか？」
話を聞いてたイシカワさんが不安そうに聞いてきた。
「敵を作らない事です。それはイシカワさんもあの子たちも同じですよ。」

「ススムくん、相手が殴ってくる時はうまく避けてる？相手の動き読めるでしょ。」
「ウン、避ける。でも避ければ避けるほど怒ってくるんだ。」
「最初の一発ぐらいは受けてみよう。相手の怒りもおさまるかもしれない。」
「イヤだ。痛いよ。」
「梱包材のエア・クッションで身体を覆ってるカンジで想像してみて。」
思ったより早い反応。ボクがススムくんの腹にパンチ。彼が後ろに後ずさる。
驚いてイシカワさんがやって来る。
「痛くなかったでしょ？」
「ウン、押されたけど痛くない。」

「想像するのは、鉄でもゴムでもいいけどイメージしたモノはそのままキミにも影響するから鉄だと重くて動けなくなるんだ。」
「コレができるのはキミやボクのような強いチカラを持つ者だけだから、誰かが一緒にいる時は、逃げる事。それが第一だからね。友達がつかまったら、キミが殴られ役になるしかないね。」
「かっこ悪い！」「かっこ悪くてもダ！」

「その上級生は何故、キミを狙うの？」
「…たぶん、ソイツの秘密を知ってるから。」
「秘密だって、思わなかったんだ。ソイツ保健室の先生が好きでよくズルして保健室に行くんだ。それで保健室の先生が休みの日があって…わざわざ、ソイツの所に行って保健室の先生休みだよって、言ったんだ」
「その子をカラカイに行ったんだね。発端はキミじゃないか。」
「ごめんなさい。」

「今後は人の心を簡単に覗かないように。コレはエチケットだ。勝手に入ってくるモノもあると思うけどそれも口に出しちゃいけないよ。」
「…はい。」
そうそう、リンちゃんにも教えておこう。

最後に教えておこうか迷ったけど“もしも”の時を考えて。
「イシカワさん、ちょっとイイですか？」
「倒れると危ないんでソコの椅子に座ってください。」
「？」
「ススムくん、首のココと腰のココ中から強く押すと動けなくなるんだ。」
「イシカワさん動いてみて下さい。」
「動けないよ。」「今、どうです？」

イシカワさんが立ち上がった。
「もう一度座ってください。ススムくん出来る?」
「イシカワさん、動けます?」「ダメ。」
「ススムくん、放して」
途端にイシカワさんが首や肩を柔軟体操をするように動かす。
「今のお父さんの気持ちわかるでしょ?」
「…イヤだ、恐い。って。」
「もう、だめだって時だけ使うンだよ。使われた方はキミの事を怖がるからね。」
「キミの事を…。」まだ、子どもだものそんな事、言えないよ。
今日の授業、終わり。

「アイツ、いじめられてたなんて知らなかった。」
「イシカワさん達に心配かけたくなかったんでしょ。それにイジメって程でもなかったし。」
「ススムとリンはオレらの考えてる事、ぜんぶわかるのか?」
「覗かないように教えますから大丈夫です。飛び出してくるのは殆どが感情的なモノですから表情を読むのと大差ありません。」
「ボクなんて、ミセス・イシカワの考えなんて読めた事ありませんモノ。」
「そうか、しっかりしなくちゃナ。」

中に入るとミセス・イシカワがボクを見てクスクス笑う。
まだ、引っ張ってるの。しつこいなー。
「さっき、Aから電話があってね。」
「昨日、ナカムラさんが来たけど、彼がどこに住んでるかも知らなくって連絡場所ぐらい聞いておけばよかったって後悔してるって言ってわよ。」
「客としてウチにいるわよ。って教えてあげたから。」
「アナタ達、どっちもどっちよネ。」

夕方、Aちゃんそろそろ閉店の時間かな。
ひと目会うだけでも…。怒ってるかな。会ってくれないかな。
見るだけでも…。
ロビーに降りようとHOSを呼ぶ。
「HOS出かけて来るから。」
「お夕食はいかが致しましょう?」
「外で済ませてくるよ。」
「行ってらっしゃいませ」

「ナカムラさん、何処行くの?Aお姉さんの所?」
「ボクも行ってイイ?」
子どもが一緒だと邪険にはしないよね。イイカモ!
「HOS、ススムくんと一緒にでかけてくるよ。」

（5）（後書き）

今回はベスト・キッドみたいになってる。
この後、どうしよう。

(6)

Aちゃんの店へ行く途中、ダダから連絡。
「今さらだけど…、お前にクスリ投与するの忘れてた。」
じゃ、ボクが眠ってしまったのは…。
「…そのせいかもしれない。」ダダのバカーッ。
「ちゃんと、クスリ入れたから今度は大丈夫。…だと思う。」
「マッ、頑張れヤ。」
「ナカムラのおじさん、さっきススムに教えてた事、オレ教えてもらってナイ。」
ムゥか?おじさんじゃない、お兄さんだ。
いいんだ。お前には必要ない事だ。
「ケチ!」

「ナカムラさん、さっきから何ブツブツ言ってるの?」
「向こうに、ダダって相棒がいてね。そいつと話してるんだ。」
「それとムゥとも話してる。キミの事教えてくれた子だよ。」
「ありがとうって、伝えて。あの子がいなかったら、ナカムラさん呼べなかったよ。」
だそうだ、ムゥ。
「どうって事ないさ。」とムゥが照れてる。

「こんにちはー!」ドアのカウベルがガランガランと音をたてる。
ススムくんの後ろから居心地悪そうについていく。
「いらっしゃい。久しぶりねススムくん。」
「ナカムラさんもいらっしゃいませ。」
閉店間際で客もいない。店番のララァがひとり。
「もうすぐ、Aさん帰って来ますヨ。会いにきたんでしょ?」
「マァ、そう。」口ごもる。

彼女は奥に行くとコーヒーと紙パックのジュースを持って戻ってきた。
ボクにコーヒーをすすめ、ススムくんにジュースを差し出す。
「それ、今度インドネシアから入荷したコーヒーです。気に入ったら買って下さいネ。」
しっかり者ですね。カワイイだけじゃないんだ。
「じゃあ、ひとつ。」「ありがとうございます。」嬉しそうにレトロなレジスターに向かい
挽きコーヒーの入った袋とお釣りを持ってくる。
「でも、びっくりしたな。大人で“ココロで話せる”ヒトは初めてだったから。」
「ええ、私もナカムラさんが初めてです。その前にススムくんやリンちゃんにも会えて日本に来れて本当によかったです。」
「日本は長いの？」
「2年になります。」
「日本語上手だね。2年なんて思えない。」
「インドで日本の方のお手伝いする替わりに学校の費用を援助して頂いたんです。だから少し…。」
「日本の大学に留学出来たのもその人のお陰です。ココのバイトもその人の紹介なんです。」
「Aさんは彼の長年の友人だって言ってました。同じ女性同士だから助けてもらえるだろうって。」
へーっ、Aちゃんの友達にそんなイイ奴いたっけ？
「今日、彼来ますよ。月に一度、私の様子見ながらAさんにも世話になってるからって食事にいくんです。…そうだ、Aさんに会いにきたんですよね？」
「いいよ、気にしないで。Aちゃんの顔見たら帰るつもりだったから。」
「あっ、彼来ました。Aさんも一緒です。」
店の外に男女2人。いつものキレイなAちゃん。隣の男性がララァ

の想い人ね。隠してるけど話しの端々に感じるモノ。落ち着いていてカッコイイじゃないか。やっぱり男は３０からだね。悔しいけどこうして見ると似合いの二人だよ。…Ｔじゃないか！

例のガランガランの音と共に二人が入って来た。
ボクは最初からＴを睨んでる。Ｔのほうは、何だラファの側にいるこの若造は？って顔でボクを見る。やがて、気がついて
「ナカムラか？行動が軽薄だと歳を取るのも忘れるのか？」と皮肉を言ってきた。
「お前こそ、この１０年何やってたんだ。Ａちゃんほっといて！」
「じゃあ、こうすりゃイイのか」Ａちゃんの肩を抱いて引き寄せた。
カッとなって「Ａちゃんに触るな！」とボクが怒鳴る。
「入籍しろだの触るなだの、お前の言ってる事は支離滅裂だ！」とＴが怒鳴り返してくる。

「イイカゲンにしなさい！ララァもススムくんもいるのよ！」
Ａちゃんに怒られて我に還る。ほんと、みっともない。

Ｔの方も、恥ずかしくなったのかＡちゃんに、
「ごめん。先に店に行ってる。」と言って出て行った。
ララァが「Ｔさんをご存知でしたか？」と聞いてくる。
「ごめんね。驚かせて…。ボクのヤキモチだよ。Ｔはイイ奴だよ。」
Ａちゃんに「何もかもゴメン。また来る。」とだけ言って店の外に出ていった。
後ろからススムくんが追いかけてきた。
「待ってヨ、ナカムラさん。Ａお姉ちゃんと仲直りするんじゃないの？」
「…そうだね。でも、また怒らせてしまった。しばらくは行けないな。」

お姉ちゃんは、心の中で「待って！」って言ってるのに。聞こえないのかな？

「ナカムラさん、僕たちＨＯＳに食事はイイって言って来たから帰ってもゴハンないよ。」

「そんなに厳しいの。」「家のキマリなんだ。食事はいっしょに。出来ない時は連絡って。」

「…何か食べたいモノある？」「“一楽”のラーメン食べたい！」

小遣いはやっぱり、必要だな。

店のカギを架けながら、

「ララァ、Ｔさんの気持ちはアナタにしか向いてないから大丈夫よ。」

「ちょっとダケ悲しかったけど、平気です。」

「そうね、私も悲しかったわ。まだ、あんな事言うなんて。」

ホント、バカな男たち！

店に向かいながら、大人気ない事をしたと後悔した。

ナカムラの奴、昔のまま現れてヒトの気持ちをかき乱す。

ララァの側にいるナカムラ。オレなんかよりずっとサマになってる２人。

十五の歳の差は大きい。

以前のＡちゃんのように束縛したくないと気持ちも伝えないまま距離をおいていた。

歳相応の相手が出来ても受け止めようと覚悟していたのに。

本当に腹の立つ奴！

休み明け。ススムくんは久々の学校へ。ボクはイシカワさんと一緒

にマンションを出た。
職探しっていうから、取りあえずスーツ。
「お前の便利でいいな。考えるだけでイイんだろ。」服の事を言ってる。
「マァ、そうです。それより、どこに行くんですか？」
駐車場に行かない。「徒歩でいけるんですか？」
「お前の元の職場だよ。オレ付けの秘書にしてやる。そのほうが都合がイイだろ？」
「イシカワさん、今の役職は？」
「アジア支部東京局長だよ。偉くなったダロ？」
「スゴイじゃないですか！」
「なったばかりでね。付き合いばかりが多くて…、現場でワイワイの頃がよかったよ。」
「臨時雇いになるけど、それでイイよな。」
「十分です。ススムくんの件が落ち着けば帰りますから。」
イシカワさんが黙ってる。何を考えてるのかな？
「ところで、ボクの事知ってる人もまだいますよね。」
「女の子たちはいないな。男はけっこういるゾ。懐かしいか？」
そうじゃなくて…、ボクは前髪を全部上げヒタイを出し。ダテメガネをかける。
「何やってんだ？」
「１０年経っても変わってないなんて怪しいでしょ？
ナカムラって呼んでもらってイイですけど、１０年前のナカムラとは別人ですからね。
年齢は２５でお願いします。
そうだ、彼の甥っ子って事なら似ていても大丈夫でしょう。」
「よく考えるな、お前スパイになれるぞ。」
あなたが大雑把なんです。
懐かしい総務。内装は変わったけど以前と同じ場所。Ａちゃんと別

れた場所。
「私の秘書兼運転手をやってくれるナカムラ君だ。急遽臨時雇いって事でお願いするよ。」
「じゃあナカムラ、手続き終わったら部屋に来いよ。」「はい。」セミロングの女の子が書類を持ってきて説明してくれる。
「氏名、住所、年齢その他の記入をお願いします。」ボクが書いている間、ボクの偽造免許証をコピーしている。書き上げた書類を彼女に渡す。彼女はボクの免許証を返しながら
「週末までには通行証が出来上がりますからソノ間はコレを使って下さい。局長のお部屋は三階の突き当たりです。」にこやかに対応しながら白いカードを渡す。一瞬１０年前のＡちゃんを思い出す。
「キミの名前教えてよ」ちょっと驚いて「Ｃです。」握手しながらポケットのアメを渡す
「これからヨロシクね。Ｃちゃん」彼女に手を振り、総務をあとにする。
いつものクセが…。
それでも、１週間もするとソレがボクの社交辞令なのだと総務の女の子たちに認識されていった。

そして、ココにいると思っていたＴが別の職場にいるのを知った。出世頭と言われていたＴがココをやめた理由も。

お昼に彼女たちと食堂に居合わせた際、興味本位でＴの事を聞いてみた。
「知ってるわよＴさんでしょ。カッコ良かったもの。」
「５年前にデリー支局の次長になって帰ってきたらイシカワ局長の右腕になるって言われてたのに　３年前に暴力事件起こして辞表だしてやめたのよ。皆信じられないって言ってたもの」
「その後、イシカワ局長の口利きで大学の研究員になったって聞いてる。」

あのTが暴力事件。確かに信じられない話だ。
…でもボクには関係ない話だ。Tなんか。

それでも、ソノ話が気になり夕食後イシカワさんに聞いてみた。
「東京とデリーじゃ遠くてね。彼も詳しい事は言ってくれないし。
ただ、彼がそうしたのはよっぽどの何かがあったんだと思っただけなんだ。
暴力事件で辞めた人間を雇ってくれる所もなくてね、
結局私の大学時代の恩師に頼み込んで研究員として置いてもらったんだ。
今じゃ恩師もよく紹介してくれたって言ってる。彼は頑張ってるよ。」

デリー、インド、Tに学費を出してもらったララァ…。ララァは何か知ってるのかな?

（6）（後書き）

ウーン、何かレディースコミックみたいになって来た。困った。

(7)

昔、石川さんに勧められた映画。
気に入ってダダにボクの目を通して向こうの映像ライブラリに記録してもらった。
元気が欲しい時は見たくなる。まだ、見れるかな?
映像配信サービスを探す。部分はいくつか見つかったけど1本全部はナイ。
国立図書館を検索する。あった!館内閲覧のみか…。
「何してるの?」
ススムくんがモニター画面を覗きこんできた。
「すっごく、古いお気に入りの映画があるんだけど、見たくなって捜してたんだ。」
「それで、あったの?」
「国立図書館にデータ資料としてあった。館内閲覧ってあるけどプライベートな所で見たいな。」
「Hなヤツ?」
ちょっと驚いた。この間のはカマトトなのか?少年は日々成長なのか?
ボクがススムくんを見ると、イイワケするように言った。
「この間話したボクをいじめる上級生、
会って“ゴメン“って“保健室の先生の話はもうしない“って言ったんだ。
そしたら許してくれて、それからは、マンガ見せてくれたりしてさ。
たまにHなモノ持ってきてからかうんだ。」
フーン。あの後、気になったけどちゃんと解決したんだ。ヨカッタ。

コレならそろそろ帰ってもイイかな。…Aちゃんの顔が浮かぶ。

話を戻そう。

「残念だけど違う。ゴキゲンな曲とダンスがあってね。身体が動くンだ。」

「さすがに図書館で踊るわけにはいかないし。」

「それならね、ボク友達に頼んでみる。」

「なんとか、できそうなの?」

「ウン、“ココロで話せる”友達の中にハッキングの得意なヤツがいてね…。悪い事だよね。」

「悪い事には使わないから、甘えたい!」ダメな大人。

ススムくんが彼と連絡をとる。

「OK!だって。映画の題名は?」

「1980年アメリカ公開、The Blues Brothers!」

しばらくして、ススムくんが

「コピーしてコッチに送ったって。来てる?」

メールをチェック。あった!開いて確認。OK!Good Job!

「彼に“ありがとう”って伝えて!」

さっそくリビングの大きいほうのモニターに映す。

最初ボクとススムくんで行儀よく見てた。

黒スーツ、黒ネクタイ、黒のサングラスの二人組みに笑わされ曲が始まると、身体がゆれる、ヒザを叩く。手があがり、いっしょに手拍子。

その内、ススムくんとダンスを踊ってた。曲に乗り波長をあわせススムくんとシンクロ。

気がついたらリンちゃんまでグルグル廻り出す。イシカワ夫妻も身体をゆらして見てる。

アレサ・フランクリンの“THINK”の曲が終わった時は2人か

ら拍手をもらった。

「よかったヨ。練習したのかい？」とイシカワさん。
「ウウン、身体が動くんだ。」とススムくん。
「ボクらは繋がってんだよナー！」と大人気なくススムくんとハイタッチ！
リンちゃんとも小さくハイタッチ。
「なんか、商売になればいいのに。」とミセス・イシカワ。
「でも。相変わらず歌は残念ネ。」とクスッと笑う。

相変わらず？何で知ってるのボクの音痴を。

「わざと置いていったんじゃないの？
あのカラオケの録音で笑わせてくれたから皆アナタの事、許してくれたのよ。」

カラオケ、録音データ…。忘れてた！Aちゃんの歌声が欲しいって仕掛けてた録音機。追い出されるって思ったのに引っ張り出されて、歌わされて、笑われて…。あの時、録音機動かしたまま忘れてた！

可愛かったけどワガママだった女の子たちに仕返ししてやろうと置いていった映像メモリ。
まさか、ボクの恥まで置きっ放しだったなんて。…2度笑われたんだ。

頭にダダの声
「ギャハハハ…“墓穴掘るときゃ穴ふたつ”ってか！」
掘らしたのはオマエだろうがー！

「盗撮、盗聴。考えてみればアナタのやった事って最低よね。」と

ミセス・イシカワ。
ススムくんとリンちゃんもコッチ見てる。大人の面子台無し。

ボクを庇おうとイシカワさんが言う
「１０年も前のハナシだし、悪気は無かったんダロ。それよりコノ映画面白いね。なんていう題名？」
あなたのご先祖に教えてもらったんです。
「ブルース・ブラザース」
「あれ？その映画は…」
イシカワさんがキーボードをカチャカチャと何か捜してる。
「ウチの映像ライブラリに入ってるぞ。先祖伝来だな。」

「ハッキングなんかしなくてもあったんだね。」とススムくん。

ダダ、こういうのを“燈台元暗らし”って言うのかい？

「ナカムラさん、この間の映画をコピーしてくれた友達がさ、あの映画面白いねっていってたヨ。」
そりゃあ、嬉しいな。気が合いそう。
「名前、なんて子？」「ゴンって言うンだ。」
ゴンか。なかなか使えそうなヤツ、覚えておこう。（悪いオトナだな。）

曲に身をまかせキモチが上昇していくときが最高にイイ気分。
何も考えず、キミと踊れたら、キミと笑えたら、キミと抱き合えた

らどんなにイイだろう。
何も考えず…。Tのバカヤロウ！

ミセス・イシカワは奴があきらめたって言ってたけど会ってんジャン！
ララァをダシに会ってんジャン！
あの日、“お似合いの二人”を見て以来、彼女に会うのが恐いんだ。
Aちゃん、本当にTへの気持ちは無いの？
ボクはコンナだよ。自信ないよ。

ウジウジしてる自分がイヤ！アー！

Tに勝つにはどうしたらいいんだ？
金か名誉か権力か？
金…。向こうにはAちゃんで稼がせてもらった金があるのに。
まてよ。“商売になればいいのに”ミセス・イシカワの言葉が頭に浮かぶ。
そうだ！バンドだ！

…マジかよ。

「ナカムラ様、A様がロビーでお待ちです。」
Aちゃん？
どうしたの？こんな時間。慌ててロビーに降りる。

久しぶりのAちゃん、駆け寄って抱きしめたい。
「外にでませんか？」

言われるまま、外に出る。
彼女が胸に飛び込んでくる。「HOSが見てるから…。」

彼女を抱きしめる。このまま…。あの時みたい。
「私は幸せにしてくれなくてもイイって言いました。」
「これ以上どうすればいいの？」
ボクは何も言えない。
そしてボクが言ったバカな言葉。
「だって、Ｔが…。」
彼女はボクを突き飛ばして怒鳴った。
「ナカムラさんのバカ！」
彼女は走って行ってしまった。

また、怒らせてしまった。

…とりあえず、彼女が無事アパートに帰るのを見届けよう。
ボクはとぼとぼと彼女の後を追った。

ＨＯＳは見ていなかったが、バルコニーからイシカワ夫妻が様子を見ていた。
「何故、私達が一晩で決められた事が１０年かけても出来ないのかしら？」
「いろいろあるんだろう。」とイシカワさんは顔を赤くして答えた。

（7）（後書き）

ＳＦ関係ないなー。
今回はブルースブラザースで大はしゃぎのナカムラです。
そして、バンド編突入なのか？
できるのか？わたし？

（8）

「Aお姉ちゃん。」
「ススムくん“お姉ちゃん”はやめてちょうだい。
もう“お姉ちゃん”って歳じゃないのよ。」
「小さい頃からそう呼んでるンだもの。じゃあ“Aさん”？」
「なんか硬いわネ。“おばちゃん”でイイわよ。」
「…ナカムラさんが“違う！”って怒る。きっと。」

おしゃべりしながら商品のホコリを静電気ダスターで払っていた手が止まる。

「ナカムラさん、どうしてる？元気？」
「元気だよ。昼間はお父さんとセンターに勤めてる。小遣いが欲しいンだって。」

お姉ちゃんのココロの中は“ナカムラさん”でいっぱい。
ナカムラさんのココロの中は“Aちゃん”でいっぱい。
でも会う度、ナカムラさんはお姉ちゃんを怒らせる。
そして、ナカムラさんは落ち込む。
ワケわかんない。
一度聞いてみたいけど、そういうの聞くのは“ダメ”って言われたしナ…。

紙パックのジュースをストローでズズーッと吸い上げる。

「じゃあ、ナカムラさんみたいに“Aちゃん”でイイ？」
チョット、考えて「イイわよ。」と答える。

ガランガランと木製のドアがあいてラファお姉ちゃんが入って来た。
「こんにちは、Aさん。今日は何か届くモノありますか?」
「いいえ、ナイわよ。いつもの店番お願いね。」「はい。」
「ススムくん、いらっしゃい。」「こんにちは、ラファお姉ちゃん。」

またもやガランガランとカウベルが鳴る。
スーツ男が花束持ってスキップして入って来た!
Aちゃんに花束を差し出すと「昔みたいでしょ?」ってニッと笑う。
ナカムラさん?何?その髪型、そのメガネ。お勤めの時はそういう格好?
ボクとラファは眼中に無いカンジ。
「昼間ならいるかなと思って…。じゃあ!」と帰って行く。
あっけに取られる3人。外を見るとセンターの黒クラウン。
後部座席にお父さん。運転席に乗り込もうとするナカムラさんに何か怒鳴ってる。
ナカムラさん笑いながら受けてる。車は、いってしまった。

いきなり、Aちゃんが笑い出す。
今回の二人は違うパターン。そういう事もあるんだね。
…しかし、あれでもボクのチカラの先生なんだ。なんか恥ずかしくなってきた。

次の日もボクは、Aちゃんの店に花束を持って立ち寄る。
イシカワさんに怒鳴られながら。「仕事中だろ!」「ちょっとダケです。」
歌声が聞こえる。「ラヴァーズコンチェルト」だ。ラファかな?
店にはいる。

Aちゃんはいなかった。
「ナカムラさん、Aさん今日はお休みです。」
「具合でも?」
「いいえ、台湾に仕入れに。明日の夕方帰ります。店には明後日から出ます。」
「じゃあ、コレ、ララァにあげる。」ララァに花束を渡す。
「“じゃあ”なんですね。」クスッと笑う。「ごめん。」とボクも笑う。
「歌、イイね。」
「お世辞じゃなく、こんなカワイイ「ラヴァーズコンチェルト」もイイナって思ったもの。」
はにかんで「ありがとう」とララァが言う。
「じゃあ!」と店を出る。
「オマエは!」イシカワさんが怒ってる。
「大丈夫です。会議にはちゃんと間に合わせます。」ボクが笑って車を出す。

その一部始終をTが見てたとは知らなかった。

会議が終わってイシカワさんに頼まれた炭酸飲料を自販機で買って局長室に戻る所を
以前同僚だったヤツにつかまった。
「ヨッ、ナカムラの甥だって?似てるな。」「よく言われます。」
「“ナカムラ”はどうしてる?」「姿をけしたままで、ボクは知りません。」
「ふざけた奴だったからな、そういえば奴とAを取り合ってたTって知ってる?」

Aちゃんを呼び捨てにするな。腹が立つ。
「優秀な人だって聞いてます。」
「そうなんだよ、だけど暴力事件じゃね。今ごろオレらの上司なのに、
　一介の研究員さ。落ちたよな。」
なんだ、コイツは。以前は友達ヅラしてたクセに！
むこうから、イシカワさんが呼ぶ。「何やってんだ、炭酸買ってきたか？」
助かった、ワザとそいつの足を踏んづけて「スミマセン。急いでるんで失礼します。」と
イシカワさんの所へ走っていった。
ザマァミロ！下衆ヤロウ！コレがAちゃんの陰口だったらぶん殴ってるゾ！

……これと同じ事がTに起こったとしたら。侮辱されたのはララァ？

「ナカムラさん、コレ観て！」
ススムくんが動画配信サービスのサイトを見てボクを呼ぶ。
まさか、Hな動画とか…。残念ハズレ。
ん？これは、ボクとススムくん？バックが海中であったり高い山の上であったりと変わっていく。
その前で踊る2人。曲は“ＳＨＡＫＥ　Ａ　ＴＡＩＬＦＥＡＴＨＥＲ”シェキナベイベーだ！
「コレ、どうしたの？」
この間モニターの前で踊ったでしょ。あれをお母さんがカメラで撮って見せてくれたんだ。
それをゴンに見せたら面白いって、編集してくれて、このサイトに

乗せたんだ。
へーっ。…カウント２０，０００回超え！スゴイじゃない！
「ゴンがさ、他に動画あったら、編集してくれるって。」
「でさ、この動画みて自分もやりたいっていう子がたくさんいるんだ。」
「いいんじゃない。映画みたいにさ、大勢で“ＳＨＡＫＥ　ＡＩＬＦＥＡＴＨＥＲ”踊ったらカッコイイよ。」
「みんなに声かけてみる！」なんか、ススムくんイキイキしてるな。
ボクが心配する事なくこのまま古い人類も新しい人類もなじんでいくかも。
それなら、ボクの仕事は終わりだ。そろそろ帰ろう。

ダダ、帰ろうかな。
「Ａちゃんとは、どうするんだ？」
「オレから見りゃお前とＴは互いに意識しすぎだ。」
「お前ら二人で盛り上がって彼女達は、ほったらかしじゃないか。」
彼女たち？
「お前、気がつかないのか？Ｔが好きなのはＡちゃんじゃない。ララァだ。」
えっ？
「そして、Ｔはオマエがララァにちょっかい出してると思ってる。
１０年前みたいにダ！」
ええっ？
「Ｔから見りゃ、オマエはＡちゃんにもララァにも手を出す二股ヤロウだよ。」
えええっ？…こういうのも“恋は盲目”って言うのかな。
「知らねぇよ！」

なんで教えてくれなかったんだよ。
「…面白かったカラ。」

ダダーッ！

台湾のホテル。

携帯の呼び出し音。Ｔさん？珍しいわ。
「Ａです。」
「聞きたい事がある。」
「ナカムラはララァの事をどう思ってるんだ。」
何かあったのかしら？
「直接彼に聞けばイイじゃない。」
「それは…」
「私からは仲のイイ友達同士にしか見えないけど。」
「Ｔさん、そんなヤキモチやく位ならララァにプロポーズしたら？」
「彼女はアナタが好きよ。あなたの気持ちも同じでしょ。何故なの？」
黙ってる。
イライラする。
「電話、切るわよ。」
「彼女は若すぎる。歳相応の相手が似合いだ。」
「今の言葉、ララァが聞いたらきっと泣くわ。」
「Ｔさん、若い女の子に変なウワサが立たないようにって私も一緒に食事させて頂いたけど、
　彼女はもう２０歳よ。私はもう一緒にいかないわ。」
電話を切った。

閉店間際のＡの店

ガランガランとカウベルの音と共にボクは花束を持って現れる。
「Ａちゃん、台湾どうだった?寂しかったヨ。」一回転して花束を渡す。
我ながら変なテンション。（“今夜こそは”の下心は隠したい。）
側でララァが笑いを堪えてる。
ニコッと笑ってＡちゃんが言う。
「いつもお花ありがとう。ナカムラさん、今度来る時はプロポーズ意外すべてお断りヨ！」
ボクは店から追い出された。

Ｔの事、考えなくていいんだと思った途端コレ。
神様は…神様がいればの話だがボクの事、笑いものにしてるよネ。

（8）（後書き）

ナカムラ花束作戦、失敗に終わる。
“ラヴァーズコンチェルト”はサラ・ヴォーンが有名ですが
ララァはシュープリームスのカンジで。

（9）

ススムくん達の“ＳＨＡＫＥ　Ａ　ＴＡＩＬ　ＦＥＡＴＨＥＲ”は圧巻の出来だった。打ち合わせ2回と思えないほどのシンクロダンス。動画配信サイトに投稿すると、問い合わせが続出。今や話題の的だ。ＴＶや雑誌への対応はミセス・イシカワが引き受けてくれた。ススムくんとゴンは次の作品に取り掛かっている。彼らの感応力が一糸乱れぬシンクロダンスを生み出すことは理屈では判っていてもコレ程とは思わなかった。“彼ら”を世界に受け入れてもらう助けにならないだろうか？

センターの黒クラウンで店内を伺いながら頭の“スミ“で考えるナカムラだった。

「なんで、こんな所に駐車してストーカーまがいの事をしてるんだ！」

「いいじゃないですか。車返したら、帰るだけでしょう？マンションから車出勤してもいいのに律儀にその度、車返すのはイシカワさんぐらいですよ。」

「オレまでストーカーみたいでイヤだと言ってるんだ！」

「ストーカーなんて…。僕らは愛し合ってるんですよ。ホラ、こっち見てる。」手を振る。

Ａちゃんはツンと横を向いて奥へ行きお客と何か話してる。

「なんで、ソッポ向かれてるんだ。また、怒らせたのか？」

ワザと怒らせてるワケじゃないのに…。

気がつくと向こうからＴが歩いてくる。眉間にシワ寄せて。

思わず見られぬよう、身をふせる。後部座席のイシカワさんまでつられて身をふせる。

「なんだ？どうした？」とイシカワさん。

TはAちゃんの店へ入る。にこやかに会話しているようだったがラファが顔を手で被うとAちゃんが何やら言いながらTを店から追い出した。しばらく立ち尽くしていたが、もと来た道を戻っていった。

「ナカムラ、Tを追え！」「なんで？」

「なんでじゃない！お前はオレの運転手だろ！」

渋々車を出す。Aちゃん、明日も来るからね。

ソロソロと車はTを追う。Tと並ぶとイシカワさんは窓を開けさせた。

「T、久しぶりだな。」と笑いかける。

近づいて来る不審車に不安気な表情のTがイシカワさんの顔を見るとホッとして笑い返した。「ご無沙汰してます。」

イシカワさんは車を止めさせ、降りるとTを車に押し込んだ。

「メシまだだろう？積もる話しもあるし。メシ行こう！メシ！」とか、言いながら。拉致？

「メシって、何処いくんですか？イシカワさん。」とバックミラーを見ながらボク。

“角屋”でイイだろ。」「だから、車はセンターに返して歩きだ。」

「もっとイイ所あるでしょ、接待用の“松下”でイイじゃないですか。経費使って。」

とボクがごねる。

「そういうのはキライなんだ。イザ必要な予算案を通す時に信用のないヤツの要求なんて通らないダロ。」とイシカワさん。石頭だなー。嫌いじゃないけどサ。

「ナカムラ、なんでお前が運転手やってるんだ？」とTが聞いてくる。

「こいつ、スッカラカンでウチで居候してるんだ。小遣いが欲しいっていうからオレの秘書兼運転手で使ってるんだ。」イシカワさん

が答える。
バックミラー越しにガンを飛ばしあうボクとT。
「イシカワさんが秘書も置かず運転手付の所用車も置かず率先して経費節減を行動で示していたのに、お前ごときの為に…。」とボクに向かってTが言う。
カチンと来て「お前こそ、イシカワさんに就職先世話になったクセに！」と返す。
イシカワさんが「似た者同士だな。」と笑う。面目なく黙る二人。

局の駐車場に車を置き、キーを返しに総務に向かうボクにイシカワさんが言った。
「待ってるから早く来いよ。それから“夕食はいらない、遅くなる”ってウチに連絡もナ。」
「えーっ、ボクもですか？」「１０年振りに３人揃ったんだ。イイじゃないか」
Tも“イヤだ！”って顔してますよ。イシカワさん。

“角屋”はイシカワさんのなじみの食堂兼居酒屋だ。入所した頃から世話になってココのオヤジともツキアイは長いとイシカワさんが言っていた。
ボクもTもよくイシカワさんに連れられて来た。
カウンター席とテーブル席が４つの小さな店だ。
店に入ると「いらっしゃい！」とオヤジの声。１０年振り、歳はとったがオヤジ元気そう。「今日はTとナカムラを連れて来たよ。」
ボクとTを見て「久しぶりだネ。…たしかナカムラくんはTくんと同期だったと覚えてるけど…。」「ナカムラ君、歳いくつ？」「…３５」「には見えないねー。」
いいんだよ、オヤジ。ボクのことは。
イシカワさんがお札を２枚渡しながら「オヤジ、コレで３人。適当にお願い。足りなくなったら月末に。」と。「わかった。とりあえ

ずビール？」とオヤジ。「そう、ビール。」とイシカワさん。
カウンターにイシカワさんを挟むカンジでTとボクが座った。
オヤジがカウンターの上に瓶ビールとグラスを置くと「ナカムラ君、お願い」と言う。えーっ、と思いながら“しょうがナイ”とグラスとビールをそれぞれの前に置きイシカワさんのグラスにビールをそそぎ、自分の分のビールをそそぐ。
「なんだ、Tにも入れてやれよ。」とイシカワさん。しらんぷり。
イシカワさんが「見た目通り成長しない奴でね。」とTのグラスにビールをそそぐ。Tが恐縮して「すみません」とグラスを持つ。
「とりあえず、オレは嬉しい。弟がふたり帰って来た。乾杯しよう。」

それから、オヤジが刺身の盛り合わせや空揚げ、酢の物など居酒屋定番メニューを次々と出してきた。オヤジはカウンターの上にしか置かない。ボクが渋々イシカワさんとTの前に配膳する。そんな事をしている内に他の客も入ってきた。
オヤジが「ナカムラ君、注文聞いてきて。」という。「エーッ、何でボクが！」とゴネるとイシカワさんが「助けてやれヨ、世話ンなってるだろ」と言う。
しょうがナイと上着を脱ぎ、ネクタイを取り注文を聞く。
「刺身盛り合わせ竹ひとつ、焼き鳥2人前、ビール2本です。」
「ナカムラ君、ビールお願い。」
オヤジのヤツ、しっかり使うつもりだな。いいでしょう。しっかりバイト代は頂くからナ。
ボクはオヤジから前掛けを借り腰のヒモを結ぶ。客が入って来た。
「いらっしゃいませー。」とあいさつする。何でこうなるんだ？

休日前夜のせいか客は入れ代わり立ち代わりひっきりなしダ。野郎ばっかりなのが残念。女性が来ても同伴だし。イシカワさんはTにデリーでの事を聞いてる。あれから3年、Tが殴った男は現在セク

ハラで訴えられてる。もしも似たような事で君が彼に手を出したのなら私は君の弁護をすると。君の復職を上に申し出たいと。君は優秀な人材だ帰って来てほしいと。Tを口説いている。Tはイシカワさんに応えない。店の雑音で聞こえてはこないが、ふたりの会話は頭に入ってくる。

酒でガードがゆるくなってTのララァへの気持ちや今までの事が流れ込んでくる。

デリーにいた頃のララァ。初めて会ったのは15歳。支局の門前で果物を売りに来てた。学校の宿題をしながら、帰りの職員を目当てに果物を売っていた。地元の教科書が珍しくて見せてもらい、ついでにバナナを買ったのが最初。カワイイ友だちが出来た位にしか思わなかった頃の事。ララァからは地元の言葉を習う替わりに勉強を見てやった。そのうちララァが家の事情で上の学校に行けない事がわかった。ボクはララァの父親に会い学費を援助したいと申し出た。父親は「見返りは何か?」と聞いてきた。ムッとしたが「友人として」と答えた。納得はしていないようだが「ありがたく、受けよう」と応えてくれた。

彼女は上の学校に行けるようになって、少しでも恩を返したいとボクの部屋の掃除や食事の世話をするようになった。そんな事はイイから勉強して奨学金を取れと大学を目指せと出来れば外国も見ておいでと彼女を励ました。彼女はそんな世界があるんだと、いってみたいと目を輝かせていた。

彼女は期待通り学校で一番の成績を取り、奨学金も大学への進学も約束されていた。そして卒業まであと1年という時、事件は起った。

現地職員への蔑視で以前から評判の悪い日本人職員が話かけてきた

「次長、どうやって女囲ったんですか?」

「しかも、あんなカワイイ娘」

「自分にも味見させて下さいよ。」
気が付いたら殴り倒していた。

うかつだった。独り者の男の部屋に年頃の女の子が出入りする事を周りがどういう風に見るかなんて考えもしなかった。ララァへの配慮のなさに我ながら腹が立った。
起こしてしまった暴力事件は辞表を出す事でセンターにはケジメをつけた。奴が訴えるなら訴えろと腹をくくったが何も起こらなかった。後からデリー支局長や、現地職員が奴に「訴えるのであれば不祥事を起こしたケジメをつけてから訴えろ」と辞職を迫ったからだと知った。
ララァの父親に会い、ワケあって仕事をやめ日本に帰る事になった。残り1年分の学費と大学に進学するための費用としてお金を用意した。受け取ってほしいとお願いした。
父親は仕事をやめる理由を聞いてきた。彼女が傷つくだろうと黙っているつもりだったが自責の念が父親に事のあらましを話させていた。父親は話を聞いてボクにいった。
「ララァを妻として迎えてほしい」と。驚いたと同時に彼女を女性として見た事はないし、広い世界を見せてやりたい、その為にもぜひ大学へいかせてほしいと言った。
父親は不思議そうに「日本人とはそういうものか、とにかく学校は約束通り行かせよう」と答えてくれた。
日本に帰ると、どうやって知ったのかイシカワさんが空港で待っていた。
ウムを言わさずボクを車へ押し込み、大学の研究員としてどうか？と言ってきた。
確かにボクを受け入れてくれる職場はそうナイだろうと申し出を受ける事にした。
それからしばらくしてAちゃんがセンターを辞め、店を開いたと聞いた。

祝いがてら店を訪ねた。「お帰りなさい。プロポーズしに来てくれたの?」と茶化す。
祝いの花束を渡しながら「どうせ、断るんだろう?」とボクも返す。
二人で笑う。
いつも通り明るくてキレイだ。でも不思議とココロがざわつかない。
それから半年後ララァから電話がかかってきた。父親には連絡先を伝えていたが、まさかララァから掛けてくるとは思わなかった。「日本に留学したい」と言ってきた。
ボクは勤めている大学の学生課に留学生を受け入れる制度とそれに付随する奨学金があるかを尋ねた。「ある」という事でララァにその旨を伝えた。なぜかココロがざわついた。
春になりララァがやって来た。迎えに行った空港で彼女を見た時、驚いた。
1年見ない間にずいぶんと大人びたカンジになっていた。
元々キレイな子とは思っていたが…。
それでもデリーにいた時のように無邪気に抱きついてこようとした。
ボクはあわてて彼女を止め、
「日本では人前でそういう事はしないんだ」とウソをついた。
ボクは初めて彼女に対する自分の気持ちに気づいた。
留学生の担当の職員に会わせ、学生寮に送りとどけ「やる事があるから」と
逃げるようにその場を去った。気持ちのやり場に困り聞いてほしくてAちゃんに会った。
「好きな人が出来たなんて、ステキじゃない」と喜んでくれた。
「18歳なんだ。」「ボクの事を親切なオジサンぐらいにしか思ってない」
「ボクの気持ちに気づいたら、敬遠されるだろうな。」
「でも、彼女が大学を卒業するまでは見守っていたい。
だから、Aちゃん。ボクと彼女の仲立ちしてくれないかな?」
「以前と同じ失敗はしたくないんだ。」とデリーで起こった事を話

した。
「そんなに、臆病にならなくていいのに」と言いながら、彼女は承知してくれた。

そういう事でしたか。臆病なT。
彼女は十五の時からキミへの気持ちは変わらないよ。
自分の国を出て遠い日本に来たのもお前がココにいるからさ。
どうせ昼間も「彼女にふさわしい男が現れるまで…」とか言ってララァを泣かしたんだろう?ボクも言えないけどサ。

そろそろ、他の客も帰り残っているのは
ボクとイシカワさんとTだけ…。って二人寝てるし!
「ナカムラくん、ゴクロウサン。もう、上がってイイよ。」
「ふたりを送り届けてやってヨ。」とオヤジさん。

なんだかなー。

（9）（後書き）

ヤロー3人居酒屋編。
なんだか重い。

（10）

タクシーを呼び、二人に声をかける。
イシカワさんは何とかヨタヨタと自力でタクシーに乗り込んだ。
Tは反応がない。男なんて触りたくもないのに…。
面倒なのでチカラを使う。
Tをお姫様ダッコして（ウゲゲ）タクシーの座席に投げ込んでやった。
驚くタクシーの運転手とオヤジ。
「見かけに寄らず、力持ちだなー。」とオヤジ。
さて、まずはTを送ろう…と、何処へ？
Tに声を掛ける。無反応。イシカワさんも同じく。
運転手に催促される、困った。…ララァなら知ってるかな？
ちょっと遅い時間だけどララァを呼んでみる。
“ゴメンよ、Tが酒に酔って寝てしまって…。送ってあげたいんだけど彼の家を知らないんだ”
“大変、とりあえず○○町に向かって下さい。”
運転手に指示する。タクシーは走りだした。
オヤジの店を振り返るとオヤジがのれんを片付けていた。
オヤジ、バイト代忘れんなヨ。

タクシーが○○町に向かう途中、ララァからTのアパートの様子が流れてくる。
そのスーパーは知ってる。スーパー過ぎて最初の信号を左に曲がって…グレーの壁のアパート。
2階、どん詰まりの部屋ネ。部屋の様子がないね？ララァはこの部屋に入った事がないんだ。
どんだけTは石頭なんだか。
“ララァ、場所わかったヨ。ありがとう。じゃぁ、おやすみ”

“Tさんをお願いします。”とララァ。

アパートに着いた。
Tをタクシーから引っ張り出し、Tのカバンを手に持ち彼をおんぶして2階へ。
部屋の前に誰かいる?…ララァ!
「ダメじゃないか!こんな夜遅くに女の子がひとりで!」とボクが言うと
口に人差し指を当てて“シーッ”とボクに注意する。
「心配で、寮を抜けて来ちゃいました。」
来ちゃったモノはしようがナイ。
「ララァ、Tのズボンの右ポケットに部屋のカギないかな?」
「ありました。」
ララァが部屋のドアを開ける、ライトのスイッチはこの辺だよね。
部屋の明りがついた。
几帳面なTの部屋。すごい散らかり様。想像もしてなかった。
本と資料と文字を書きなぐった紙がパソコンの乗ったテーブルを中心に散乱。
そしてクリーニングから帰ってきた洗濯物が無造作に置かれてる。
食事もココではしないのだろう。冷蔵庫にはビールと飲料水ぐらいしかない。
それでも生ゴミが放置されてないだけヨシとしよう。
隣の部屋のベッド。
ここも床に本が山積み。読みかけてそのまま開いて伏せられた本が枕の側にある。
ボクはララァにTの上着をぬがせてからTをベッドに降ろした。
クツと靴下をぬがせネクタイを取りシャツのボタンをはずし、
そのへんに丸まったブランケットをTにかけて明りを消し部屋を出た。
一部始終を見ていたララァが「慣れてるんですネ」と感心する。

これぐらい普通だけど、酔えない身としては確かにさせられる回数はヒトより多いかも。

パソコンの側に置かれた資料。
散らかった部屋の中でコレだけが大切そうにテーブルに置かれてる。
何気に覗いてみた。
“龍”の調査資料？昔のモノだろうか？イヤ、違う。以前のデータを新しく解析し直したモノだ。
何故１０年も前の資料を…。

突然、Ｔが起きだしてトイレに駆け込んだ。吐いてる。
ボクとララァに気づかずそのままベッドに倒れこんだ。
ボクは階下に降り自販機を探すとスポーツドリンクを３本買い部屋に戻った。
そしてララァにソレを渡して言った。
「水をほしがったらコレ飲ませて。２日酔いにはビタミンＣがイイらしいよ。後はヨロシク。」
「がんばれョ！」と部屋を後にした。
後ろでボクを呼ぶララァの声が聞こえるけど無視。
石頭のＴがララァと向き合えるには酒の勢いが必要かもしれない。
ララァお前のガンバリ次第ではボクとＡちゃんとの間の障壁“Ｔ”が消える。
頼むぞララァ。ボクを導いてくれ。

タクシーに乗ってマンションに向かう。
途中、自販機の前で止まってもらって缶コーヒーを３個買う。
タクシーの運転手に「加糖と無糖、どっちがイイ？」と声をかける。
ちょっと驚いて「じゃあ、加糖を…。ありがとうございます。」とコーヒーを受け取る。
再びタクシーを走らせる。

ボクはイシカワさんの隣に座り、冷たい缶コーヒーを顔に押し付け「イシカワさん起きてください。奥さんに怒られますよ！」と耳元で怒鳴る。
ビクッとして目を覚ます。
横目でボクを見て缶コーヒーを受け取り飲む。
「…もうちょっと、起こしようがアルだろ。」とボヤく。
ミセス・イシカワは酒に飲まれる男を嫌う。
酔ったまま帰るとロビーに放置だ。
ボクがイシカワさんに付くまでどうしてたんだろう？
「…Tの頭の中覗いたか？」
思いがけない言葉に驚いた。
「…覗くとかじゃないですけど、酒のせいでダダ漏れでした。」
イシカワさんがボクを利用した？
ボクの表情を見てイシカワさんが言う。
「最初から利用するつもりは無かったンだが…。
オレとTが話してる間、お前がコチラを見るから、きっと何か読めたんだろうなと思って…。スマナイ。」
「Tにはウチに帰って来て欲しい。それにはあの事件の弁明をしなければならない。
何故、あいつは頑なにしゃべろうとしないんだ。」
ボクは、頭の中に入ってきたTとララァの事。あの事件の事をイシカワさんに話した。
「ありがとう、ナカムラ。これで何かしらの手が打てるよ。」
「…お前の事にしても、ずっとココにいて欲しいンだ。」
イシカワさんがボクの目を見て言う。
「ダダさん、何とかならんかナ。」
何とかって、ムリですよ。イシカワさん。
ダダも“ムチャブリすんな”って思ってますよ。

デリーの夏は暑い。
休日の日中は何もやる気がしない。涼しい場所を探し本を読んでるとウトウトしてくる。
そのまま夕方まで寝てしまう。
それでも、ジャマしてくる小さな友人は歓迎だ。
目を覚ますと覗き込むララァ。「どうしたの？何して遊ぶ？」と笑いかける。
僕の目の前にいるのは…ララァじゃない。
これは…今のララァだ！

目が覚めた。
なんで、キミがいるんだ。頭がイタイ。気持ちが悪い。
トイレに駆け込み吐く。洗面所で顔を洗い、何があったかを思い出す。
横になりたい。部屋に戻りベッドに倒れこむ。
「ララァ、水を…」あとは声にならない。
ララァがコップに水を入れて持ってきた。
体をずらしベッドの端で俯いたまま水を飲んだ。
水だと思ったのは、スポーツドリンクだった。イイカモ。ちょっと落ち着いた。
「水を欲しがったらソレを飲ませろってナカムラさんが言ってたので…。」
ナカムラ？昨夜は角屋でイシカワさんと飲んで…。
イシカワさんの問いに答えられなくて酒ばかり飲んで…その後、記憶がナイ。
「なんで、キミがココにいるんだ？」
「ナカムラさんがTさんを家まで送りたいから家の場所を教えてっ

て言われて…」

アイツ、ララァに全部押し付けて帰ったのか！

「ララァ、大丈夫だよ。帰ってイイよ。」

「でも、もう門限過ぎてて帰れないし…。Tさんの事、心配だし…」

気持ち悪くなってまたトイレに駆け込む。戻ってベッドに倒れこむ。

彼女が心配して側に寄ってくる。

寄るな、僕だって男だ。そんなに近寄られると…。

あれから寝てしまったらしい。気が付くと外が明るい。

まだ気持ち悪いけど夜ほどではない。

ララァは帰ったのかな？

何事もなかったと思うが。

シャワーの後、冷蔵庫のスポーツドリンクを飲む。身体にしみ込むカンジ。

深呼吸をする。だいぶ良くなった。

ガチャとドアが開いてララァが立っている。

パンツ一枚の自分に慌てて書類を撒き散らしながら奥の部屋へ。

服を着てララァを探す。キッチンでお湯を沸かしてる。

「ナカムラさんがシジミの味噌汁が効くって言ってました。インスタントでもイイって。」

「それと、グレープフルーツのジュースもイイらしいです。」

「ララァ、ありがとう。もう大丈夫だよ。帰ってイイよ。」

「でも、心配です。」

「お願いだ、帰ってくれ。」語気が強くなる。

「何故、追い払おうとするんですか？デリーにいる時は笑いかけて

くれたのに。」
「日本でのTさん変です。
いつも視線そらせて私の事ちゃんと見ないじゃないですか！」
頭痛がする。腹が立ってきた。
ララァの手首をつかんで壁に押し付ける、身動き出来ないようにして耳元に囁く。
「男の部屋にひとりで入ればこういう事もあるんだ。」
彼女に背を向け「だから、帰ってくれ」と言った。
「私、Tさんが好きです。それでもココにいちゃいけませんか？」
「歳が違いすぎる。歳相応の男を探せ。」
「アナタでなきゃダメです。」
ララァが堪えきれずに泣き出した。
泣きながらTの背中に抱きついた。
払うでもなく向き合うでもなくTはそのまま、彼女が泣き止むのを待った。
やがてララァがしゃべり出した。
母は父よりも１０歳も若かったけど早くに亡くなった。
弟は病気で私よりも先に亡くなった。
一緒にいられる時間なんて歳とは関係ないと。
「僕でいいのか？」
「アナタでなきゃダメです。」
彼女に向き直って抱きしめながら
「キミのお父さんの許しを得たら籍を入れよう。」
「それでイイ？」
「はい。」

カウベルを鳴らしながらナカムラ登場。

今日のカウベルがウエディング・ベルに聞こえる。
「ララァ、おめでとう！」ボクは花束をもったまま、ララァをハグ。
キミは出来る子だと信じてたよ。嬉しくて抱いたまま一回転してしまった。
ララァは目を丸くして唖然としてる。
「これで、じゃまなTがいなくなった。良くやった、ララァ！」
それを奥で聞いてたAちゃんが怒って出てきた。
「アナタはまだそんな事を言ってるの！」

そして、店を追い出された。

ララァは思った。ナカムラさんもAさんとちゃんと向き合わないのだなと。

（10）（後書き）

ララァとTの話がほとんどの今回。
シャァがララァに言ってたセリフ。
ナカムラに言ってもらいました。

（11）

“お前、Aちゃんをどうするんだ?”と言ったのはオレ。
“ダダさん、なんとかならんかネ?”と聞いてきたのはイシカワさん。
すべてはアイツの身体を地球に転送できれば解決する事。
ソレだけの事なんだが…。ソレが問題。

庭のベンチに座って双子のドロ遊びを見ながら考える。
片耳のイヤホンからはナカムラの“ララァ良くやった!”の声が聞こえ、腕の簡易モニタにはナカムラを追い出すAちゃんの怒った顔が映る。
お前のひょうきん度がエスカレートしていくように見えるが不安から、そうしてるワケじゃないよナ?。
オレには“そろそろ帰ろうかな”とか言いながら、限界までソコにいるつもりじゃないよナ?
それが、どういう事かわかっているよナ?

…解決する方法をひとつだけ考えてる。
でも、ムゥの協力とフロルの承諾が必要なのだが…。

フロルが双子に「気がすんだか?」と笑ってる。
洗い場に連れて行き、自分のロングスカートの裾をベルトに挟む。
白くて細い脚にドキッとするが、街から離れた場所だから見る奴もなしヨシとする。
おもむろに双子の服をぬがせバケツの水を頭から掛けてる。
冷たいだろうにキャッ、キャッとはしゃぐ双子。
「そのまま、風呂に行け!」とフロルが言うと裏口から風呂に走っていく。途端に風呂場から子ども達の笑い声や騒ぐ声、水音が響く。

フーッと満足そうに息をつくと、ドロだらけの服をバケツに入れてドロを落とそうとしゃがんで洗い始めた。そこへムゥがやって来て「かーちゃん、メシ！」と催促する。
「もーちょっと、待ってろ。」と言い双子の服をしぼり、カラのバケツに入れた。
フロルがオレに向かって「ダダ、もうすぐ夕飯だからね。」と声をかける。
オレは判ったという風に手をふる。

“結婚が、子どもを持つ事が、一番の幸せとは限らない”
そうかもしれない。
しかし、それを享受しているオレやイシカワさんには
そんな事をお前には言えない。

やはり、お前に“ナッ、イイもんだろう？”て言ってやりたい。

夕食後、オレのモニターをムゥが覗きこんでくる。
モニターにはススムくん達の新作が映ってる。
今度はマイケル・ジャクソンの“スリラー”という曲だそうだ。
ムゥもつられてゾンビダンスを踊る。ノリのイイ曲だ。
「オレも一緒に踊りてぇー！」
「…行ってみるか？」ムゥに聞いた。
「行けるのか？」目をキラキラさせて、こちらを見る。

リビングでＴＶを観るイシカワさんに話し掛ける
「イシカワさん、ボクそろそろココを出ようと思います。」
イシカワさんがモニターの電源を落とす。

「帰るのか？」
「いいえ、いつまでも居候するワケにはいきませんから。」
「近くにアパート借ります。」
「ココは気に入らないか？」
「そういうワケでは…。」
「じゃあ、ココに居ればイイ。」
「ミセス・イシカワが…。」
子ども部屋からボクらの会話を聞いた彼女が現れる。
「私を悪者にするつもり？ちゃんと食費は頂いてるし、
ダーリンも連れ帰ってくれるし、居てくれたら助かるワ。」
「子ども達もあなたに懐いてるし。」
「なっ、帰るまでココに居ろ。居てくれ。」
「…わかりました。お世話になります。」
ボクの表情を見て、
「…まだ、オレに隠してる事があるのか？」とイシカワさんが聞く。
「そんな事はありません。」
とその場を離れる。
「ＨＯＳ，散歩してくるよ。」
「いってらっしゃいませ、お気をつけて。」とＨＯＳが見送る。

マンションから公園へ向かう遊歩道。ベンチに腰かけ、タメイキをつく。

“帰ると誰かが居る”ってのはイイもんですね。イシカワさん。
向こうではずっと、ひとりだったから気がつきませんでした。
“気に入らないか？”なんて、とんでもない。
ボクも…なんて“幽霊”のクセに考えてしまいます。
…ココへの心残りはＡちゃんだけ。

ボクが出来る事は最後の時までＡちゃんの側にいる事。
でも、ボクが消えるのをＡちゃんにもイシカワさんたちにも見られたくない。
最後の時にボクが理性を保っていられるかわからない。
どうなるか不安なんです。イシカワさん。

“ナカムラ、“龍”に会えないか？”ダダの声。
“龍”に？そう言えばススムくんは彼の力を借りてボクに会いに来たんだ。
礼も言ってなかったな。やってみようかナ。

“場所”を意識して集中。雑踏の中にいるような騒音が聞こえ始めダンダンと大きくなる。そして、“龍”を想いうかべる。“龍”があらわれボクを通りすぎていった。

「ナカムラか？」
来れた！ダダの言う通りだ、
目標の位置を特定できなくても意識できれば目標物を探せるンだ。
「龍さん？久しぶりですね。」
「地球には行けたのか？」
「エエ、ありがとうございます。お陰で大好きな人達にまた会えました。」
「それは良かった。ススムがしつこく頼んで来てな。」
「奥さんのほうはどうですか？」
「まだ１０歳だ、子どもだよ。たまに覗きに行ってる。」
「お前からチカラの使い方を教えてもらってから、イロイロ試してる。」
頭にダダの声が聞こえる。
“お前の身体を地球に転送する事が出来るか、聞いてみろ”
無茶言うなよ。

“イヤ、宇宙の大王様だ。ダメ元で聞いてみろ”
物質の空間移動なんて、成功率５％だ。しかも種籾程度の小さなモノ。それも殆どは形を成していなかった。例の記憶を消す機械も地球でダダに教えてもらって作ったものだ。
“お前らのチカラは意思の強さ次第だろ。最初から成功率５％に捕らわれてるから出来ないんじゃないのか？”
…聞くだけ、聞いてみる。
「龍さん、…ボクの身体を地球へ持って行く事は出来ますか？」
「やってみようか？」
「ちょっと、待って！」
失敗したらボクは帰る身体をなくし、ボクの意識は“場所”に溶けてしまうだろう。
「まずは、試してから…。」
“ススムくん、聞こえる？今、部屋に居る？”
“居るよ。”
“今からソコにモノを送るから状態を教えて”
ダダはガードしてるからムゥの目を借りよう。
「龍さん、チカラ借ります。」
龍と意識を繋ぎながら、ムゥの中へ
ムゥの視線の中にダイニングテーブルの上の果物が映る。アレにしよう。
送りたいモノのバックをススムくんの部屋にすり替えるカンジで。
“ススムくん、来た？”
“来たけど…。果物？最初はカタチがあったんだけど、消えちゃった。”
失敗か…。
「こうすりゃ、イイのか？」と龍。
“ナカムラさん、見たことのない果物が来たよ。普通に食べれる”
あっ！ダメ、食べちゃ！…遅いか。たぶん大丈夫だろ。
「さすがですね、龍さん。」なんか、龍のドヤ顔が頭に浮かぶ。

「じゃあ、お前の身体を送るぞ。」

まだ。不安だなー。

“動物を無事送る事ができるまでは安心できないな…。”

“そこは、ゆっくりオレとムゥとで試してみるヨ”

“お前は、やる事やってこい。時間がナイんだろ?”

そう、早くもクスリは2錠目だ。

（11）（後書き）

なんでもアリの“龍”さん登場。
いやー、便利だ。

ＨＯＳの「いってらっしゃいませ、…」
ラジオの“ｓａｔｕｒｄａｙ　ｗａｉｔｉｎｇ　ｂａｒ　ＡＶＡＮＴＩ”を思い出してしまった。好きな番組です。

（12）

そうだ、ボクには時間がない。
龍がうまい具合にボクの身体を転送できればイイけど、出来なければ…。
このまま消えちゃう。
1秒でも長く彼女の顔が見たい。1秒でも長く彼女の声が聞きたい。
1秒でも長く彼女に触れていたい。彼女と…。

「オイ、ナカムラ。道がちがうゾ、何処行くんだ。」…と言いながら、
“向かう所はきっとアソコだ”とイシカワは確信していた。
「…3分で戻って来いよ。」
「イエス、サー！」とナカムラ。
センターの黒クラウンはAちゃんの店の前で止まった。（やっぱり…。）

カウベルを鳴らしてボクは店のドアを開ける。
Aちゃんは「いらっしゃい…」と振り返りボクを見ると“何しに来たの”って顔でにらむ。
ララァはまだ来てない。
「プロポーズ以外はお断りよ。」ってAちゃんが言う。
こんな所でこんな風にプロポーズされても嬉しくないでしょう?
黙っていると「用がナイなら帰ってちょうだい。」
ボクの腕を掴んでいつものように外へ追い出そうとする。
ボクはその手をつかんで引き寄せ抱きしめキスをする。
「今夜、キミの部屋に行くから待っていて。」
「それとバターフィンガーは太るよ。」
彼女は顔を赤くしてヒザでボクの急所を蹴ってきた！

「大きなお世話よ！」
幽霊でも痛いのは痛い！ボクはピョンピョン飛びはねながら車に戻る。
店内の様子を車から見ていたイシカワさんから
「このバカッ！」って怒鳴られた。

ナカムラさん？どうしたんだろう飛び跳ねて車に乗ってく。
店内ではAさんがボーッとしてる。
「Aさん？どうかしたんですか？」と聞く。
ハッと我に帰って「ララァ、ちょっと出かけてくるから後おねがい。」って
出て行ってしまった。
どうしたの？みんな？

局長室でまだ、イシカワさんが怒ってる。
「頼むから、オレのいない所でやってくれ！」
「オレも一緒だと思われるのはイヤだ！」
「弟だって言ったじゃないですかぁ。」と茶化す。
「ナカムラーッ！」また、怒鳴られた。身体に悪いですよ。
ウウ…こちらもまだ痛い。

内線の呼び出し音。
「はい、局長室。警察庁から？はい、替ります。」
「イシカワさん、警察庁からお電話です。」
なんで、警察庁？
イシカワさんが受話器を取る。
「宇宙観測センター東京局、局長のイシカワです。…龍のデータですか？
…明日、昼3時ですね？はい、うかがいます。」

「なんですか？」
「わからん、１０年前の龍の資料を欲しいと言ってる。
詳しい話は向こうでとの事だ。とりあえず昔まとめた報告書を持っていこう。
用意しておいてくれ。」
龍？Ｔの所にもあった龍の資料…。偶然なのか？

夕方、マンションに帰る。
ススムくんの部屋兼ボクの寝室に入る。
…何だ、この黄色のモアモアの群れは！
ススムくんとリンちゃんと…なんとムゥがいる！
「ヨウ、ナカムラのおじさん。」とムゥ。“おじさん”じゃない“お兄さんさん”だ。
「ナカムラさんお帰り！ムゥくん来てるよ。彼、面白いんだ！」とススムくん。
「ナカムラさんお帰りなさい。はい、ヒヨコ。」とリンちゃんが１羽ボクの手に乗せる。
地球のより2倍ほど大きい。後頭部が少し突き出てる。そして丸っこい。
ボクにはなじみの、ココでは異形のヒヨコ。
「どうしたんだ？」
頭にダダの声
“空間移動の動物実験をやってる。”
“ヒヨコで試したんだが８５％って所かナ”
“それがオトナの男でも８５％で行けばイイんだがな”
怖い事、言うなよ。
それより、なんでムゥがいるんだ。こんな力技、アイツには早いだろ。
それに危ない事させているのが知れたらフロルが怒るぞ！

“「身体に覚えさせる事は早いほどイイ」って言うじゃないか。”
“それに、お前の身体をそちらに移す時はもう一人様子を知らせてくれる能力者が必要だ。委員会に隠れてやってる事だしムゥしかいないんだ。”
“フロルはオレを信じると言ってくれてる。お前みたいな無茶はしないよ。”
“それと実験の結果だが、集中度が大きく作用するようだ。龍が実験に飽きてからずっと失敗している。”
“もう、しばらくは無理だろう。ムゥもそろそろ引き上げさせるよ。”
ちょっと、待て！このヒヨコ、どうするんだ！ミセス・イシカワに怒られる！
“こうすりゃイイのか？”突然、龍の声。
今までいた、ヒヨコが消えた。スゴイ。
ボクらも混ざっていたのに区別した上であの質量を…。
“コレならいけそうだナ。タイミングを見て連絡するヨ”とダダ。
「じゃあナ、おじさん。」とムゥが姿を消す。
“お兄さん”だ！

「ナカムラさん、ソレちょうだい。」
リンちゃんがボクに手の平見せて“ちょうだい”のポーズ。
ン？ボクの手にはヒヨコが1羽。忘れてったンだ。
リンちゃんにプレゼントする。

帰る早々、コノ騒ぎ。疲れた…。
でも、希望も持てた。ありがとうダダ、そしてムゥ。
さぁ、これからはオトナの時間だ。子ども達は寝てなさい。

センターの近くの古くて小さな宝飾屋。やる気あるのかなーってカンジの店。
ショーウインドウもほこりが被ってる事もある。ただ、このショーウインドウに飾っている指輪が気になってた。Aちゃんはアジア系にしては髪の毛も瞳の色も薄い。明るい所で見る瞳の色はブラウンというよりオレンジがかったアンバーだ。その瞳の色に良く似た石の指輪。プレゼントするならって思ってた指輪。ちょっと、値は張ったが交渉に交渉の末、半額で手に入れた。
店主に女性へのプレゼントをケチるなんてと、皮肉を言われたが“交渉にかけたコノ労力が愛だ”と自分でもワケのわからん事を言うと感激してさらに値引いてくれた。言ってみるもんだ。
ずっと、琥珀と思っていた石はトパーズという石だと知った。

その指輪をポケットに忍ばせ、こっそりマンションを出ようとすると
「ナカムラさま、どちらへ?」とHOSに呼びとめられる。
「ちょっと、散歩に…」と答えるとススムくんがやってきた。
「散歩?ボクも!」アチャー、ダメだよ。
タイミングよく、ミセス・イシカワが現れ、
「ダメよ、夜遅くから子どもが出歩くのは許しません。」とススムくんを止めてくれた。
助かった。でも、何その目。ミセス・イシカワ何か察してる?
「じゃあ、遅くなるかも…。」とか言いながらその場を離れる。

Aちゃんのアパートへ向かう途中、
酒屋でワインを3本、そしてサーモンピンクのバラの花束を買った。
そして彼女の部屋のドアの前。
ボクにとっては由緒正しき勝負服。夜会服に黒マントに変身!
…でも、プロポーズって何って言えばイイんだ?
思わずしゃがみ込む。
「ずっと一緒に居られないかもしれないけど、一緒に居て下さい」

ってか？
変だろ、ソレ変だろ？
…そうだ！石川先輩が一度使ってみたかったって言ってたセリフ…。

ドアが開いてAちゃんが小声で言う。
「ナカムラさん、中に入って！」
「そんな服でドアの前でしゃがみ込んでいると不審者に見えるワ！」
見えてたの？途端に恥ずかしくなった。

「ドアの前に人カゲを感知するとアラームとモニターが作動するのよ。」
「知らなかったの？」ウーン。知らなかった。

とりあえず花束をAちゃんに献上！笑って受け取ってくれた。嬉しい。
ワインをテーブルに置く。そして…。
ボクはプロポーズをしにきたんだ！コレを言わなきゃ落ち着かない。
ボクはAちゃんの前にひざまずき
「姫、どうかこのドロボウめに　盗まれてやってください。」
「そして、この指輪を受け取って下さい。」
間があって、彼女が左手をボクの前に差し出した。震えてる。
ボクは彼女の薬指に指輪をはめる。少しゴロつくけど目立つ程じゃない。
顔を上げAちゃんを見る。右手は強く結ばれた口もとに、目には涙をためて…。
感激してる…んじゃナイ。笑いを堪えてるンだ！
彼女が堪えきれずに笑い出した。「ごめんなさい」って言いながら…。

傷付いた…。悩んで考えたのに。（3分だけ）

「ナカムラさん、そんな所にいないで出て来てよ。」クスクス笑いながら
彼女が言う。ボクはダイニングテーブルの下にしゃがんでる。
「いいんだ。落ち着くから。」と、すねる。
彼女は酒の肴の支度をしてる。冷蔵庫やシンクやテーブルの間を行き来するAちゃんの細い脚を見てる。フム、いい眺め。でも珍しいな、この色のストッキングは初めてだ。いつもはベージュ系なのに。黒…。
椅子に座り脚を組むAちゃん。リンゴの香りがする。リンゴをむいてるんだ。ボクの目の前に組まれた脚。ロングスカートだから足首しか見えない。「ねぇ、出てきてよ。」彼女が覗き込む。ボクはフンと目をそらす。彼女はまた、リンゴをむき出した。「あの指輪、どこで見つけたの?」「…センターの近くに古くからある宝飾屋があるんだけど知ってる?」返事しながら、気付かれないよう彼女のスカートを持ち上げる。「そこのショーウインドウに君の瞳の色に似た石の指輪があってね…」ふくらはぎ、膝、腿が現れ、ガーターベルト発見!思わず立ち上がろうとしてテーブルに頭をぶつける。
「だから、言ったでしょう。出て来てよ。」
ボクは頭を抑えてテーブルの下から出て来た。マントは邪魔みたい。マントを取って椅子にかける。改めてボクを見て「懐かしいわネ。」って笑う。あの時はこの服でAちゃんに別れを告げたんだ。こんな日が来るなんて思わなかったよ…。そんな事より…。
「ガーターベルト。」
ボクが言うと。途端に彼女の顔が真っ赤になった。
「ねぇ、もしかしたら勝負下着?」
彼女の平手が…。そうそう喰らわないもんネ。その手をつかむ。すぐにボクの手を振り払って、テーブルのワインの栓を開ける。(何で?)
「だって、この間ナカムラさん寝ちゃうし…その気になってほしく

て考えて…」
とか言いながら、その辺にあったコップにワインをつぐ。（グラスがあるのに！）
「考えて？」ボクが聞く。
「B先輩に相談したの。」彼女はコップのワインを一気に飲み干した。（ウソ、大丈夫？）
B先輩…。ミセス・イシカワ！マンションを出る前の彼女の目。知ってたんだ！
ボクまで顔が赤くなる。
彼女が続ける。
「やっぱり、勝負下着だって…。どう？」
スカートをガーターベルトまでたくし上げて見せる。ワオ！
よし、キッチリ勝負つけようじゃないか！
でも…、違う。なんか違う。
彼女は2杯目のワインを空けようとしてる。（恥ずかしいの誤魔化してる？）
「何が違うの？」
「ウーン。Aちゃんは白のほうが似合うと思う！」
彼女は3杯目をコップについでる。（ピッチ早くない？）
「そうなの！私もそう思って買ったの！」
奥に行って下着を持って戻って来た。（足がふらついてる。）
そして3杯目を空け、4杯目をつぐと
「はい。」ってボクに勝負下着を渡す。
ワーイ。絹の光沢、極上レース、透けるシフォン。（変態か？）
彼女は2本目のワインの栓を開けようとしてる。
ボクはドキドキしながら聞く「履き替えさせてもイイ？」（変態だ！）
「どうぞー。」コップにワインをつぎながら返事。
彼女はサッサと黒のストッキングとガーターベルトをぬいでしまった。

あっ！脱がせたかったのに…。まっ、いいか。

よし、出来た。ウーンやっぱり白だね。
Aちゃんには白が似合う。
…肝心の下着の方はまだだけど。
「Aちゃーん、ストッキング履き替えたよー。」って、寝てるし！
ワイン3本全部飲んでるし！
どんなに呼んでも起きないし！

“お前はバカか？”ダダだ。
こら！人のH覗くな！
“白でも黒でもどっちでもイイだろ！どうせ脱がせちまうのに！”
イヤ！彼女は白だ！
“付き合っていられんネ。このド変態！”

しようがないから、彼女をベッドに運んでブランケットを掛けてやる。
ボクのマンションにキミが来た時の事を思い出すね。
顔が見れて、声が聞けて、ボクの指輪は受け取ってもらったし。
今日はまずまずの日としよう。

（12）（後書き）

カリオストロの城の名セリフ。ナカムラに言ってもらいました。
今回、勝負下着に暴走ぎみのナカムラです。
Ｒ１５はみだしてませんよね？

（13）

ララァ、ボクは君を尊敬する。
二日酔いの状態のTをどうやって、口説き落としたのか？
今のボクには想像も出来ない。
Aちゃんはゲロゲロの最中だ。トイレとベッドの往復だ。
可哀相だからボクが運んであげてる。背中をさすりスポーツドリンクをすすめ
ダウン状態の彼女にオロオロしている。やっと落ち着いたのか眠ってくれた。
ボクも彼女の寝顔を見て安心した。
床に座ってベッドに上体をあずけ彼女の寝顔を見ながら寝てしまった。

気がつくとボクの頭を彼女がなでている。
「おはよう、Aちゃん。気分どう？」
「お店出られそう？ララァに連絡しようか？」
ちょっとヤツレた彼女がベッドで微笑んで“来て”って手を広げている。
ボクも笑ってハグ。目覚めたら“誰かがいる”っていいネ。
それがAちゃんなら、なおさらサ。

センターの総務部。
向こうからスキップでやってくるのは…、ナカムラさん？
「おっはよう！Cちゃん！」「今日もカワイイね。」
いつも以上に浮かれているナカムラさんを総務の皆が見てる。
「キー、ちょーだい。」

局用車のキーを渡すと「じゃーねー。」と戻って行く。
ポアント（つま先立ち）、シュネ（回転移動）から大技グラン・ジュテ（跳躍移動）。
そして総務に向かってアラベスク（キメポーズ）。まばらな拍手が起こる。
ドヤ顔のナカムラさんを局長が赤い顔して引っ張って行く。

「ナカムラさん何かイイ事があったのね。」とCは思う。

警察庁からの帰りの車中。

「イシカワさん、さっきの話…。」
ボクはバックミラーに映るイシカワさんを見る。
「ウン、ススムたちの事だね。」
「いつか皆、気づくとは思っていましたが…。彼らはどうなるのでしょう?」
「異質なものは怖れをもって迎えられる…。」目を伏せ腕組みしてるイシカワさん。
「だが、彼らは私達の子どもだ。そうはさせたくない。」
「同感です。」

今朝の最高の気分から、急降下。“うまくやっていける”と思ったのに。

昼過ぎ、警察庁に出向いたイシカワさんとボクが通された部屋には特殊犯罪課主席主任という肩書きの人物が待っていた。
「申し訳ありません。もう少しお待ち頂けますか?渋滞で遅れるとの事で…。」

まだ、誰か来るのか？5分ほどして、ノックの音が。部屋に2人の人物が入ってきた。
「お待たせして申し訳ありません。さっそく始めましょう。」
「内閣調査室のOと言います。」「厚生省のIです。」

主席主任が言う。
「犯罪とは直接関係ありませんし…、警察では対応しかねるという事で
国の機関に報告した内容はこうです。」

１０歳以下の通報者が増加している。
只の通報ではない。
逃走した犯人を短時間で探し出し通報するのだ。
まるで犯人の考えている事が解るかのように犯行の動機、過程を説明し
居場所を突き止めて通報するのだ。
最初は子どもという事もあって参考までにという扱いだったが
警察が捜査した結果と一致する事に驚いた。
そして、そういう子ども達が日ごとに増えている。
彼らの共通点は“１０歳以下”であると言う事だけ。

「これが通報者の年齢別の日毎のグラフです。」
「これは、都内での件数ですか？」イシカワさんが聞く
「はい。現在他府県での詳しい統計を取り寄せていますが
やはり、同じような通報者は目立って増えているようです。
報告は以上です。」

イシカワさんが言う。
「確かに奇妙な話とは思いますが…。
その件と宇宙観測センターの報告した“龍”のデータと何か関係が

？」

「Ｉさんの報告を聞いて頂けますか？」内閣調査室のＯさんが言う。

厚生省のＩさんがイシカワさんに“よろしいですか？”という風に会釈する。

「内閣調査室の指示で通報者の子たちに任意で協力頂いて、ＤＮＡを調べてみました。通常は１対の性染色体と２２対の常染色体ですが彼らは２４対持っています。本来であれば身体的な異常や知的障害が見られるのが通常ですが彼等には見られません。それと、通報の際に軽いケガをしたという少年に頭部ＣＴスキャンをしてもらいました。前頭葉に常人に見られない器官が見つかりました。結果を申し上げます。彼等は私達とは違う人類です。」

再びＯさんがイシカワさんに向かって言う。

「ココから先は笑って頂いても構いません。」

「あらゆる可能性を考えてみて…と言う事でお呼びしました。」

「彼らが生まれた頃にあった事といえば“龍”の出現です。」

「突然現れ、そして突然消え今だに何だったのか謎の存在です。」

「アナタたちの資料を改めて別の研究所で解析しなおしてもらいましたが何もでませんでした。只、数時間の発光現象と水素・ヘリウムを含んだ大量のプラズマの噴出。アノ現象が何かしら影響を及ぼしたのではないかという事位です。」

「当時、アレを観測してたアナタたちは何かを隠してはいませんか？」

「たとえば、アレが意思をもった何者かの仕業…。宇宙人の侵略であるとか。」

皆がＯさんを驚いて見つめ、イシカワさんが噴出した。

「失礼。…ですが、もしそうだとして何故その事をセンターが隠すんですか？」

「危険が去るまで“龍”の存在は隠してましたよね？」
「アレの存在は当時の総理大臣から国の次官クラスの方々は知っていました。」
とイシカワさん。
Oさんが言う。
「宇宙観測センターは国連に所属しています。国連がシークレットと判を押せば、たとえ総理大臣であろうと秘密を知る事はありません。…私が申し上げてる事はそういう事です。」
「そう、言われてしまえばコチラも信じてほしいと言うしかありません。龍の事件以降、私が知る限りセンターが秘密にしている事項は一切ありません。」

このOとIという男の心の中はススムくんたち新しい人類に対して恐怖を抱いてる。
すでにIなどは「いっその事、死者でも出れば、解剖できるのに」とまで考えている。
同じ人類とは思っていない。

「判りました。では、今後のご協力よろしくお願いします。」
「もちろんです。」

イシカワさんが尋ねる。
「今後、彼らをどうするおつもりですか？」
「まずは、現状調査です。厚生省から全国へ通達は行ってるハズです。」
「その後は？」
「国の管理下に置かれるのが安全と思います。」
「もちろん、人権に関わりますから、新しい法を作る必要があります。」
「彼らには人権はナイと？」

「サトリという化物をご存知ですか?彼らはソレです。」
「…私たちを継ぐ新しい人類とは考えられませんか?」
Oはイシカワさんを見て
「アナタ、何か隠してませんか?」と問う。
「イイエ、“侵略”なんて、あまりに偏った考えだなと思ったものですから。」

さすが、イシカワさんだ。ボクだったら「サトリ…」のあたりでぶん殴ってる。

「では、失礼します。」イシカワさんとボクは部屋を後にした。

（13）（後書き）

今回は一気にトーンダウンです。
頑張れ、ワタシ！

（14）

夕方、マンションに帰る。
珍しくススムくんとリンちゃんが出迎える。
ボクとイシカワさんの不安を読み取ったのだろうか？

「ただいま。」とイシカワさんがススムくんとリンちゃんの頭をなでる。
“大丈夫だよ”と、いう風に。
でも、リンちゃんは泣き出した。
イシカワさんは彼女を抱き上げ「大丈夫だから…。」とアヤす。
ミセス・イシカワが“どうしたの？”って顔で出てきた。
ＨＯＳのロボットアームが現れ、タオルをイシカワさんに渡す。
イシカワさんがリンちゃんの涙やハナ水を拭いてやる。
「リンお嬢様“ドタえもん”のお時間ですよ。」とＨＯＳ。
彼女はイシカワさんに降ろしてもらうと、ＴＶへ駆け出していった。

ススムくんが言う。
「どんなに、リンが話し掛けても応えてくれない子がいて…。」
「それで、寂しいって泣いていたんだ。」

警察庁での話を読まれたと思った。
イシカワさんとボクはホッとした。

「話し掛けても応えてくれないって…、どういう事？」とススムくんに話かけながらボクたちの部屋へ向かった。
目の端に「どうしたの？」とミセス・イシカワに聞かれるイシカワさんを見ながら…。

ススムくんとゴンとのＰＶは世界中で配信され、それと同時に彼等のネットワークも広がっていった。新しい人類だけでなく彼等よりも年上のさらにはその親達も巻き込んで。それでも、ネット環境があってアル程度の生活のできる人たちのネットワークだ。ココロを感応しあえるススムくん達が話しかけているのはココロを閉じてしまった仲間たちだった。貧困、戦争、虐待、子どもという弱者であるというだけで暴力を振るわれココロを閉じてしまった仲間。どんなに外に救いを求めてもムダだと絶望し、さらに酷いモノを見ないよう硬いガードをココロにかける仲間たちだった。

「あの子達があのままではボクは心から笑えない。」とススムくんが言う。

そうだね、キミたちはそういう質だものね。

しかし、ココロを開いてくれないのでは呼び掛ける事も出来ない。

“歌姫”でもいれば…。」ボクが言う。

「“歌姫”？」

“歌姫”は歌でココロを通わす事が出来る能力者の事だ。

ヒトの感情に直接訴えてくる音楽や映像は強い力を持つ。

“歌姫”の能力はその力をさらに上回る。

多くの人間を煽動する事さえも可能だ。

危険であると委員会が管理しようとした事もあったが

当時の委員長の“事が起る前に管理しようとは何事か！”

“人は互いに尊重し合わなければならない”と却下された。

（本当の所は委員長が彼女のファンだったというだけなのだが…。）

“歌姫”の能力の使用はその本人の判断にまかされた。

何かしらの実害が発生した場合は裁判の後、判例よりも重い刑罰を処す。となった。
それでも“歌姫”の出現は稀なのだ。
ナカムラが知っているだけでも歴史上２人。
現在“歌姫”は不在だ。

「“歌姫”ならココロを閉ざしても、耳に聞こえてくるからね。」
「ララァお姉ちゃんは歌上手だよ。」とススムくん。
ソレは知ってる。確かにララァの力の潜在性は感じるけど。
“歌姫”がアノ程度とは思えない。
でも、ダメ元でやってみるか？
「ススムくん、誰か楽器を…そうだなサックス吹ける友達いない？」
「いるよ。ホラ、ボクをいじめてた上級生。彼はサックスうまいよ。」
上級生？そういえば、名前も歳も聞いてなかったな。
「名前？リネって言うんだ。１５歳だよ。」
１５歳！五つも下の子イジメテたのか！ウーン、問題ある子かな？
とりあえず会ってみるか。
「会ってみたいな。」
「じゃあ、ナカムラさんが仕事の帰りにＡちゃんの店で落ち合うってのは？」
「ボクとリネは店の前で待ってるよ。」
閉店してからララァに会ってもらえたら手間が省けてイイかな？
「じゃあ、明日落ち合おう。」「わかった。」

「それと、別の話なんだけど…。」
「キミたちの間で警察に通報した子の話とか聞いた事ある。」
「通報？みんなやってるよ。当たり前の事でしょ？」

ススムくんの話はこうだ。

たとえば、ひったくりを誰かが目撃する。その“ひったくり”が逃げていった方向に誰かに呼びかけると応じてくれる子がいる。そうやってリレーして最後に“ひったくり”がどこそこに居ると通報する。悪い事ではないし、皆ゲームのように参加してくれる。というのだ。

ある時は家にいて頭の中に女の人の助けての声を聞いて大勢でかけつけた事もあった。側にいた男は驚いて逃げた。という。

「女の人は、ありがとうって言ってくれたよ。」

「…そうだね。キミたちは正しいよ。」

彼らは困ってる人に見て見ぬふりが出来ない。

そういう質なのだ。だから止められない。

怖れられてるから目立つ事をするなとは言えない。

どうすればいいのか？

「それがどうかしたの？」

「いや、ちょっと聞いてみただけ。」

夕食の後、バルコニーでイシカワさんにススムくんから聞いた話をした。

「そうか、当たり前か…。」イシカワさんが言う。

「厚生省が彼等のＤＮＡを調べるにしても個人情報の保護や、調査費用の予算捻出でそう簡単に調べる事はできないだろう。」

「ただ、あのOやIのようにススムたちに恐れを抱く人間は増えるだろう。
その前に世間に彼等が次代を継ぐ新しい人類なのだと分かってもらう方法はないのか。」「そうですね…。」二人で黙り込んでしまう。

ミセス・イシカワが声をかけてきた。
「ダーリン、身体冷やすわよ。…聞かれたくナイ話なの？」
「違うよ、星がキレイだなーって…。なぁ。ナカムラ。」
ぜんぜん、誤魔化しきれてナイですよ。イシカワさん。

Aちゃん、具合よくなったかなー。
ちょっと、覗いてこようかな？
ススムくんは寝ている。少し離れた簡易ベッドで寝たフリして彼女の部屋の前へ移動。HOSに見つかるとうるさいからナ。

ちょっと遅いかな…。寝てるかな？どうしよう？
ドアが開いた。「モニターに映ってるわよ。」って笑う。そうでした。

「気分、どう？」ボクが聞く。
彼女は日本茶をいれながら「今日一日休んだから、平気。」
「二日酔いなんて、もうコリゴリよ。」って笑う。
なんとなく、視線を外すAちゃん。
そうか、今朝ボクたちは…。なんかボクまで赤くなるじゃないか。
黙り込む二人。

「ナカムラさんの病気って何なの？」
「？」
「治らない病気なの？」
「でも、元気そうだし。１０年前もそれで姿を消したの？」
「何で、ボクが病気なの？」
「だって“一緒にいられない”って…。不治の病かなんかで余命がナイのかって…」
Ａちゃん、そんな風に思ってたんだ。思わず彼女を抱きしめる。そして笑ってしまった。
ああ、Ａちゃん、Ａちゃん、Ａちゃん。それでも受け止めてくれるんだ。
ボクは彼女を抱きしめ笑う。Ａちゃんは呆気にとられている。

でも、Ａちゃん。余命少ない病人に対してキンケリに平手だなんて扱い粗くない？

（14）（後書き）

登場人物がまた一人増えそうだ。
行き当たりばったりで書くから…。

（15）

ヌイグルミかオモチャだと思っていたのよネ。イキモノなんだ。
「ナカムラくん、あれ何？」
リンちゃんの後をフワフワついて行く“ヒヨコ”を見ながらナカムラ君に質問。
「“ヒヨコ”です。」彼がコーヒーを飲みながら答える。私と目をあわせない。
「私の知るヒヨコと随分違うけど…。」
「そうでしょうネ。」向こうを向く。
「リンが気に入ってるから捨てて来いとは言わないけど…。」
「これ以上、変なもの持ち込まないでヨ」
「気をつけます。」
「危険なモノじゃないわよネ。」
「大丈夫です。」
「世話はしないわヨ。」
「バルコニーを開けておけばフンもエサ取りも勝ってにやります。」
「イシカワさんが呼んでるので行きます。」その場を逃げるように出ていった。
何か隠してるわね。

あの“ヒヨコ”が成長したら皇帝ペンギンぐらいの大きさになって飛び回るなんて知ったら怒るだろうな。しかもヒトマネでしゃべるからうるさくなるし…。エサは基本、昆虫だけど、なんでも食べる。なんとかしなきゃナ。

「リンのペットの“ヒヨコ”な…」アナタもその話ですか?イシカワさん。
センターへ向かう途中、イシカワさんが話し掛けてきた。
「“飛ぶ”というより“浮かんでいる”よナ。どういう仕組みなんだろ?」
そう、それは向こうの学者の間でもナゾ。
ダダも挑戦してたけど、しゃべるようになると痛ましくて出来んと、解剖も実験も出来なくて挫折している。
厚生省のIならやるだろうな。50羽くらい送りつけてやろうか。

その日の夕方、Aちゃんの店の前
ススムくんとサックスのケースをもってる少年が立ってる。
顔立ちもカワイイし、女の子にもてそう。もっと乱暴そうな子と思ったけど。
店の中を見てる。視線の先はララァ。
近づいて来るボクに気づいてコチラを見る。
ススムくんが手を振る。
「よろしく。ススムくんの家に世話になってるナカムラだ。」
右手を出すと、握手を返してくれた。
「初めまして、リネといいます。」見たカンジはイイ子そうだけど…。
「ススムは“ボクの先生“って言ってましたけど…。家庭教師の方だと思いました。」
「まぁ、そんな事もしてるよ…。」と返事をにごす。
「それより、キミに彼女の歌の伴奏をお願い出来ないかな?」

ララァを指さしてリネにお願いする。
顔を赤くして聞いてくる。
「本当ですか…！ぜひ、お願いします。」
この子は…。
リネは店内のララァを見つめてる。
ボクはススムくんに呼びかける。
“リネはララァが好きなのか？”
“キレイなお姉さんは大好きだよ。保健室の先生も好きって教えたでしょ？”
惚れっぽいってコトね。しかもお姉さん限定。
（Tはどんな顔するだろう？楽しみ、ヒヒヒ…。）
うわのソラのリネに「ＳＭＩＬＥって曲、知ってる？」
鼻歌で「曲の始まりはこんな風な…」と説明すると眉間にシワ寄せて考えながら
ケースからサックスを出して演奏してくれた。「この曲ですか？」
「そう、そう。」とボク。ススムくんが恥ずかしそうにしている。
どうせ、音痴だよ！
「好きな曲です。彼女が歌うんですか？」「そのつもり。」
「楽しみだなー。」コラコラ、そんなに熱視線送るな。
閉店時間になった。
「ほら、男が3人もいるんだ。店じまい手伝え！」とススムくんとリネを店の中へ押す。
「Aちゃん、店閉めるの手伝うよ！」
「じゃあ、店頭に置いてる商品と日よけ片付けてちょうだい。」
リネはすでにララァに取り入ってる。自己紹介も済んだようだ。
ララァの対応はススムくんと同レベル。しょうがないネ。
Aちゃんが店のカギを閉める。
ボクは帰ろうとするララァを呼び止め「ＳＭＩＬＥ」を歌ってくれないか？と頼む。
「今ですか？こんな街頭で？」と困っている。

そこをなんとか！と手を合わすボク。
するとリネが演奏を始めた。まずは、前奏から。ウマイじゃないか。
リネが“さぁ”と言わんばかりにララァをうながす。
ボクは歌詞カードを彼女に渡す。
ララァが「少しダケですよ。」と歌い始めた。

Ｓｍｉｌｅ　ｔｈｏｕｇｈ　ｙｏｕｒ　ｈｅａｒｔ　ｉｓ　ａｃｈｉｎｇ
笑ってよ　今はつらくても
Ｓｍｉｌｅ　ｅｖｅｎ　ｔｈｏｕｇｈ　ｉｔ'ｓ　ｂｒｅａｋｉｎｇ
笑ってよ　今は傷ついていても
Ｗｈｅｎ　ｔｈｅｒｅ　ａｒｅ　ｃｌｏｕｄｓ　ｉｎ　ｔｈｅ　ｓｋｙ
今は空が雲に覆われていても
Ｙｏｕ'ｌｌ　ｇｅｔ　ｂｙ　Ｉｆ　ｙｏｕ　ｓｍｉｌｅ
キミが笑顔を忘れなければ超えて行ける。
Ｗｉｔｈ　ｙｏｕｒ　ｆｅａｒ　ａｎｄ　ｓｏｒｒｏｗ
恐れや悲しみさえも越えて行ける。
Ｓｍｉｌｅ　ａｎｄ　ｍａｙｂｅ　ｔｏｍｏｒｒｏｗ
だから笑って　明日にはきっと
Ｙｏｕ'ｌｌ　ｆｉｎｄ　ｔｈａｔ　ｌｉｆｅ　ｉｓ　ｓｔｉｌｌ　ｗｏｒｔｈｗｈｉｌｅ
君のために太陽が輝きだすんだ。

すごい…。この間のは鼻歌程度だったんだ。
気がついたら、立ち止まって聞くヒトに囲まれてる。
ララァの歌が終わると拍手喝采。
恥ずかしがってどうしようと顔を赤くして皆にお辞儀するララァ。
リネは親指立ててドヤ顔。

もう、終わりなのかと人々が散り始めた。
Aちゃんもビックリしてる。
気が付いたらTもいた。
ララァの側に寄ると
「こんな才能があったなんて…。音大でも入り直すカイ?」と聞いてる。
お前は教育パパか?大学なんか行かなくっても歌えるダロ!
ボクの側で同じようにTにガンを飛ばすリネがいる。
顔を赤くしてTに寄り添っているララァを見て
「あの人は彼女の何ですか?」
コレを言っちゃ、諦めちまうんだろうな。
「ララァの婚約者。」
「似合わないね。オレのほうがよっぽどイイ。」
…お前、スゴイ奴。波乱のニオイがする。ワクワクする。

さて、“歌姫”かどうかは知らないけど、ララァの歌は使える。

「どっか、録音スタジオをタダで貸してくれる所ナイかな?」
「それと音源を彼らに聞いてもらえる方法だな。」

それを聞いて、リネが
「スタジオだったら、父に聞いてみます。
もう一度、彼女の伴奏をオレにさせてもらえませんか?」
「なんか、…ゾクゾクします。彼女スゴイです。」
「じゃあ、お願いするよ。決まり次第ススムくんに連絡して。」
「はい。じゃあ」
リネはララァの側に寄ると、散々ほめちぎって、
最後にはハグしてホッペにキスまでしていった。
その間、Tの事は無視。若いってスゴイな。
Tは引きつりながらも“オトナ”らしく笑って耐えている。お前秀

げるぞ。
それでもララァの反応が“子ども”に対しての対応だからだろうけど。
ん？アイツ…。Aちゃんにまでハグしてホッペにキスしてる！
「コラーッ、ボクのAちゃんに触るなーッ！」ボクが怒鳴る！
リネが笑って逃げていった。あのヤローッ。
ボクがAちゃんに駆け寄ると「大人気ないわよ。」って笑われた。

頭の中でダダの声が
“前も言ったよな？「墓穴掘るときゃ穴二つ」って”
うるさい！

ボクはララァにススムくんの呼びかけてる仲間の話をして、
もう一度歌う事をお願いしようと彼女の方へ歩いていた。
…そういえばススムくんは？
周りを見回すとススムくんがうずくまって座っていた。
「どうしたの？具合わるいの？」
「ララァの歌がすごくて…。やっぱり“歌姫”じゃない？」
それは、どうかな？
「とにかく彼女の歌をラジオから流して聞いてもらおう。
そうすれば彼らもキミの話を聞く気になるかもしれない。」
「うん。」
「そうだな、ボクよりもキミがララァにお願いしたほうが聞いてくれるかもしれない。」
「言えそう？」
「わかった。ララァお姉ちゃんにお願いしてくる。」
ススムくんがララァの方へ歩いて行った。

（15）（後書き）

ララァの歌う「ＳＭＩＬＥ」はもちろん、チャップリンの「モダン・タイムス」の「ＳＭＩＬＥ」です。

（16）

外が明るくなってきた。ススムくんが起き出す前に帰らないと…。
「ナカムラさん…。」
「ゴメン、起こしちゃった？」
彼女はシーツで身体を隠して起き上がると「待ってて」と言うと隣の部屋へ。
ウーン。そうやってシーツを身体に巻きつけているとローブ・デコルテのウェディングドレスを想像させるね。似合うだろうな。
やがて部屋着に着替えて彼女が戻ってきた。
「一緒に暮らしましょう。」
ボクの手の平に部屋のカギを握らせ、その手が開かない様に小さな両手で強く包み込む。「でも…。」とか「しかし…。」を言わせないように。
プロポーズしたのはボクなのに…。確かに籍も入れてないし、これからどうしようとも言ってなかった。そして、肝心のボクが“幽霊”のようなモノだという事も言ってない。
正体知られたら、ドン引きかな？でも身体がココに転送されれば…。…彼女が傷つく事になってもかまわない。だって、もう手放せない。どんなウソもどんな恥もどんな事もやるよ。覚悟を決めたよ。

「今晩からお世話になります。」顔を赤くして答える。
男としてコレは…。という返事だけど。
「私の事もお世話してネ。」と彼女が抱きついてくる。
「そりゃあ、もうウ～ンと。」とボクが笑う。

なんかムラムラしてきた。おっとＲ１５だった。

朝、センターに向かうボクとイシカワさん。

ココロを閉じてしまったススムくんの仲間たちの話とララァの歌の話を
イシカワさんに伝えた。
そして、彼女の歌を彼らに聞いてもらう為に方法がないだろうかと相談した。

「来年、センターの創立５０周年という事で告知の広告を出してるんだが、
それに彼女の歌を絡ませる事ができないか広告代理店に聞いてみよう。
それと他の地域の支部長たちにもお願いしてみるよ。」
「そんなにイイ歌なら、火がつくかもしれない。」
「お願いします。」
「街頭ライブも短時間でいいから続けてみてイイんじゃないか？」
それもそうだ。話題になれば…。
「そういう子達が救われるのであれば、ススム達の存在を
受け入れてくれる助けになるかもしれないし。」
「そうなって欲しいです。」

「それと、話は変わるんですが…。ボク、Ａちゃんの部屋に移ります。」
「プロポーズしました。彼女も受けてくれました。」

目を丸くしてボクを見るイシカワさん。

「…おめでとう。でも、お前その身体でどうするんだ。」
「身体はダダが何とかしてくれそうです。ずっとココにいます。」
そうか、そうかと言いながら、ボクの肩を叩く。
「それで、いつから移るんだ。」「今夜から。」
「急だな。じゃあ、今日は休んでいいぞ。片付けもあるだろ？
ウチのにもススムやリンにも一言声掛けてやれ。」
「明日の朝はこの間みたいに遅刻するなよ。」

「おめでとう。“やっと”ってカンジかしら？」
皮肉まじりにミセス・イシカワが喜んでくれた。
ボクは笑う。（“やっと”って言うな！）
「でも…。あの“ヒヨコ”は連れて行くんでしょうネ？」
エッ？見るとソフトボールぐらいだったのがバレーボールぐらいになってる。
「お父さん」とか「お母さん」とかリンちゃんの声マネして漂ってる。
「なにか被害でも？」とトボケル。
「“大きくなる”とか“しゃべる”とか聞いてナイわよ。」と彼女。
「そりゃ“ヒヨコ”って言うぐらいですから大きくなりますよ…。」
とごまかすボク。
「まだ、大きくなるの？」
アチャー、まずい事いっちゃた！リンちゃん助けて！
「お母さん、ヒヨコさん連れてっちゃダメ！」
ナイス、リンちゃん！
悔しそうにミセス・イシカワが黙る。

「ナカムラさんリネが何時でも録音できるって！」
「そうか、これからララァと話して時間を決めるからリネに伝えて

くれる？」
「わかった。」
「キミとリンちゃんとはイツでも話せるから寂しくナイでしょ？」
「遊びに行ってもイイ？」
「歓迎だけど…ノックはしてくれよ。」
「？」

閉店に合わせて、Aちゃんの店へ。

店を閉めるのを手伝ってから
「Aちゃん、お願いがあるんだけど…」
「ララァとTとそして君にも聞いてほしい事があるんだけど。キミの部屋を使ってイイ？」
少し間があって
「…いいわよ。」
「ありがとう。」
ララァが「どうしたんですか？」と聞く。
「Tは迎えに来るンだろ？」
「エエ…。」
「じゃあ、Tが来たらAちゃんの部屋に来て。」

ボクはAちゃんとアパートに帰る。
Aちゃんが「どうしたの？」と聞く。
「皆が揃ったらね。」と答える。

Tとララァがやって来た。
「いらっしゃい。どうぞ。」Aちゃんが迎える。
Tと顔を会わすと腹が立って何か言ってしまいそうになるので、

なるべく目を合わせない。Tも何か感じたのか今日は黙ったままだ。
「ナカムラさん、皆そろったわよ。」Aちゃんが言う。
小さなダイニングテーブルに大人が4人。額をつき合わすように向かい合ってる。
「センターでの話だから本当は外にだしちゃいけない事なんだけど最後まで聞いてほしい。」と前置きして警察庁での話をした。
「今後、こういう子ども達は増えていくはずだ。イシカワさんとボクは人類を継ぐ者だと思っている。だから国に管理させたくない。自然のまま普通の子ども達と同じように生活させたい。」
「何故、お前やイシカワさんはその子達を受け入れる事が出来るんだ。」とTが聞く。
「ボクもヒトの心が読めるから。彼らと一緒だから。」
言ってしまった。TもAちゃんもボクの事を“化物”って思うのかな?
「でも、ボクらにも礼儀はある。むやみやたらと人の心を覗いたりはしない。」
「流れ込んで来るモノや飛び込んでくるモノはしょうがナイけど…。」
「でも、ボクらにとって大切な事は感応力なんだ。皆がひとつに繋がっている事を感じあえる事なんだ。だから争いは格段に減るハズだ。知識の共有も容易くなる。説明は必要なくなる。世界は確実にステップアップする。信じてほしい。」
Aちゃんが聞く「私が何を考えているか、わかるの?」
「恐くて、覗けないよ。」Aちゃんが手を握ってくる。
「ありがとう」ボクはAちゃんに言う。彼女は微笑む。
間があって
「Tさん、私もナカムラさんと一緒です。心が読めます。恐いですか?」
Tが驚いている。「イヤ、キミの事は恐くない。…不思議だけど。」
「それと、イシカワさんのススムくんやリンちゃんもチカラを持っ

てる。」
TとAちゃんがボクを見る。
「ススムくん達は貧困や暴力で心を閉ざした仲間達に呼びかけてる。」
「ココロを閉ざしてるから呼びかけが届かなくて彼らはひとりだ。」
ボクはTに「だから、ララァの歌声で彼らに呼びかけたい。」
「ララァのチカラが必要だ。これから騒がしくなるかもしれないけど承諾してほしい。」
「ララァがヤルというなら僕はかまわないよ。」
「ありがとう、T」
「ララァ、明日さっそく録音したいんだけどイイ?」
「はい。」
Tが聞いてきた。
「あのサックス吹きの若造も一緒か?」
「スタジオをタダで貸してくれる。しょうがない。」とボク。
Tがララァに言った。
「ララァ、あの若造には気をつけるンだぞ。」
「そうだ。」ボクも同感。
「もう、ふたりとも大人げないわね。彼は子どもよ。」とAちゃん。
腰に手を廻すハグをやる子どもなんているものか!

（16）（後書き）

“ヒヨコ”は、ホシヅルを登場させようと思ったのですが、ミセス・イシカワをごまかし切れないのでやめました。

（17）

リネはボクらが思うほどふざけた奴ではなかった。コト演奏に関しては…。
彼の父親が経営する音楽メディア屋兼貸しスタジオ。
小さくはあるがスタジオ設備はしっかりしたモノだった。
2，3回練習して、録音開始。リネの演奏は真剣だった。
彼の気迫に同調するようにララァの歌も素晴らしいモノだった。
1度でOKをもらった。
データの入ったメモリをもらう際にリネの父親が
もう2，3曲入れてディスクに出来れば知り合いに売り込むがどうか？と聞いてきた。
目的はララァを歌手にする事ではないので断った。
ボクはリネに「週1で店の前でララァの伴奏をしてくれないか？」と聞いた。
目を輝かせて「喜んで！」と答えた。
Tは…、怒るかな？

「おはようございます。イシカワさん」
イシカワさんが出勤してきた。
「おはよう、ナカムラ。」
ボクはコーヒーをイシカワさんの机に置く。
「ありがとう。」
イシカワさんは携帯ネット端末で今日のスケジュールを確認している。

「イシカワさんこの間言ってた、ララァの歌のデータです。」
ボクはメモリを机に置く。
イシカワさんがメモリを見ると「再生してみてくれ。聞いてみたい。」と言った。
パソコンにメモリを接続し再生した。
「どうです?」イシカワさんは黙って聞いてる。
曲が終わると引き出しから名刺の入った箱を取り出し、その中から何か探してる様子。
「あった。ナカムラ、この人がウチの広告担当だ。」
「連絡取ってララァの歌が使えるか聞いてみてくれ。」
「イヤ、絶対使ってくれる筈だ。」
広告代理店「天通」のササキさんネ。
「センターの各支部長にも一応話しは通したからデータを送ってくれ」
「パソコンに各支部長の秘書のメアドがあるから。」
ボクは各支部に「困っている人達を歌で応援したいという余命短い病気の少女（?）の健気な気持ちを組んでやってほしい。できれば多くの人に聞いてほしい。」と同情を誘うような捏造文書と共にララァの歌を送ろうとした。
イシカワさんに見つかり怒鳴られた。「本当に油断もスキも無いな!」
結果オーライでイイじゃん。
「余命短い病気の少女」を「女性」に書き換えさせられた。盛り上がりに欠けるなー。
「ララァの歌を聞けば、そんな言葉は必要ない!」
オッ、ファン1号?
天通のササキさんは不在だったので伝言して歌のデータを名刺のアドレスに送った。
昼過ぎ、ササキさんから電話が掛かってきた。

「今、進行中の広告のテーマは“未来へ”“地球を守る”なので、もう少しテンポのある曲がイイです。…歌手の方に別の曲を歌ってもらえませんか？」
それでは意味がない。
「彼女は多くの困っている人を歌で応援したいと言ってるので…。ムリを承知でお願いしました。ケッコウです。この歌の話は白紙にして下さい。」
「ちょっと、待って下さい。…惜しいなー。…困っている人たちに聞いてもらえればイイんですよね？」
「はい。できれば早めに…。」
「また、掛けなおします。」
しばらくして電話がかかってきた。
「ウチの会社で国の海外支援策の広告を制作しています。私が担当ではナイのですが、アフリカで展開される広告で彼女の歌を使わせてもらえないでしょうか？」
願ったり叶ったりダ！
「ぜひ、お願いします。」
「では、後ほど担当から電話させます。彼女はプロの人ですか？」
「いいえ、素人です。恐らく楽譜も読めないとおもいます。」
「驚いたなー。何かの時はお願いします。名前は何と？」
「ラ…。ラーラです。」
名前は伏せたほうがイイよな。もしもの場合もあるし。しかし、中途半端な偽名。
「ラーラさんですネ。では、失礼します。」
「はい、ありがとうございました。」
電話を切る。
ヤリ！国内からじわじわと…と思ってたけど、アフリカに流される事になるとは！
よし！うまく転がって行け！

夕方、イシカワさんから「マンションに寄ってほしい」と言われた。
「何か、あったんですか？」
「お前を連れていかないとウチのが怒る。頼む！」
ミセス・イシカワが？…“ヒヨコ”の事だろうか？

やっぱり、“ヒヨコ”の事だった。

ビーチボールの大きさを超えてる。
床に座ったリンちゃんが“ヒヨコ”をハグして「ヒヨコちゃん、カワイイ！」と言うと
“ヒヨコ”もマネして使い物にならない小さな翼でリンちゃんをハグして「ヒヨコチャン、カワイイ！」とクチマネをする。次はリンちゃんが「リンちゃん、カワイイ！」と言うと同じように「リンチャン、カワイイ！」と返して互いにハグしあってる。

どういう遊びだ？

「ナカムラくん、もう限界よ。アレどうにかして頂戴。」ミセス・イシカワが言う。
確かに、あれ以上大きくなるとドアからも出られなくなる。
しょうがない。龍に転送してもらおう。リンちゃんが泣いても知らないゾ。

「リンちゃん“ヒヨコ”さん、オウチに返してあげよう。」
「わかった。」あれ？あっさりしてるね。
“リンちゃん、本当にいいの？”リンちゃんのココロに話しかける。
“お母さんが心配してる。ヒヨコさんがリンにケガさせないか心配

してる”
そうか、さっきのは“ヒヨコ”にお別れしてたんだね。
「お世話かけました。“ヒヨコ”連れて行きます。」

“ヒヨコ”の足にヒモを結び連れて歩く。
遠めにはスーツ男が黄色の大きな風船を持って歩いてるカンジ。
薄暗くなった遊歩道のベンチに座る。
さて、龍にコイツをダダの家に転送するよう、お願いしよう。

“場所”を通って、龍のもとへ。
あれ?反応がナイ。寝てるのか?寝るってあるのか?
…違う。留守だ。ココに龍の“意識”がない!

ダダ!龍がいない!
“そうなんだ。「ちょっと、見てくる」って戻ってこないんだ。”
奥さんの所か?じゃあ、ボクの身体の転送は?
“龍が戻り次第だ。イヨイヨ危なくなったら身体に戻るしかないだろ?”
そんな、プロポーズしちゃったんだぞ!
“前にも言ったろ、想いが強ければ目的の場所、目的の時間に行けるって。”
“実際、ムゥはソコへ行けたし…。”
“ススムくんが引っ張ってくれたからってのもあるが…。”
…ボクには自信が無い。判ってるんだろ?チカラが弱くなってる事を。

そっちに戻ったら、もう地球に行けない。ボクは帰らない！
ダダは黙ってる。
やがて“龍が戻れば解決する事だ。心配するな。”と言った。

気がつけば、“ヒヨコ”が隣にいてリンちゃんにしてたようにボクをハグしてる。
そして「カエラナイ」とボクのクチマネをしてる。
そう、ボクは帰らない！

いつものようにAちゃんの店に寄る。
“ヒヨコ”は店に入れないので、その辺にヒモを結ぶ。
風船のように漂っている。
店内にはリネがいた。
「今日は演奏する日じゃナイだろ？」とボク。
「こんなにきれいなお姉さんが二人もいて、お茶も飲めるんなら毎日来ますよ。」
とヌケヌケとリネがほざいた。
「お世辞も言えるのね。リネくん大人みたい。」とAちゃんがクスクス笑う。
Aちゃん、油断しちゃダメだ。

ララァは“ヒヨコ”が気になるみたい。ずっと見てる。
「ナカムラさん、外にいるのは鳥ですか？」
「そうだよ。」
「触ってもイイですか？」
「いいよ。」
ララァは鳥が好きなのか。

彼女は外へ出て“ヒヨコ”を触る。ボクもついて行く。リネもついて来た。
「ナカムラさん、この子しゃべるんですね。」
「クチマネが上手なんだ。」
「デリーにいたオウムみたい。この子どうするんですか?」
「飼い主募集中。たぶん誰も貰ってくれないと思うけど…。」
「Tさん、飼ってくれないかしら?」
いくらなんでもソレはナイだろう。
「何だったら、ウチのスタジオで飼ってもイイですよ。」とリネ。
Tがララァを迎えにやって来た。
“ヒヨコ”が「Tサン、Tサン」とララァのクチマネをする。
リネがムッとして、
「ララァさんのクチマネで“リネクン”って呼んでもらうからナ。」
と
“ヒヨコ”に言う。

「なんだ、このイキモノは?」とTが聞いてきた。
ララァが「デリーのオウムみたいにしゃべるのよ。Tさん、お願い飼ってあげて。」
「ララァ、アパートじゃムリだよ。しかもオウムじゃないだろ?」
“ヒヨコ”が「Tサン、オネガイ」とTに擦り寄って行く。オマエ売り込んでるのか?
「Tさんが飼えないなら、リネくんにお願いするしかないわネ…。」
とララァが言うと
リネがニターッと笑って「毎日、コイツの様子見に来て下さいネ。」と言う。
それを聞くとTが
「いいや、大学にどっか飼ってくれる所があるかもしれない。今夜はあずかるヨ。」と言ってしまった。(同情するよ、T)
「ありがとう、Tさん!」と抱きつくララァ。顔を赤くして動かな

いT。悔しがるリネ。
よし、“ヒヨコ”はオマエにまかせた。
「T、コイツはベランダにおいとけばフンもエサ取りも勝ってにやるから。」
「放し飼いじゃないか！無責任な奴め！」（そうともいうな。）
Aちゃんが出てきて「お店、閉めるわよ。」と言う。
「ボクが手伝うからララァは帰してイイでしょう？」
Tとララァを見て「いいわよ」と笑う。“ヒヨコ”を見て「風船？」と聞く。

「無責任な奴め！」か…。Aちゃんボクは…。

（17）（後書き）

動物は責任を持って飼いましょう。

（18）

足早にアパートへの道を歩くAちゃん。
ボクはこれから言わなきゃイケナイ事を考えると足取り重くAちゃんの後を歩く。
あっ、微かに懐かしい香り。フルールだ。
「Aちゃん“フルール”の香りがする。」
Aちゃんが振り返り微笑む。
「気が付いた?復刻販売してたから買って付けてみたけど若すぎるかしら。」
と照れてる。
「イヤ、昔みたいで懐かしい…。」
「最近のAちゃん香水付けてなかったのに、なんで?」
「“フルール”は初任給で初めて買ったモノなの。だから、懐かしくて…。でも最初のビンを使い切ってからは香水なんて高いから買った事なかったの。お店始めてからはコーヒーやお菓子を扱うようになったから余計にネ。」
「ボクがその香りを好きなの知ってた?」
「そうなの?」
そう、キミの香りが好きだったんだ。
あの頃は、好きなのに言えなくて切なくて。でも笑顔見たさにふざけて笑わせて…。
いろんな事を思い出させてくれるネ。
ボクがいなくてもTと幸せにしてるだろうと思ったのに1人でいたAちゃん。
ボクを待ってたとは思えないけど。この10年間、幸せだった?
「楽しかったわヨ。正直辛い時もあったけど、過ぎたらタダの思い出だもの。」
軽々と言うンだね。強くなったンだね。

コレからボクが言う事もそうやって受け止めてくれるかな？

「ごめんネ、冷凍モノで。」
「ボクはどうせ食べないし。気にしないで。」と日本茶をすする。
レンジでチンしたグラタンとトーストを食べてるＡちゃん。作ったモノはレタスとキュウリとトマトのサラダだけ。朝はコーヒーとシリアル。昼はバターフィンガーやスニッカーズなどのお菓子。リンゴはよく食べてる。健康的とは言えない食生活。料理をすれば片付けが面倒になるのはわかるけど…。
ボクが３食ちゃんと作ってあげる。弁当も。…でもイツまで？
デザートのリンゴも食べ終え、日本茶を入れ直してくれた。
「本当に何も食べないの？」
「昼食が遅くてね。お腹空いてない。」
「どこか具合でも悪いんじゃない？」
「食べなくてイイんだ…。」
「？」変な返事に不思議そうなＡちゃん。
「１０年前にボクが目の前から消えたのは、手品だと思ってた？」
「あんな格好してたし、イシカワさんもそう言ってたし…。」
「ボクには体がないんだ。こんなカンジ。」
Ａちゃんの目の前で消えて見せる。
Ａちゃんが立ち上がる。ボクを目で探す。「ナカムラさん？」
うろたえてボクを探す。「ナカムラさん！」声が大きくなる。
どうしたの？そんなに驚いて？（普通か？）
ボクが姿を現すと抱きついて来た。強く抱き締めてくる。痛いよ、サバ折り？
彼女の思い出した事が流れ込んで来る。１０年前ボクが目の前から

消えた後、しばらくはイシカワさん達やTに心配かけまいと平気なフリして夜ひとりで泣いてたんだネ。
君がTの部屋を出たなんて思いもしなかった。てっきり、ボクがいなくなればTと一緒になると思ってたから。
「ゴメン、Aちゃん。」ボクはあの後の事なんて考えもしなかった。あやまって抱き締める事しかできない。
これから話す事で彼女がボクから離れるのが恐くて抱き締めたまま自分が地球の人間でナイ事。他の星から意識だけで来てる事。体験した事をチャンネルに流す事で商売している事。皆の事が好きだという事。そして、チカラが弱くなって身体に戻らなければボクのコロも溶けて消えてしまう事を説明した。
Aちゃんはボクから逃げようとしない。じっとしてる。
「ボクの事、怖くナイ?」
「私たちの事、好きなんでしょ?捕まえてバラバラにしたり、食べたりしないんでしょ?」
Aちゃんが茶化して聞いてくる。
「そんな事しないよ。マンガじゃあるまいし。」とボクが笑う。
「でも、帰らなくちゃ。ナカムラさん消えちゃうわ。」
「大丈夫、帰らない。龍がなんとかしてくれる。」
「プロポーズしたのにコンナでゴメン。」
「前も言ったでしょ。今いてくれたらイイって。」Aちゃんが笑う。

次の日の昼過ぎ、「天通」から電話がかかってきた。
ララァの歌は3日後にラジオ・TVの広告のBGMとして使われるとの事だった。
帰りにイシカワさんのマンションに寄ってススムくんに会いララァ

の歌の入ったメモリを渡し、君の友達とネットを使ってラファの歌を広げてくれと言った。君たちの呼びかけも続けてと。

さて、ココロを閉じた仲間たちが救いを求めてきた時の策が必要だ。国内や社会基盤の出来た国ならススムくん達が互いにリレーしあって受け入れてくれる国の施設や支援グループを探せるはずだ。後はそちらにまかせよう。

問題はそうでない国。逃げ出しても連れ戻されればもっと酷い目に会う。

だから彼らは逃げない。確実に彼らを救い出せなければ意味がない。

国の海外支援策。国連の平和維持部隊…。

内閣調査室のO。…彼は使えないだろうか？

リビングにいるイシカワさんに

「Oさんの連絡先って知ってます？」

「用があれば、警察庁を通して連絡してくれと言ってたが？」

直接の連絡先は教えてくれなかったか…。

「明日、休んでいいですか？」と聞く。

「別にかまわんが…。」

“お前、何をたくらんでる”って顔でイシカワさんがボクを見る。

ススムくんの部屋からゴンにお願いした。

“内閣調査室のOという人物の情報が欲しい。どんな事でもいいから。“　と

“何？おもしろそうな事？ハッキングはイケナイ事なんだよ。”

ゴンがからかう。

“ボクらの未来の為の汚れ役、やってくれない？”　ボクも茶化して返事する。

“では「ボクらの未来の為に」。悪事を働く時は大義名分が必要だからね。”　と笑う。

この子はススムくんと同い年と思ったが…。

“ちょっと、待ってて。”

しばらくしてゴンから返事が返ってきた。
“経歴、現住所、職場の住所、電話番号、その他はそっちのパソコンに送ったよ。”
“それから彼は総理大臣の直通電話の番号を知ってるよ”
“日に2．3回は電話の応対があるね。”
“それと、カードの支払い履歴から毎週金曜日に通ってるＢａｒがあるね。”
店の名前は?
“官邸近くの「トリスタン」って店。”
“ありがとう、ゴン。”
“ｙｏｕ，ｒｅ ｗｅｌｃｏｍｅ“

Ｂａｒで酔わせて頭の中を覗くというのはどうだろう?
ちょうど、明日は金曜日。
しかし、あのＯの警戒心を解くには…。
アホと若い女の子かな?
女の子は…ララァしかいないな、もう一人ぐらい欲しいな…。

閉店したＡちゃんの店の前。

Ａちゃんのアパートで着替えてるララァとリネを待つ。
リネにララァの着る服をまかしたがちょっと心配。
昨夜、電話でリネにアルバイトをたのんだ。

「ある男を酔わせてちょっと聞き出したい事がある。」
「それで、ララァを使いたい。君はボディガード出来る?」

「命にかえても！」（よくそんなセリフ言えるな。）
「じゃあ、明日。ララァのバイトが終わったら店に来て。」
電話を切ろうとすると
「ナカムラさん。」とリネくん。
「何？」
「ララァさんがその男の人を“誘惑する”と言う事ですよね？」
（何？ボクを責めてるの。）
「その時の服。オレにまかせてもらえません？」
「姉のステージ衣装とかありますし…。」
「…いいよ。」（ちょっと、不安。）

向こうから、黒っぽいのと白っぽいのがやって来る。そしてAちゃん？
黒っぽいのがララァだね。黒のハイネックにノースリーブのシャツに小さなめの黒のベスト。そして黒の長手袋。下は黒のホットパンツに黒のハイブーツ。ヒール高いな。足、大丈夫？髪はアップにして前髪はワンサイド。クセが強いからキレイなウェーブがついて色っぽいね。お化粧はAちゃんがしてくれたのかな？
フム。以外と肌の露出は少ないけど細い肩と腕、そして太ももを出してくるとは１５歳の選択とは思えないネ。いや、タダのステージ衣装か。肌が白いとエロっぽいけど彼女は褐色だからイヤらしく見えないし…。
そして、キミは誰？
シフォン風のフワフワしたミニのワンピースドレス。ウエスト高めで胸を強調しつつもカワイイ感じ。おとなしげに見えて胸元の浅いVラインとか肩の鎖骨のあたりがみえる広い襟ぐりとかが誘う感じ。歩く度にゆれるふわふわした生地からのぞく生足…じゃないな残念。白い中ヒールのサンダル。正真正銘デート用の勝負服だよね。足は大きめ、チョット筋肉質の細い足首、スポーツしてる娘かな？
服と似たようなふわふわした栗色の髪。顔はカワイイけど…リネじ

ゃないか！
もう少しでだまされる所だった。女性対応モードになる所だった。

「カワイイでしょ？びっくりしちゃった。」とAちゃん。
「カワイイでしょ？ナカムラさん。」
リネがスカートのすそをちょっと上げてお姫様風に会釈。オエッ。
「なんで、お前まで！」
「だって、彼女に危ない事させられないでしょ？」
「正直なところ、彼女よりオレのほうが男受けしません？」
確かに真っ黒な彼女よりは、お前の方が安心感あるよな。
「お前…身を呈してララァを守ると？」
リネがドヤ顔でうなずく。
「わかった。ララァは帰そう。」
リネがボクを制して首を横に振る。
「彼女が街中で恥ずかしがる姿がみたいんです。」
何で、彼女が恥ずかしがるんだ？珍しくもナイだろ。
彼女を改めて見る。中のシャツ。ベストから見え隠れする黒いシャツ。
身体にピッタリ張り付いて殆どハダカと変わらない。
「お前、彼女の身体のラインが見たくて…」
リネが親指立ててドヤ顔。思わずヤツの頭を叩く。
「やめてよ。通報されるわよ。」とAちゃん。
たしかに遠めには腕を制する若い女の子の頭を叩く非道な男の図が頭に浮かぶ。

こんなララァをTに見られたら…。殺される。

「チョット可哀相だけど舞台衣装だって言うから…。でもベストがあるから大丈夫よね。」
「学祭の撮影、頑張ってネ。」

Aちゃんが言う。そういう事にしたのね、リネ。ボクもララァにちゃんと説明してない。
「そうだったんだ。」とララァ。2人揃って納得するんだ。
どうしよう。
恥ずかしそうに人の視線を気にする、ララァを見る。
（なかなかのプロポーション。Tが羨ましい。）
（イヤ…Aちゃんがダメってワケじゃなくて…。）

なんか、リネの気持ちも判らなくもない。（変態か?）

とりあえず、行ってみよー!
ボクはタクシーを呼ぶ。

（18）（後書き）

硬い話にしようとするとすぐ脱線。
スミマセン。軟弱者で。

（19）

タクシーは永田町2丁目へ
「何で、オレが助手席なんですか?」
「お前、今は女だろ。“アタシ”とかって言え。」
タクシーの運転手がチラチラ、リネを気にしてる。
ボクは身を乗り出して、運転手に言う。
「すみませんネ。学祭で映画作ってて撮影に向かうンですよ。隣の
は無害ですから気にしないで…」
リネが“ワザワザいい訳するほうが怪しいだろ?”とかって考えて
る。そして、
“ナカムラさんこそララァの胸、見てるし!”とも考えてる。
当然だ。おまえみたいな若造が隣だったらもっと危ないダロ!
「ナカムラさん、私、どうすればイイんですか?」ララァが不安そ
うに聞いてくる。
「そうだな…。今から行くバーに男がいる。その男はリネの恋人な
んだ。そういう設定を想像して。」ララァがうなずく。ちょっと胸
がゆれたような…。
「それで、キミは彼らの恋路をジャマする悪い女っていうカンジで
…。」
「“白鳥の湖”ですね!」ララァが言う。そうなの?
「白鳥オデットの恋路を黒鳥オディールがじゃまする話ですよ。」
「だから、リネ君が白でわたしが黒なんですね。」
なんか、ひとりで盛り上がってる。ララァがバレエを好きとは知ら
なかった。
ベストにかくれてるとは言え、動く度にゆれる胸に目のやり場に困
る。
（Aちゃんなら、これくらいじゃゆれないゾ。）
「リネ、お前ちゃんと前向いてろ!コドモか?」

タクシーの中は変な空気が蔓延している。大丈夫だろか？

タクシーから降りて、事前に調べた店の地図を見ながらたどり着いた「トリスタン」
古いビルの地下1階。階段を降りていく。どうやら会員制ではナイみたい。
よかった。なんか値段の張りそうな店を想像したけど違うようだ。
ドアを開ける、さらに細い通路が続く。通路の壁には有名人のサインが…ではなく、伝言板のように、書きなぐった文字のメモがびっしりと貼り付けている。外国語のもある。日本語であってもメモの内容はわからない。日付のようでもあるし、電話番号のようでもあるし。ただ地名だけがビッシリ書き込まれたのもある。ただの装飾なのだろうか？

ドアをあける。「いらっしゃいませ。」
ドア近くに控えた店員が話し掛ける。
「3名さまですか？コートやお荷物など何か、お預かりするモノはございますか？」
「3名でおねがい。預けるモノはないよ。」と返事する。
「では、こちらのボックス席へどうぞ。」
この店にはＢＧＭが流れていない。時間も早いせいか客もまばらで静かだ。
店員も男性ばかり。カウンターに酒とグラスがあるから酒場だとは思うがＢＡＲというよりホテルのロビーのよう。…カウンター席にＯがいる！ターゲット発見！
“ララァ、カウンターの男が「彼」だ。”　ララァがカウンターを見る。
“どうすればイイの？”

“彼と少し離れた席に座って。”　ララァがボクらから離れカウンター席へ歩き出す。
椅子に座り、脚を組む。Oがララァを見てる。“ヨシ、つかみはバッチリ。”
カウンターの中のバーテンダーをOが手招きする。
え？それって、まさかの？「あちらの方から…。」ってヤツ！
キターッ。ララァの前にマティーニが！
ララァが笑って彼に会釈してる。Oが彼女に近づいてきた。
真面目そうな顔して手が早いな。しかも表情ひとつ変えないで。
店員に「ボクらもカウンターがイイ。」と告げると、ララァとOの前に割って入った。
「あなた、ララァ君のお知り合い？」
突然、割って入ってきた男にOが驚いてる。
すかさず、ボクとOとの間にリネが割り込んでくる。
「ステキな方。こんばんは、リネです。」
しなをつくってOに媚びてる。（オエッ）。
「…こんばんは、お嬢さん。」
呆気に取られながらもリネに返事を返すO。
ボクはバーテンダーに
「ボクにジン・ライムを…。」
リネに視線を移して
「それと、彼女にソフトドリンクを。まだ、未成年なので。」
「かしこまりました。」
バーテンダーはボクらに背を向け酒を選び始めた。
ボクはOに向き直りながら椅子に座る。
リネも座る。Oもおされるように座る。皆の様子を見てララァもボクの隣に座る。
「初めて入る店なので緊張しました。ララァ君の知り合いがいてよかった。」
ボクはOに笑顔で話し掛ける。

「失礼しました。ナカムラと言います。」
「Oです。」
「イヤーッ、学祭の撮影が盛り上がって、勢いで“大人のバー”を覗きたいってこの子達にせがまれちゃって！」と笑う。
苦笑しながら、「学校の先生が生徒をこんな所に連れて来てイイんですか？」
とイジワルそうに聞いてくる。
（ボクは大学の人間とは言ってないが、そういう事にしよう）
「よくアル事ですよ。指導教授を交えての居酒屋親睦会とか…。1対1なら問題あるでしょうけどネ。そうか、男子も混ぜておくべきだったかな？」と笑う。
「でもね、彼女達ちゃっかりしてるんですよ。どうせ行くなら金もってそうな人のいる永田町がイイなんて言うンですよ。」とまた笑う。
バーテンダーがリネにオレンジジュースを持ってきた。
「どうぞ。」パラソル、パイン付き。
そしてボクにジン・ライムを。
「では、このご縁に。」ボクがグラスを少し上げる。彼も応えてグラスを上げる。
ララァにもグラスを上げて目配せ、ララァもそれに応える。
リネのグラスに軽く自分のグラスを当て飲み干す。
「ララァ君へのお返しに一杯、ご馳走させてください。」とボクが言う。
「…では、お言葉に甘えてジン・トニックを。」
ボクがバーテンダーを向くと“わかりました”という風に棚からジンの瓶を取り出した。
Oはリネに「金を持ってたらイイのかい？」と聞く
「そりゃ、持ってる方がいいでしょう？」と答えるリネ。
ふーん。と言いながら、Oの手がリネのヒザに置かれる。
リネは“もう！”ってカンジで笑ってOの手をつかんでカウンター

に置く。
「じゃあ、今夜オレのところに来る？」
Ｏの手がリネのヒザに戻ってる。しかもなでてる。
「いきなりですか？」と笑ってその手をカウンターに戻すリネ。
頑張れよ、リネ。お前がそうやってる間はララァは無事だ。
しかし、この男こうしていてもガードが固い。
居酒屋なら酔いつぶす事はできてもＢａｒでなんて…。今回、失敗かな？
“ナカムラさん”　ララァが話し掛けてきた。
“リネ君、可哀相ですよ！”
しょうがないな。
「Ｏさん、彼女は未成年なんで勘弁してあげて下さい。」
Ｏが両手をホールドアップしておどけて見せる。
「お願いしますよ。」ボクも応えて笑う。
しばらくすると、やっぱりリネを触ってくる。
リネをどうこうしようとかではなく、リネの反応を楽しんでる様だ。
実害はナイだろう。それでもララァは気になるようで彼らをじっと見ている。
Ｏはララァがヤキモチ焼いてると勘違いしてないか？
“ナカムラさん、向こうにピアノがあります。リネくんに弾いてもらってください。”
“そうしたら、Ｏはキミを触りにくるぞ”
“イヤです。…じゃあ、私も歌います。”
“わかった。”
ボクはバーテンダーに聞いた。
「ピアノ弾いてもイイ？」
「どなたが？」
リネを見て
「彼女が」と答える。
Ｏに手をやくリネを見てバーテンが答える

「お気持ちはわかりますが…お客様がたは耳が肥えていらっしゃいますよ？」
それを聞いてリネが
「望むところですわ！」と言い放つ。
気迫に圧されて「…では、どうぞ。」と言うバーテンダー。
ララァも一緒に席を立ちリネの後についていく。
男ふたりが残されるカウンター。
「へー、ピアノ弾くんだ？」とOが言う。ココロの中で“逃げたな”と言いながら。
「なかなか、うまいですよ。彼女。」とボク。

水をえた魚のようにイキイキと指を鳴らしながらウォーミングアップ。
まずは試し弾き。それだけでも、店内の客がピアノに注目しだした。
ララァに“いくよ”と目配せ。前奏が始まる。
ジャズ風。さすがリネ、店の雰囲気を壊さない配慮を知ってる。
歌われる曲は“ｏｖｅｒ　ｔｈｅ　Ｒａｉｎｂｏｗ”
ミュージカル「オズの魔法使い」で歌われる名曲だ。
リネがどういう風に演奏したいか、歌ってほしいのかが感能力を持つララァならわかる。
だからこそ、これだけ息のあった演奏ができるのだ。
それにしても、ララァ。また、上手くなってる。
もしかしたら、“歌姫”になるには場数が必要なのか？

“力があれば！”
突然、入ってくるOの思考。ララァの歌に聞きほれてガードが、がら空きだ。
やった！ララァのお陰だ。
ボクは彼のココロを覗く。

学生の頃に感じたこの国に対する不甲斐なさと理不尽。
“オレならこうする！”“オレなら解決できる！”“オレなら…”
この国を動かす力が欲しかった。ライバルを蹴落とし官僚の道へ、さらに高みへ。
今では、大臣へ忠言できるまでになった。…はずなのに。やってる事は代議士達の身内の犯罪のもみ消し工作とは！あの、１０歳以下の通報者達はやっかいだ。子どもの正義感を押し通してくる。すでに表に現れては困る事件が５件。ヤツらは今まで反省などした事がない。また同じ事を起こすのだろう。そして子どもの口に戸は立てられない。マスコミにでも知られると…。いっその事、“脅威”であると隔離してしまおうと思いもしたが…。先日の宇宙観測センターのイシカワと言う男の言葉。「彼らに人権はナイと？」の言葉に動揺している。「何を今さら…」と重いながら。彼の目を見返す事ができなかった。苦し紛れに「サトリという化物をご存知ですか？」などと誤魔化して。今まで「ココを越えれば」と何度目をつぶった事だろう。そして、オレはどこまで墜ちていくのだろう？
オレが追い落としたかつての仲間。故郷の彼女。どうしているだろう。

ナカムラが見る限り、Ｏは悪人ではないようだ。それなりの影響力も持ってる。
話せば意外と力を貸してくれるかもしれない。
もちろん、彼にとってオイシイ話であればだが…。

気が付くとステージにはスポットライトがちょうどララァの頭上から照らされている。
光の具合で彼女のシャツが透けて見える！危なっかしい事、この上ない！
だれだ、ライト点けたのは！

早く終わってクレ！

演奏が終わった。客は数人しかいなかったが、皆が彼女たちの為に拍手をくれた。
ララァがおじぎをする。しなくてイイって！客の目が彼女の胸に…。
コラ！リネ。気づいてるクセに早く連れて来い！

「では、Ｏさん。帰りが遅くなると彼女達が寮に入れなくなるので失礼します。」
「楽しいお酒でした。また今度。」彼が右手を出してくる。
「ええ、こちらこそ。」ボクも握手を返す。
戻ってきたリネに「ゴメンね。楽しかったよ」とＯが声をかける。
リネが引きつって「私も！」と答える。（お前、がんばったヨ。）
ララァに「キミはオレが待ってる人物かと思った。勘違いだったね。」と笑う。
…そういう事か。ここで彼は情報屋と連絡を取り合ってたんだ。そして狭い通路のメモ書きも何らかの伝達方法なのだろう。とするとココにいる客も皆、怪しいネ。

ボクは2人を先に出して、会計を済ませる。想定内の額で助かった。
バーテンダーが出てきて、名刺を渡しこの店のオーナーである事よければ、ララァとリネ、ふたりと契約したいと言ってきた。
とりあえず、二人に伝えます。とだけ言った。

外に出ると二人が待っていた。
「店のオーナーがキミたち二人と契約したいと言ってるけど。」
「無理ですよ。オレ１５ですよ。」
「リネ君がいなければ私もダメです。」
リネが感激してララァに飛びつこうとする。
あのハダカ同然の胸に！

さすがに何かを感じたのかララァがリネをかわした。
「ララァさん、酷い！」当然だろう。
「何だか、タクシーの中での話と違ってましたネ。」
「彼の、Oさんの事を調べてたんですか？」
さすがに気づいちゃったか。
「ちょっとね。彼がボクらの味方になってくれないかなーと思って」
「Oさん、何だかTさんに似てますね。」
驚く事を言う。でも、言われて見れば石頭だし、融通利かないし、不器用だし
違うのは自分の道を見失った事かな。
「何、言ってるの。Tはあんなにイジワルじゃないよ。」
ララァが照れて笑う。リネは面白くない。

「何だ、その格好は！」
驚いて振り返るとTがいる！なんでTがいるんだ！
「迎えに来てもらいました。どうせ明日は休日だし泊めてもらおうと思って」
「そんな～！」リネがへたる。ショックなのは判るが今は逃げろ！
「じゃあ、後はヨロシク。」ボクはリネを抱えるように脱兎のごとく逃げた。

ナカムラの奴、ララァに何をさせてるんだ。それにしても、あの逃げ方は…。
ララァに近づいてわかった！なんだこのハダカ同然のシャツは！
「ナカムラー！」
夜の永田町2丁目にTの怒声が響く。

「ナカムラさん、リネお腹空いちゃった。ウフッ。」（ウゲゲッ）
「では、お嬢さん。“一楽”でラーメンでもご一緒に如何ですか？」
（ウゲゲッ）

「喜んで！」（ウゲゲッ）
ダダの声がする。
“お前ら、その気持ち悪い遊びヤメロ！”

（19）（後書き）

Ｂａｒでの「あちらの方から…」という、シチュエーションは実際にはあまりナイようです。ネットで調べる限り“実体験”というのがなくて…。やはり、妄想の産物なんですかネ。

今回はＲ１５はみだしてませんよネ。

（20）

土曜の朝。
休日だもの、朝はAちゃんと寝坊していたい…。
だけど休日こそ稼ぎ時、客商売だからしょうがない。
野菜サラダとトースト、ハムエッグ。リンゴ角切り入りヨーグルトをテーブルに並べ、コーヒーを湧かす。
起きてきた、Aちゃん。
「朝食、作ってくれたの。ありがとう。」
「ボクは休みだもの。これぐらいはネ。」
「ココを掃除したら、弁当持って店に行くよ。ララァは土日、休みだろ?」
「ええ、でも私ひとりでも十分よ。せっかくの休みだもの。ゆっくりしたら?」
「Aちゃんと一緒にいたい。」（我ながら歯の浮くような事を…。）
彼女がはにかんで笑う。

Aちゃんの携帯電話が鳴る。
「Tさん?どうしたのかしら?」ディスプレイ画面を見て彼女が言う。
昨夜のララァの服の事か?
Aちゃんが携帯電話に出る。
「ナカムラさん?…」
彼女がボクを見る。ボクは腕で大きくバッテン。
「“居ないって言え”って言ってるわ。」とTに答える。
Aちゃん…。
「今、電話に出るなら殴るのは勘弁してやるって言ってるわよ。」
そして携帯電話を差し出す。
ボクはソレを受け取り、努めて明るく言う。

「おはよう、T。朝から、どうしたのかな?」
「昨夜は何をしていた。説明してもらおうか?」
「ララァから聞いてないのか?」
「あの後、急いで寮に送って行ったから詳しくは聞いてナイ。」
「彼女、お前の部屋に泊まるって…。」
「あんな格好でウロウロされて眠れるか!」
何を言ってるんだ?
「…まさか、ララァとは“まだ”なのか?婚約したんだよな?」
「だから、どうした。」
「お前、身体どっか悪いんじゃないか?」
「うるさい!」
電話を切られた。
しばらくして、電話が鳴った。
「はい、Aの携帯です。」
「話をはぐらかすな!昨日は何をしていたんだ!」Tだ。
ボクのほうは、そっちの話が気になるのだが…。
「協力して欲しい男がいて、そいつの事調べたくて…。」
「ララァに誘惑してもらった。」
ボクはTが怒鳴る前に電話を切る。そしてAちゃんに返す。
電話が鳴っても取るのはAちゃん。彼の怒りは半減するだろう。
あれっ?鳴らないね。
Aちゃんがボクを睨んでる。
「“ララァに誘惑してもらった”ってどういう事?」
聞いてたの?
「大丈夫。ボクとリネで守ってたから何もなかったんだ。」
「サイテイ!」
Aちゃん、怒らないで。
アラーム音。玄関モニターにTが写ってる!
Aちゃんがボクを引っ張って玄関ドアの前へ。
ドアを開けボクを突き出すと

「Tさん、おはよう。」とニコッと笑う。
インターホンを鳴らす前にドアが開いて面くらうT。
それでも「…おはよう。」と返事を返した。
「防犯カメラの無い所でやってちょうだいネ。」と言うと
ボクを置いてドアを閉めた。
逃げ出そうとするボクの襟ぐりをつかんでTがにこやかに言う。
「じゃあ、向こうで詳しく話を聞こうか?」
Tの顔が恐い。イイ男台無しだぞ。

1発、グーで顔を殴られた。Tがフンと鼻を鳴らし尋問してきた。
(身体は無くても痛いんだぞ。気は済んだろ!アザ顔作らなきゃ。
それと靴!)
「殴らないって言ってたじゃないかぁ。」とボクがぼやく。
「Aちゃんに免じて1発で済ませたんだ。感謝しろ。」
「帰る時の様子だと何も無かったようだが…。ララァは何もされて
ないよな?」
なんだ、そのゲンコツは?
「大丈夫だ。ボクとリネで守ってたから指1本触らせてない。」
「リネ?何処にいたんだ?」
「ボクと一緒に逃げた女の子がリネだ。」
「Ｂａｒのカウンターでララァに寄ってきた彼との間にボクとリネ
が座って相手してたんだ。だから、触られたのはリネだけだ。」
Tが眉間にシワを寄せて言った。「そいつに同情するよ。」
「何、言ってんだリネのお陰でララァは無事なんだぞ。彼に感謝し
ろよ。」
「お前とリネの二人で行けば、すんだ事じゃないか!」
ごもっとも。
「それに、挑発しすぎダロ!なんだ、あの服は!」
「服はリネが用意した。」

「ヨシ。あいつも一発だな。」
「子ども相手によせよ。大人気ない。」
「あんな服、選んでくる子どもがいるか！」
ごもっとも。

「お前は、お前たちを化物呼ばわりするヤツを仲間にするのか？」
Tが聞いてくる。

「アフリカに平和維持軍として日本の部隊も派遣されてる。」
「彼らの所にそういう子達が逃げてきたら保護しないワケにはいかんだろ。」
「もし、見てみぬフリをすれば、世界中から非難されるしネ。」
「でも、彼らを救う事が出来れば日本は見直されるし、これから増えていくススムくん達のような新しい人類を味方につける事ができるとOに交渉しようと思う。」

Tが心配そうに言う。
「そんな、簡単に行くのか？」
「お前が逆手を取られるかも知れないゾ？」
「“虎穴に入ずんば虎子を得ず”ってな。」とボクが笑う。
「そうだ。Oはお前に似てるってララァが言ってたゾ。」
「オレはあんな酷い事は言わない。」
ソノ通りだ。

部屋に戻るとAちゃんは居ない。店に行ったようだ。
さて、主夫はいそがしいゾ。

昼前、弁当を持ってAちゃんの店へ。

ララァが居た。
「どうしたの？今日は休みでしょ？」
「今朝、寮にリネ君から電話があって、
街頭ライブしないかって言われて…。」
「休日の方が聞いてくれる人も多いでしょって。」
そりゃ、そうだ。昨日の今日だというのに感心な奴。
「お客さんが来てくれるなら、私も嬉しいわ。」とAちゃん。

カウベルが鳴ってリネが入って来た。
「こんにちはー。」
「今日はラヴァーズ・コンチェルトとスマイルの2曲で行きましょう。」
はりきってるな。「たのむよ。」とボク。
「まかして下さい。」リネが笑う。
ララァに向かって「アレは？」とリネ。
ララァが紙袋を渡しながら「そのままでイイの？」と聞く。
「かまわないから。」と言いながら、
「じゃあ、外で待ってるから」とサッサと外へ出ていった。
なんか、不審な行動。怪しい。
「ララァ、何を渡したの？」
「昨日の衣装です。クリーニングして返すって言っても聞いてくれなくて…」
まさか！外へ出てリネを探す。店の横でコチラに背を向けてしゃがんでる。
ボクは奴の頭を背後から叩く。
「何、嗅いでるんだ！」驚いてリネが振り返る。
ン？視線がボクの後ろ？Tだ！
「ララァが歌うと聞いて、来てみれば…。」
逃げようとするリネを捕まえるT。
「T、演奏するから顔と手はカンベンしてやれ。」

「わかった。」
Tにコブラツイストを決められて、
「イタイ、やめて！」と悶絶するリネ。
歩行者が見てる。
「プロレスごっこしてるんですよ。仲のイイ親子でしょ？」と
笑顔で説明するボク。
演奏の前座としては…残念だ。

最初はヨロヨロとしてたリネだが、演奏が始まるとシャンとしてる。
そして年上のララァをリードする。彼女も彼を信頼して歌う。やっぱり、以前のラヴァーズ・コンチェルトとは違う。格段にうまくなっている。
「あの二人を見てると不安になる。」Tが言う。
演奏をしてる時の二人。確かにあの二人の間には誰も入り込めない空気がある。
でも、それは演奏の時だけだ。ララァも、たぶんリネも解ってる。
「憶病者。そんな事言ってると、ララァが泣くゾ。」
驚いたようにTがボクを見る。
「だから、さっさとやっちまえ！」
Tに頭を叩かれる。チクショウ！

それにしても気になるのは、ララァとリネを囲む人垣の向こうに止まる黒塗りのベンツ。
車の側に立ち警護するスーツの男が2人。車の中の人物は誰だ？

（２０）（後書き）

リネの変態が前回から続いてます。
若さ所以の過ちってか？
今回はＴの逆襲編。

（21）

日曜日の昼、Aちゃんの弁当を作っているとアラーム音が。
誰だ？モニターを見るとススムくん。珍しいね。
「いらっしゃい。ひとり？」
「うん…。」ススムくん元気がナイ。
ボクはダイニングテーブルの椅子をすすめる。
「弁当が出来たら、Aちゃんに届けるけど、一緒に行く？」
「うん…。」
どうしたんだろ？
「ナカムラさん、あの子達が応えてくれた。」
「ララァお姉ちゃんの歌のおかげだね。」
そうか、ララァの歌を聞いてくれたんだ。
「どうしたの？嬉しそうじゃないネ。」
「大勢の仲間を皆で助ける事ができて、ララァお姉ちゃんにもナカムラさんにも感謝してるよ。でも…」
「まだ、応えてくれない子がいるの？」
「応えてくれるけど、ボクらを責めるんだ。何しに来たって」
「ジャングルの奥で兵隊の訓練を受けてるからジャマするなって。」
「でも、本当は怖いって泣いてるんだ。殺さなきゃ殺されるって泣いてるんだ」
「ネット通じて大人たちにも、どうしたら助けられるって呼び掛けてるけど、内部干渉だって、難しいってしか言わないんだ。」
「もう、十分やったって言うんだ。でも…。」
「諦められないんだね。」ボクが聞く。
ススムくんがうなずく。
「ボク自身は何も出来ないのに…、ワガママかな？」
「満足してないのに満足したフリするのはいけないヨ。」
「諦めていないのはキミだけ？」

「違う、ココロを読める子どもたちは皆、諦めてナイ。」
「じゃあ、“ひとり”じゃないね。」
「キミたちに知恵をくれる人が現れるかもしれない。呼びかけを続けて。」
ススムくんがうなずく。
「その子達の居る場所はわかる？」
「コンゴ東部の山だって言ってた。」
さて、ボクはOと交渉を急がなければ。
「そうだ、ナカムラさん、ゴンが“話したい”って。言ってた。」
「“会いに行く”からって。」
ゴン？日本に来るのか？どういう事だろう。

ボクとススムくんはカウベルを鳴らして店内へ。
Aちゃんはお客さんの相手をしている。
ボクを見て、
「よかった。コチラのお客様、男性へのプレゼントですって。」とAちゃん。
「ナカムラさんなら、どっちがイイ？」
アロマを選んでるお客さん。
ボクはお弁当をススムくんにあずけて、応対する。
「男性の方はアロマをご指定なんですか？」
「いいえ、特に指定はナイです。」
「おつき合いは長いですか？」
「いいえ、初めて部屋に招かれたので、手土産にと思って。」
ボクなら“キミだけで十分”なんちゃって。
「でしたら、コチラのコーヒーをおすすめします。」
「アロマは香りの好みがありますから、ご一緒に選ばれたらイイで

すよ。」
「このコーヒーはボクも飲んでみました。味、香りともに保証します。」
「じゃあ、それをお願いします。」ボクはプレゼント用の包装袋にコーヒーとスニッカーズを2個入れて封をして小さなリボンをかけて、お客に渡す。
「お買上げありがとうございました。」店を出る客にドアを開け笑顔で「またのご来店を」と送りだす。
Aちゃんが「上手ね。」と感心してる。
「カワイイ子限定ならまかせて！」と笑って答える。
「スニッカーズ2個は支払いお願いネ。」ばれてたか。

「ナカムラさん、お弁当は？」ススムくんが聞いてきた。
そうだった。
「ボクは食事の必要ナイから、二人で食べてて。店番はボクがやるから。」
“そんな事、言っていいの！”って顔で二人がボクを見て、次にお互いを見てる。それを見てボクが笑う。
「ゴメン、ススムくん。ボクが“幽霊”だってAちゃんには話したんだ。」
「Aちゃん、イシカワ家はボクの事を知ってるよ。ススムくんがボクを連れてきたんだもの。」
「そうなの？」とAちゃんがススムくんに言う。
ススムくんがうなずく。
「ボクらの事も知ってるの？Aちゃん、恐くない。」ススムくんがAちゃんに聞く。
「全然。」笑ってAちゃんがススムくんをハグする。
「よかった。」ススムくんが笑う。

翌日、朝の局長室。
イシカワさんが出勤してきたら、昨日のススムくんの話をしてＯと繋ぎをとってもらおう。
イシカワさん達を巻き込まない方法はあるかな？
Ｂａｒでの様子だとボクの事、以前会ったのに気づいてナイみたいだし、
途中で待ち伏せるとか？

イシカワさんが部屋に入ってきた。なんか、あせってる。
「おはようございます。」ボクが言う。
「おはよう、客を外で待たせてる。変なもの置いてないよな？」
ああ、この間イシカワさんに捨てられたエロ本ね。
「場所わきまえろ！」って散々怒られたもの。大丈夫ですよ。
イシカワさんが部屋とゴミ箱を一通り見渡して、
「内閣調査室のＯと国連事務総長のゴンザレス・テディーラ氏がお前に会いたいって来てる。お前、何やったんだ？」
国連事務総長？来日してるってニュースでやっていた。
宇宙観測センターへの訪問の予定は入ってない。
突然の視察があるかもしれないって聞いてはいたけど。
アポ無しの朝一番だなんてありえない。

「先日はどうも、ナカムラさん。」とＯがジーッと見てくる。
ボクは職場用モードのオールバックのダテ眼鏡で笑い返す。
「いえ、こちらこそ。」
Ｏがイシカワさんに向き直り
「おたくの秘書は諜報活動もするんですか？」と皮肉を言う。
イシカワさんは何の事だかわからないのでボクを睨む。

「初めまして、ナカムラさん。」ゴンザレスさんが右手を出す。
日本語が上手だ。ボクは恐縮して右手を出し握手する。
“えっ、この人…”
“そうだよ、ゴンだよ。” ゴンザレスさんがニヤッとする。
「ゴン！」 思わずゴンをハグする。
ゴンも笑って、ハグし返す。
男ふたりのハグにギョッと驚くOとイシカワさん。

「まさか、大人だったなんて…。てっきりススムと同じ位と思ってたから。」
イシカワさんも驚いてる。ススムくんの友達ゴンが国連事務総長だなんて。
「以前から私と同じチカラを持つ子ども達が増えているので、ちょっと紛れて遊んでたんです。ネットだと相手の姿が見えないから偏見なく付き合ってくれて楽しかった。」
「そのうちススムくん達が“応えてくれない仲間”達を助けられないかと思案してる事を知りました。」
「ラーラさんでしたっけ？彼女の歌のおかげで僕らの声が彼らに届き、その子達を救う事ができました。」
「本当に感謝しています。」
「でも、まだ終わっていません。」
ゴンがボクを見る。兵隊にされてる子ども達の事だ。
「国連でも問題にされているのですが…。「志願してやってくる若者だ。子どもはいない。」の一点ばりで…。力づくで調べるワケもいかず、常任理事国の中にはその国との利益を共有している国もあり、悔しいです。」
「そんな時にあなたは私にOさんを調べさせた。何かあると思いました。」
「ナカムラさん。あなたはOさんに何をさせるつもりですか？」
Oが眉間にシワを寄せてボクを見ている。

どうやら気のいい大学職員ぐらいに思ってボクに気をゆるしてしまった事が癪らしい。
ボクはOさんに向き直り、
「コンゴ東部のミケノ山の中腹に子ども達を集めて訓練させてる場所があります。」
「山の麓に気づかれる事無く日本の平和維持部隊を待機させる事が出来ますか？」
「ボクらが子ども達に呼びかけますから、保護して下さい。お願いします。」
ボクはOに頭を下げる。
Oはため息をつき。
「私は一介の国家公務員です。そんな事できるワケないでしょう？」
「それこそ、ゴンザレスさんにお願いしたほうがイイと思いますが？」
Oがゴンを見る。
「総長とは言え、議会を無視する事はできません。議会の承認ナシでは平和維持部隊を動かす事は出来ません。議会ではその国と利益を共有する国が“内部干渉”だと反対してくるでしょう。」
「日本の部隊の駐留する地域に現在活動中の火山があります。彼らが隊員の安全上、部隊を移動する場所を検討中であり、その調査の為に…という事でしたら便宜上、その部隊からの報告があれば私の権限で許可する。という事は出来ます。」
ゴンがOを見る。Oが目を伏せる。
「…だから、私にそんな権限はナイと言ってるじゃないですか。」
「直接、総理大臣に協力を求めればイイ！」とOがゴンに言う。
しばらく間があって、ゴンが言う。
「総理大臣は非公式ではありますが“部隊をうごかしてもイイ”とおっしゃっています。」皆が驚いてゴンを見る。
「ただし、“私は直接、指示を出したくナイ”と“私にはある程度の権限を持たせてる調査職員がいる”“彼がその話を聞いて彼の

判断で部隊を動かすというのは可能だ。”“彼は犯罪者になるだろうが…”とおっしゃっています。」

“オレの事か！”Oが動揺している。

「それで、今朝あなたを迎えに上がった次第です。」

皆が黙り込む。

“このアウェーの状態でオレに聞いてくるのか！”

“酷いじゃないか！

“せめて大臣から直接言われるなら、まだしも…”

Oの考えが流れ込んでくる。“切り捨てられた！”と。

ゴンがいう。

「総理大臣のゴトウ氏は良くも悪くも責任は全て自分が受けるとおっしゃってます。

人の命と人類の未来が掛かってるなら、しょうがないだろうと笑っておられました。

只、一国の首相が個人の判断で国のモノを動かすと言う事があってはならないと、

建前であってもそれは守らなければならないと…。

アナタにはすまないと…、おっしゃっていました。」

Oは黙ってる。

“あのバカ達のしりぬぐいをする事に比べれば、よっぽどヤリ甲斐はありそうだ。”

“オヤジが腹をくくるなら、やるしかナイか”

「わかりました。只、隊員の安全上、許された重火器以上の装備をさせて下さい。」

Oが承諾してくれた。

ボクが握手しようとするとボクの手を払い「この疫病神！」とののしった。

ゴンが来てくれて助かった。
こんなに事が進もうとは…。
しかしゴンはどうして、ボクが日本の部隊を使って救出しようとしていたのが
判ったんだろう?
そうでなければ、総理大臣の協力を求めるなど無かったハズ。
ボクはゴンに聞く“ボクの考えをいつから知ってたんだ?”と
「あなたはTさんにその考えを言ってましたよね?」
「実はあなたがOさんとトリスタンで接触する時から人を使って警護していました。」
「あなたは、ボクらに取って大切な人ですから。」
「そしたら翌日の早朝、あなたがTさんに殴られてると聞きまして…。」
「相手がTさんだったので傍観していたのですが、話の内容が気になって
近くにいるナカマにTさんの考えを覗いてもらいました。スミマセン。」
「Tの事を知ってるという事はボクについて他にも知ってるのかい?」
「全てというワケではないのですが…。興味ある人物は調べたくなる性分で。」
まいったな。気をつけなきゃ。

（21）（後書き）

またもや都合のイイ設定ですみません。
次の展開が苦しいです。

（22）

夜中、目が覚める。Aちゃんが隣で寝ている。
寝顔を見ていると触れたくなり、手を伸ばす。
ボクの手がない。
彼女の頬を感じるのにボクの手はない。
思わず声が出そうになり、見えない手で口をふさぐ。
寝室をあわてて出る。
落ち着け、大丈夫。自分の身体をイメージしろ。
恐る、恐る、手を見る。あった。
ボクはしゃがみ込み自分の身体を抱きしめる。
ダダ！
“どうした？”
龍はまだか？
“…まだだ。”
身体が消えかけてる。
“すぐに、戻って来い”
いやだ！
“お前、消えちまうゾ！”
いやだ！帰らない！
“ナカムラ！”
ダダと話すボクの声が聞こえたのか、Aちゃんが起きてきた。
「どうしたの？」
ダメだ、Aちゃんに気づかれては…。
ボクは立ち上がり「何でもないよ」と笑いかける。
でも、身体の震えは止まらない。
彼女の横を通り過ぎ寝室へ戻る。
後からベッドに入ってきたAちゃんを抱き寄せる。
彼女の胸に耳を当て、心臓の音を聞く。

微かにフルールの香り。
彼女がボクの髪をなでながら言う。
「震えてるわよ。」
「何でもない。」
しばらく、そうしていると眠くなってきた。
ダダが鎮静剤でも入れたのだろうか？

朝、ボクより早く起きてＡちゃんがコーヒーを沸かしている。
起きだして来たボクを見て。
「おはよう、今朝の具合はどう？大丈夫？」と聞いてきた。
昨夜の事を心配してるんだ。
「大丈夫、恐い夢を見てね。」と笑う。
「子どもみたいネ。」とＡちゃんが笑う。

キミはいつでも笑っていて。お願いだから。

センターへの通勤途中、ゴンから連絡が入る。
“早速、日本の部隊から調査隊派遣の許可依頼の文書が来ました。”
“日数は1週間、ミケノ山に近い他国のキャンプに駐留しての調査との事です。”
“Ｏさんから、調査隊のＫ二曹はこの調査の本当の目的を知っている。作戦上の指示があれば彼と連絡をとるようにと言っていました。Ｋ二曹からの報告では駐留中にミケノ山の麓に部隊を一時待機させ子ども達を保護するとの事です。”
“保護されてあと、子ども達は？”ボクが聞く？
“国連の管理下にある施設に送られます。”
“また、連れ戻されては意味がありませんので。”

“それと知り合いのカメラマンとルポライターを彼等の部隊に同行させる事にしました。”
“作戦開始は、日本時間では2日後の夕方6時。向こうでは夜中1時を予定しています。今ネットで広告を出しています。“サプライズ映像がある”とカウントダウン付の時計とね。子ども達を保護する映像が流れれば、国際法によって犯罪とされる少年兵の存在が明らかになります。
国連にとっての大義名分ができます。後は世論の勢いに乗って各国への協力依頼をしたいと考えています。”
“その日、ボクもそこに行きます。K二曹にそう、伝えて下さい。”
“どうやって、向こうまで行くんですか?”と、ゴン。
“心配しないで。取りあえず伝えて下さい。”
“そうだ、あとでススムくんの所にK二曹の顔写真送っておいてください。”

ボクは昨夜の間にたまったメールをチェックしていた。
「おはよう。」イシカワさんが出勤してきた。
「おはようございます。」
ボクはモニターから目を上げイシカワさんを見る。
ムゥ!なんで、イシカワさんと一緒なんだ?

「今朝、ダダさんからの伝言をムゥくんから聞いたよ。」
「ナカムラ、すぐに戻れ。」
ダダ、余計なことを!
「いやです。」
「お前、消えてしまうというじゃないか。」イシカワさんが言う。
「“消える”って事は“死ぬ”って事だってダダさんは言っていたゾ!」

「１０年前とは違うって！」
ムゥが睨んでる。“バカヤロウ”って睨んでる。
「ムゥ、お前は帰れ。ボクがどんなに情けない大人か見る事になるぞ。」
「オレは父ちゃんの言葉をイシカワさんに伝えなきゃならないんだ。」
勝手にしろ！
「イシカワさん、ボクは戻ったら2度とココに戻れないんです。」
「Ａちゃんと離れて生きて何が楽しいんですか？」
「それなら、Ａちゃんの側で消えたい。」
イシカワさんが言う。
「死んじまったら、終わりなんだ。」
「お前、１０年前もココに戻れないと思っていたンダロ？」
「でも、今はどうだ？お前、Ａくんと暮らしてるじゃないか。」
「それこそ、生きてりゃコソだ。違うか？」
“ナカムラ、聞いてくれ。”
ダダだ。
“お前のチカラが弱くなっているのは知ってた。”
“そりゃ、そうだ。通常は1年空ける所を半年もしないで地球へ行ってしまったんだから”
“だから、ココに戻って休養すれば戻れるはずだ。”
“もちろん確証はないし、消えたその時間以降になるとは思うが…。”
ボクがダダに聞く
「半年で１０年経ってた。1年休んだら２０年経ってしまうのか？それとも…。」
「本当に彼女に会えるのか？」
「ボクが消えた後、彼女がどんな想いでいたか知らないダロ！」
ダダが黙り込む。
Ａちゃんが悲しんだのはダダのせいじゃないのに。

ボクは最低だ。
「ごめん、ダダ…。」
ムゥがイシカワさんにダダの言葉を伝えてる。
イシカワさんが応接ソファーのスツールをひとつ持ってボクに近づいて来た。
説教するつもりだ。いつもそうだ。それでもボクは聞かない。
ボクの側にスツールを置いて座り込むとため息をつき、話しだした。
「お前が消えた後、A君が毎晩泣いていたのはオレもTも廻りもみんな知ってたよ。」
「朝から、目を腫らしてるんだもの。しばらくは受付から外されてたんだ。」
「皆の前では気にしてませんって顔して笑って…。痛々しかったよ。」
「ウチのに彼女を慰めてくれって言ったら、“そんなのTのヤル事でしょ”と“しばらくは、放っておきなさい”って言われた。」
「それでも1ヶ月もするといつもの彼女に戻ってた。」
「きっと、Tと寄りを戻したんだと思っていたら、彼女はTのEU研修に同行しないと聞いた。Tに“もっと押せ!”って言っても笑って首を振るだけだし。」
「気になって、昼に社員食堂で聞いたんだ。
“あのバカはきっと戻って来ない。キミはそれでイイのか?”
“Tと一緒になった方がイイ”と。」
「そしたら、彼女が言うんだ。」
“ナカムラさん以上に好きな人はいないのにその代わりだなんて、Tさんに失礼です。”
“ナカムラさんの事、待ってなんかいません。…でも、どっかに居るなら会えるかもしれませんよね?それだけでイイって思えるようになりました。”
「…って笑うんだ。強いダロ?」
聞いていて鼻水が出てくる。向こうむいてグスグスと鼻をすすって

いるとムゥがティッシュを持ってきた。“みっともねーなー”って顔で。
イシカワさんがボクの肩を叩きながら
「だから、お前が生きてる事が肝心なんだ。」
「それとも、５０歳、６０歳の彼女じゃ不満か？」
（かなり、残念かも…。）
イシカワさんも自分で言っておいて、ウーンと考えてる。
「…とにかく、そういう事だから帰れ！」と笑った。
最後の詰めが甘いっていうか、荒いっていうか…。
「判りました。アフリカでの仕事が終わったら帰ります。」
そうだった、という顔でイシカワさんがボクを見る。
「作戦開始は明後日の夕方６時です。その日、ススムくんに会いにお宅に伺います。」
「ススムに伝えておくよ。」

「じゃあ、オレ帰るから。」ぶっきらぼうにムゥが言った。
「ゴメン、ムゥ。みっともない所見せて…。」ボクがムゥに言う。
「フン」とそっぽを向いた。
可愛げの無いヤツ！
ボクもそっけなく、仕事に戻った。

ドアの向こうでイシカワさんがムゥを手招きしてるのに気付かなかった。

「ありがとう、ムゥくん」
「べつに…」お礼を言われるようなコトじゃない。
「ダダさんに見えてるのかな？」イシカワさんが聞いてくる。

「ああ、きっと見てる。」とオレが応える。
「それじゃあ…。ダダさん、あのバカを説得するにはA君をからめて泣き落とすのが一番効くゾ。A君の名前が出ただけで目が潤んでるんだから。」
しょうがない奴という風にイシカワさんが言った。
「“よくわかった”って父ちゃんが言ってる。」
「“お互いバカには手をやくな”って。」
「“バカほど可愛い”とも言うがナ。」とイシカワさんが笑った。。
向こうで父ちゃんもいっしょになって笑ってる。

あのバカが父ちゃんやイシカワさんと同じ大人とは思えないネ。
オレはそう思う。

（22）（後書き）

駄々っ子ナカムラでした。

「生きてりゃコソの…」はアニメ「宝島」を思い出します。
根強いファンが多くて「ベルセルク」に出てきた時は本当に驚いた。

（23）

ボクは陸自の旗の立つテントを覗き込む。
「すみません、ナカムラと言います。こちらにK二曹はいらっしゃいますか？」
いきなり現れたスーツ男に皆驚いている。
「しばらく、お待ち下さい。」中の1人がテントを出ていった。
移動準備に追われて騒がしい。やがて、K二曹がテントに入ってきた。
「ナカムラさんですか？」
ボクは右手を出す。
「よろしくお願いします。」
Kさんが握手を返してきた。
「驚きました。ゲートをどうやって通ったんですか？」
「ゴンザレス氏が…。」と後をにごす。
「そうですか。」と納得してくれた。
「保護する子ども達の事をゴンザレス氏からどこまで聞いてるんですか？」
Kさんはボクを向こうへ連れていく。
「“心を覗ける子ども”という事ですか？」Kさんが言う。
「Oから聞きました。ちょっと信じられない話ですが、アイツが言うならソウなんでしょう。」
「Oさんと、親しいんですか？」ボクが聞く。
「同郷です。ああ、そうだ。アイツが“ナカムラっていう厄病神がソコに行くから”って笑ってました。アイツの笑い声を久しぶりに聞きました。」
「酷いなー。女性を紹介してやったのに。」とボク。
「アイツにですか？」とKさんが驚いてる。

「あなたの部隊はどこで待機するんですか？」
Kさんは地図を広げ指差す。
「ココがゴンザレス氏から指示された、地点です。」
「ココから徒歩で一時間程昇った地点に子ども達がいると聞きました。」
「かなり近いので危険ではありますが子ども達の事を思うとコレ以上は離したくないとの事でした。」
「私達も安全を考慮しなければなりませんから、留まっていられるのは3時間が限度です。」
夜中の1時から4時までか。
「今夜の作戦が少年兵の保護という事を隊の皆さんは知ってるんですか？」
「今朝、説明しました。夜からキャンプを出るという事に全員が不安を感じていましたから。」
「危険な仕事をお願いして、すみません。」
「何故、あなたが？国からの命令です。仕事ですから。」とKさんが笑う。
「…失礼ですが、ナカムラさんはこちらには何を？」
ボクを見てKさんが聞いてきた。
「ボクが子ども達を呼びます。ボクも彼等のナカマなんです。」
「同行させてください。」
Kさんが驚く。
「ナカマというと“ココロを覗ける”と？」
ボクはうなずきながら
「ボクらにも礼儀はあります。いつも覗いてるワケではありません。」
「ガードの固いヒトは簡単には覗けませんし…。」
「それよりも、ボクらのココロが繋がってる事が重要なんです。」
「現在ボクの友人が子ども達の側にいます。」
「先程、アナタの教えてくれた待機地点を教えました。」

「少人数のグループに分かれて気づかれないよう山を降り始めています。」
Kさんが言う。
「便利ですね。アナタの友人達に危険は？」
「大丈夫です。気にしないで。」（何しろ身体はないんだから。）
「…アナタのような人が増えると、Oは言っていました。
将来的に彼らに貸しを作る事は国益になるだろうと…。」
ボクは笑う。
「彼らなんて他人行儀な。Kさんお子さんは？」
「1人います。5歳です。」
ボクがKを見る。
「…まさか？ウチの子もそうだと。」
ボクはうなずく。
「10年前にある現象がありまして、地球上の人間のDNAに影響を及ぼしたようです。そして生まれた子ども達がココロを結びはじめています。今回の作戦もその動きから起こりました。感能力を持たない人たちと溝を作らない形でやっていく事を望んでます。彼らと作り上げる新しい世界を楽しみにしています。親ならわかるでしょ？」
Kさんは黙ってる。

「ゴンザレス氏から同行をお願いされた方を紹介します。」
Kさんから二人の男を紹介された。
「こちら、フリーのライターをされてるオキさんと助手のマチさんです。」
「よろしくお願いします。」ボクが握手を求めるとオキさんが応えた。
「こちらこそヨロシク。」助手のマチさんはカメラを構えたままピースして合図してきた。自分の声を拾わないよう声を出さない。
「ゴンザレス氏がネット配信するっていってましたが…。」

「ええ、マチの写した映像がそのままキンシャサにある事務所に送られてサイトでオンエアされます。」
ヘーッとボクがカメラを見る。思わず出来ないウインクをカメラにする。
マチさんが眉間にシワを寄せ。“やめろ”っていう風にひとさし指を振る。
「今回、ゴンザレス氏はかなりムチャをしてますね。日本の部隊が夜間からゲートの外に出るのをこのキャンプの指令が認めてるのも何かしらの承諾をさせてるからでしょうし、恐らく少年兵保護の作戦も知ってるでしょうね。」
「この作戦が成功しても、世論が支持してもゴンザレス氏は事務総長を辞めるつもりですね。」「そうでなきゃ、議会を無視したケジメがつかないでしょう?」とオキさんが言う。
ゴンサレス氏、総理大臣のゴトウ氏、そしてO。今回の事で職を辞して協力してくれる。申し訳ない気持ちと感謝でなにも言えなくなる。

K二曹が現れた
「皆さん、車に乗って下さい。出発します。」

ゲートから出て一時間程で車は止まった。
輸送車と指揮車と武装車のライトが消える。
“来た”“本当に来た”頭に小さな声がする。
ボクは車から降りる。声に向かって走り出す。
「ナカムラさん!勝手に動かないで!」Kさんの声が後ろで聞こえる。
オキさんとマチさんがボクを追いかけて来た。
「オキさん達まで!危ないですよ。」
護衛の為に自動小銃をもった隊員が追いかけてきた。

“ムゥ、いるのか？”
“オレは、最後のグループについて山を降りている。”
“残りの子ども達は山の麓にいるはずだ。”
“わかった。ススムくんは、どうした？”
“ひとり、聞き分けのナイ奴がいて、そいつの説得をしてる。”
“大人の兵隊はいないのか？”
“それが、不思議な事にいないんだ。助かったけどな。”
ボクは子ども達に呼び掛ける。
“おいで、迎えにきたよ。”
“キミたちの仲間だ。”
暗がりの中から動く人影。銃を構える隊員。
「子どもたちです！銃を降ろして！」
ボクは両手を広げて迎える。子ども達が走って出てきた。
ゴリゴリの痩せた体の子ども達を抱きしめる。
“待たせたね、もう大丈夫だよ”

こんなにいたなんて。輸送車に乗り切れない。
「山には大人の兵はいないようです。もう一度往復してもらえませんか？」
ボクがKさんに言う。
「そうするしかナイですね。輸送車をキャンプへ向かわせましょう。」
「ちょっと、待て。俺たちも乗せてくれ。」
オキさんとマチさんだ。
「もし、キャンプの指令があの子たちを拒否したら、コイツがモノ言うぜ。」
マチさんのカメラを指差す。そうか、いまライブ中なんだ。
「オキさん、マチさん、お願いします。」
彼らは親指立てて、輸送車に乗り込んだ。
「ナカムラさん、さっきの画はよかったヨ。」とオキさんが輸送車

の中から言ってきた。
ボクはおどけて、出来ないウインクで返す。マチさんが指で“ダメ、ダメ”をする。

輸送車を見送ってしばらくすると、ムゥ達が降りてきた。
「ムゥ、ご苦労様。」ムゥと最後のグループを迎えた。
「輸送車は？」ムゥが聞く。
「入りそうにないので往復してもらおうと思って」
「そうか。」とムゥ。
「ボクはススムくんの様子を見てくるよ。」
「わかった。」
疲れているようだ。休ませてやろう。
「Kさん、もう一人残ってるようなのでボク見てきます。」
「ボクの様子が知りたければ、彼に聞いて下さい。ボクの友人です。」
ムゥを指差す。ボクらに気づいてムゥが小さく手をふる。
「友人って彼ですか？」Kさんが子どものムゥに驚く。

“ススムくん、どう？説得できた。”
“彼は以前、逃げ出して連れ戻されて酷い目にあったんだ。それで…”
ススムくんには、まだ身体を作る事を教えてなかった。
彼らに呼びかける事は出来ても、触れることはできない。
ススムくんの歯がゆい思いが伝わる。
小屋の中で目だけ光らせてナイフを持つ少年。
“どうせ、また連れ戻されるんだ。そして…”
“だから、来るな！”
少年はナイフをかまえる
“国連の施設でキミたちは暮らすんだ。連れ戻される事はない。”
“おいで、遅くなったけど迎えにきたよ。キミのナカマだ。”

“わかるだろう？”
ボクはゆっくりと近付く。
ナイフを構える彼の手をどけて抱き締める。
“大丈夫。皆が待ってる。”
“ボクらは皆、繋がってる。新しい世界を作ろう。”
少年はナイフを落としボクにしがみついた。
“そうだ、いつも一緒だよ。”
その時、銃声が…。
ボクの背を熱いものが貫いていった。
ボクにしがみついていた少年の手が離れ、彼はズルズルとボクの足元に崩れる。
少年の背に廻したボクの手に血が…。
彼の血が…。
心の底にたまった黒いモノがあふれ還りノドまでこみ上げてくる。
それはノドを通り鼻と目を押してくる。やがて涙となり視界をおおう。
振り返ると銃をもった男が居た。ボクに銃口を向けて。
“何故だ！”
“何の意味があるんだ！”
“彼が何をした？”
“失せろ！”
ボクの周りで光の玉がバチバチと発光する。
突然、男が倒れる。
ススムくんが動きを止めたのか？
かまわない、お前なんか消えてしまえ！ヤツに落雷を！
突然、顔を叩かれる。
落雷は的をはずれ、爆発音と共に男の側に落ちて地面をえぐった。
「何、やってんだ！」
「ヤツは動けないダロ！」
「オレたちの前で人殺しなんかするな！」

ムゥだ。ススムくんの泣き声がする。
「その子は生きてる。出血がひどい。早く医者にみせないと…。」
「他の子の保護は完了した。その子を早く部隊へ！」
ボクはムゥに指図されるまま、彼を抱え、チカラを使い山を駆け下りていった。
麓には指揮車と武装車が待っていた。
ボクは少年を指揮車に乗せた。
ボクの後をムゥがあの男を背におぶって降りてきた。
「なんで、こんなヤツまで！」ボクはムゥを怒鳴った。
「よく見ろ！」ムゥが怒鳴り返してきた。
よく見ればまだ若い。リネぐらいだ。
「コイツはあの子を狙ったんじゃナイ。あの子を助けようとお前を撃ったんだ。」
なんて事だ。ボクが呆然としてると、Kさんが言った。
「早く乗って下さい。キャンプに帰ります。」

（２３）（後書き）

今回はちょっと固めかな。

（24）

キャンプではあの少年の手術が行われた。
子ども達は「ＳＭＩＬＥ」を歌ってる。仲間を励ますように。
彼らは明日、キャンプのヘリでキンシャサの施設に移動する。

「…ムウ、ありがとう。止めてくれて。」
「別に…。お前に何かあると父ちゃんや母ちゃんが悲しむんだ。」
この間から“お前”呼ばわりだ。しょうがないか。
「…あんなイヤなココロは初めてだ。もう二度と見たくない。」
「ススムは帰したよ。今ごろ寝てるだろう。」
「俺も疲れた。帰る」
そう言うと、ムゥは消えた。
ボクはダダを呼ぶ。

すまなかった。ムゥにあんなモノ見せてしまって…。
“無理もない状態だったからな…。と言ってやりたいが、大人としては最低だったな。”
“反省しろ。…取りあえず、あの少年も命に別状はナイと言ってるし良かったよ。”
“お前も帰って来い。”
Ａちゃんに会ってからでイイよな?
“ああ、早く帰って来い。”

ボクはＫ二曹を探す。
夜明け前だ。隊は昼勤と夜勤に分けられ夜勤の隊は寝ている。
忙しく動き回る隊員も半分に減った。その中でＫ二曹を見つけた。
「ご苦労さまでした。休まないんですか?」ボクが呼びかける。

「落ち着いたら仮眠を取ります。疲れましたが、気分はすごくイイです。」
「撃たれた少年は残念でしたが、命に別状はナイようですし、隊員も皆無事でしたし。」
Kさんが笑う。そして、思い出したように、
「先程、ゴンザレス氏に作戦成功の報告をした時に知った事なのですが。」
「ゴンザレス氏はあの一帯に伝染病が広がって死者が連日出ているという偽情報を流していたようです。それだけで兵隊は動かないと思ったのですが、ラーラという歌手の歌う鎮魂曲を流したら我先に逃げ出していったようです。」
ララァが？いつ録音したんだ。
「歌の力ってすごいですね。ある意味、兵器ですよ。」
ボクはあいまいに笑い返す。本気で兵器になんて考えてくれるナ。
「仕事も終えたし、ボクは帰ります。」
「どうやって？もう2日待って貰ったら、隊も引き上げますから一緒に帰りましょう。」
「イイエ、ご心配なく。」
間があって、Kさんがボクに敬礼をする。
「お疲れ様でした。」
ボクも見よう見まねの敬礼を返す。

さて、ススムくんはどうしただろう？彼にもあやまらなきゃ。
意識を集中させススムくんの部屋へ。
ススムくんはまだ起きていた。時間は夜12時。
「ススムくん。」
呼ばれて、ビクッと驚いたようにボクを見る。
「ごめん。あんなモノ見せてしまって…。」
「ボクこそ何も出来なくて…。」

「ナカムラさんを撃った子が…、あの子が側にいるのは知ってたんだ。」
「まさか銃を持っていて、撃ってくるなんて思わなかった。」
「ボクが気づいて彼を止めてたら、あんな事は起こらなかったんだ。」
ススムくんが黙り込む。
「そんな事はない。キミは彼を止めたのに…。ボクは彼を殺そうとした。」
「キミ達に“殴られてやれ”なんて普段は言ってるのに…。大人としては最低だよ。」
ふたりで黙り込む。
「…大人なんてキレイ事しか言わないって、説教されても半分しか聞いてなかった。」
「ナカムラさんが“ボクらは相手を殴れない”って言ってたけど、それもウソだって判ってた。確かに相手の気持ちは感じるけど“気にしなけりゃ”イイんだもの。」
「でも、逆に“ボクらは今いる人間より優秀でやりたい放題やりゃイイんだ。”
なんて言う大人なんて見たくもない。」
「理想な状態を見せてやれなくても“コレが望んだ形じゃない”ってキレイ事でも言ってくれる大人がイイって思えるようになったんだ。」
「それに、ムゥが“ナカムラは大人じゃない、バカだ”って言ってたし。」
ススムくんが笑う。
チクショウ！ムゥのヤツ！
「お父さんに聞いた。帰るんでしょ？」
ボクがうなずく。
「今まで、ありがとう。また会えるよね？」
ボクはススムくんをハグする。

「いつかきっと。」
「お父さん達には会わずに行くよ。よろしく伝えて」
「そのほうがイイ。お父さん、泣くとしつこいンだ。」
ふたりで笑う。

ボクを撃った少年。彼はどうしただろう？
彼にしてみれば何が何だか判らなくて混乱したのだろう。
恐かったのだろう。
ボクらの間では説明は必要ない。
でも、そうでない子ども達もいたんだ。
気がつくとキャンプに戻っていた。
助けた子ども達がいるテント。
“ナカムラ”と皆がココロで呼びかけてくる。
昨日よりも表情が柔らかい。
「元気？」と呼びかけると「ゲンキ？」とマネして返してくる。
苦笑しながら、彼を探す。スミのほうで呆けて座る彼を見つけた。
ボクを見つけると、驚いて目を見張る。
心の中にあるのはボクに対する“恐怖”だ。
彼のココロに呼びかける。
“すまなかった。キミがあの子を狙ったと誤解していた。許してほしい”
彼のココロはボクの呼びかけを受けつけない。
“化物”とボクから逃れようとする。
無理もない。ボクは彼を殺そうとしたんだから。
怒りに任せて、やってしまった事に情けなくてうつむいていると、子ども達の声が聞こえてきた。
“ナカムラ、ダイジョウブ。”
“ボクタチガイル。ダイジョウブ。”
“オドロイテイルダケ。ダイジョウブ。”

見ると、落ち着かせようと子ども達が彼に寄り添っている。
そうだね。これからは、キミたちの世界だものね。後は、お願いするよ。

さあ、Aちゃんの所へ帰ろう。

父ちゃんがモニターの乗ったテーブルを拳で叩いた。肩が震えてる。
どうしたんだ?
「父ちゃん、どうした?」
ナカムラのモニターは真っ暗だ。まさか…。
ナカムラの身体に異変はない。
「ナカムラの意識が消えちまった。」
「あのバカ、道草しているうちにチカラ使っちまって、Aちゃんにも会わないまま…。」
そんなワケない。あのバカがAちゃんに会わないまま消えるワケがナイ。
「父ちゃん。オレ、ナカムラを探してくる。“場所”にまだ居るハズだ!」
「迷子になってるんだ。」
オレは父ちゃんを急かす。
「ダメダ!お前は疲れてる。危険だ!」
「オレは母ちゃんと約束した。もしもの時は自分を一番に考えろって。」
「オレはあのバカとは違う。まだ行ける。信じて父ちゃん。」
しばらく間があって
「絶対に帰って来いよ。約束だゾ」
「もし、帰って来なかったらお前もあのバカと一緒だからな。」
「それだけは、絶対イヤだ。」
オレが笑って言う。

父ちゃんがオレの目を見て言う。
「ヨシ、さっさと終わらせちまおう。」

オレは“場所”でナカムラを想いうかべる。
忌々しいナカムラが現れた。
ほら、あのバカはまだココにいる。
ナカムラがオレを通り過ぎて行く。
気が付くと“龍”がいた。
なんで？
「なんで、お前がいるんだ？アホ龍！」
モトはと言えばコイツが行方をくらませたのがいけないんダ！
「何だとー！」
龍は機嫌が悪かった。
いきなり、容赦なく頭ン中を調べられた。
やめてくれ！気持ち悪い！
“ムゥ、大丈夫か？”
父ちゃんが心配してる。チクショウ。
相手が“宇宙の大王”様なのを忘れていた。
だが、説明の手間が省けたみたい。すべて、察してくれた。
「ナカムラに似てると思ったんだよね。コレ。」
光の玉を持ってる。ゆらゆらと揺れて溶けてしまいそう。
「さっき“場所”を通る時にみつけてネ。
でも、自分が判らなくなって身体に帰れなくなってるみたいだナ。
実際には身体に繋がってるから呼びかけたら戻れるンじゃないの？」

呼びかけるのは…Aちゃんしかいない。

「“龍さん”ナカムラの身体を地球に送って下さい。」
「いいよ。地球の何処へ？」

Aちゃんの部屋へ…。
オレはAちゃんの部屋を知らない！
“ススム！起きろ！ムゥだ！Aちゃんの部屋のイメージを送れ！”
“何だよ、いきなり。Aちゃんの部屋？”
ススムの頭の中にイメージが浮かんだ。
「“龍さん”そこへ！」
「父ちゃん、オレはススムの部屋に行くから」
“ムゥ、無茶するな！”
「誰かが説明しなきゃ！Aちゃんが驚くよ！」
そりゃ、そうだ。

「ススム、今すぐAちゃんの部屋へ行くぞ！」
「何だよ、真夜中に迷惑だろ。」
「緊急なんだ！着替えなくてイイから！」
パジャマのススムを引っ張って、肩を組んでバルコニーから飛び降りる。
「ウワーッ！」ススムが騒ぐ。地面に当たる寸前でさらにジャンプ。
「ナカムラに習っただろ？イメージしたら身体をいろんなモノで巻けるって。」
「コレ何？」
「スーパーボール。」
「なるほど。」
「感心してないでAちゃんのアパートは？」
オレらはピョンピョン飛び跳ねながらAちゃんのアパートへ向かった。

その頃、Aのアパート。

いきなりベッドにいた、ナカムラさん。
しかも裸。無精ヒゲ。

こんなナカムラさん初めて見た。
なんか、ドキドキする。
「ナカムラさん。」
呼びかけても起きない。
キスしたら起きるかしら？

ン？この香りはフルール。
薄目で見るとＡちゃん。
キスしてきた。なんかイイなー。
彼女が身体を離そうとすると捕まえて
「これで、お終い？」と笑いかける。
いきなり、ピンポン連打。ドアを叩く音。
イイ所を…！誰だ！
ベッドを起き上がってモニターを見る。
ススムくんとムゥ！あいつら！
ドアを開けて怒鳴った。
「深夜から迷惑だ！早く寝ろ！」
それだけ言うとドアを閉めた。

「…だから、迷惑だって言ったんだ。」
ススムが言う。
信じられない。
オレがどんな想いで、父ちゃんがどんな想いでいたのか…。
オレはドアを思いっきり蹴り飛ばした！
ゴワーンとアパート中に音が響く。

父ちゃんの声がする。
“アイツに関わると本気出すほどバカを見るな”
“ムゥすまなかった、早く帰って来い”

（２４）（後書き）

次回、ナカムラは只で済むワケないな。

（25）

Aちゃんは、まだ寝てる。
今日は水曜、店の定休日。急いで起こす事はない。
しかし、この身体。ボクの身体だよね。
そして昨夜、ピンポン攻撃してきた2人。
あの時、Hな欲望に負けてあいつら追い払ったけど、
もしかして、とてもマズイ事をしたのかな？
こんな時ダダに聞けたら…。

今、最大の問題は服が無い事。パンツさえも無い。どうしよう？
匂うな…。とりあえず、シャワーしよう。
こんな身体で…、Aちゃんゴメン。
洗面台で顔を見る。不精ヒゲだ。
これから毎日、剃らなくちゃいけないのか…。面倒だな。

シャワーを浴びながら、生身の身体の面倒臭さを考えていると思わず笑えてくる。
勝手だなぁ。あんなに自分が消えるのを恐がってたのに。
いざ、その不安が無くなるとコレだ。
今度はダダと、あの世界と繋がっていない不安が沸き起こってくる。

それでも、Aちゃんとずっと一緒にいられる。それだけは本当に嬉しい。

シャワーを終え、腰にバスタオルを巻いて、飲み物を探して冷蔵庫を開ける。
ミネラルウォーターを見つけた。コップ1杯飲み干して目が覚める。
さて、腹がへった。…でも、この格好とこのヒゲはまずいよね。

コンビニは５００m先。Aちゃんの服は小さいし、職務質問されちまう。
チカラは充電中だけど、しょうがナイ。
ダイニングテーブルに突っ伏して、ボクの身体をイメージする。
いつものナカムラを。
よし、出来た。
ボクの生身はダイニングテーブルで突っ伏して寝ているように見える。
サイフと部屋のカギを持って。パンツ、髭剃り、諸々揃えなくちゃ。

ウイークデイの住宅街の午前中。
ひと目がないのを確認して、ホップ、ステップ、ジャンプ。
上空５０mからコンビニ確認。屋根に着地。建物横から降りる。
ムゥ考案、「スーパーボール」はこういう時、便利だ。
荷物の持ち帰りがなきゃ、いきなり目的地を想いうかべればイイけどサイフを持ってるからネ。

パンツとTシャツと髭剃りセットとサンダル。歯磨き、歯ブラシ、安物のトレーナーの上下があるのは助かった。

例のように、人気の無い所で「スーパーボール」発動。
次はAちゃんのアパートを目指して降下。着地。…と同時に生身に戻ってる！
「ナカムラさん、風邪ひくわよ。」
Aちゃんに起こされて、集中が切れてしまったんだ！
ボクのサイフと買い物は？…外だ！
ボクはあわててアパートの外へ。
あった。良かった。
これが、もうちょっと早かったらボクのサイフと買い物はその辺に散らばっていた。

屈んでレジ袋の中身を確認。本当によかった。
「ナカムラ！」
見上げるとイシカワさん。
何で、いるの？仕事は？
「お前、本当の身体が来たって？もう、戻らなくってイイんだって？」
彼がハグしてきた。
嬉しいような、嬉しくナイような…。何しろ裸…！
「イシカワさん、とりあえず中へ入りましょう。」
ボクは彼を部屋に押し込む。
腰にタオル一枚の裸男と抱き合う中年男性なんて、怪しい事この上なしダ。

裸で出て行ったボクを心配して玄関にいたAちゃん。
いきなりやって来たイシカワさんとボクに驚いてる。
「おじゃまするつもりはなかったんだが…。A君、おはよう。」
気まずそうにするイシカワさんにAちゃんが微笑んで答える。
「おはようございます。イシカワさん、どうぞ。」
ダイニングテーブルのイスをすすめる。
ボクはその間に寝室に行き、先程買ったトレーナーの下とTシャツを着た。
戻るとイシカワさんに聞く
「ボクが幽霊でなくなったのを何で知ってるンですか？」
「今朝、ススムから聞いたんだ。」
「ムゥくんが“場所”で迷子になったお前を探しに向かって…」
ボクが迷子に？覚えているのはAちゃんのもとへ向かった事。
「たまたま、お前を拾った龍に出会って…」
ボクが龍に拾われた？そういえば…。
「A君に呼ばれたら戻れると考えて…。」
「龍に頼んで、お前の身体を彼女の部屋に送ってもらったそうだ。」

…ボクはAちゃんに呼ばれて目を覚まし、
良いムードをぶち壊した二人を追い払い…。
まずい…。殺人未遂の次は恩知らずダ。
最後に見たムゥは疲れていた。
あの後、ボクを探しに“場所”へ？
ダダがムゥを行かすワケない。
あいつ無理したんだ。
謝りたい。ありがとうって言いたい。
でも、コチラからは呼べない。“場所”に行くにはチカラが足りない…。

「ススムくん怒ってますか?…昨夜の事を。」
「いいや、お前が戻らないと知って喜んでるよ。」
ため息をついて
「もし、ムゥがススムくんを訪ねたら、ボクが“謝りたい”と“会いたい”と伝えてもらえませんか?」
「判った。伝えておくよ。」

Aちゃんがお茶を入れて、イシカワさんにすすめた。
礼を言いながら一口飲んでボクに向き直り言った。
「それと今朝のニュース見たか?」
「いいえ。」
「Oが職権乱用と書類偽造で検挙された。」
「次いで、総理大臣の責任問題が追求されてる。」
「午後からの記者会見で辞任するだろうってニュースは伝えてた。」
判ってた事ではあったけど…。
「彼等はボクらの恩人です。」

「そうだな。オレらにとってもだよ。」

「しかし、無精ヒゲのそんな格好のお前は初めて見たな。」
「いつも、ツルツルの顔してツンとしてたのにな。」
ボクをジロジロみながらイシカワさんが言う。
そうか、ヒゲを剃ってなかった。
思わず自分のアゴを触る。
イヤだな。ジョリジョリして、似合わないし。
「明日は、いつも通り出勤するよナ？」
「はい、お願いします。」
「じゃあ、明日。」
イシカワさんはAちゃんの出したお茶を飲み干して席を立った。

「パンツ買いに行ってたの？」
ヒゲを剃ってるボクを珍しそうに眺めながらAちゃんが聞いてきた。
今、聞かないでよ。顔、切っちゃうじゃない。ボクはうなずいて“ウン”と答える。
「言ってくれたら買いにいったのに。」
いいよ、そんな事まで。それより腹へった。と思うと同時にお腹が鳴った。
Aちゃんが笑って台所に戻った。
やがて、タマゴをカチャカチャと混ぜる音、ジュワーと焼けるフライパンの音が聞こえる。ベーコンを焼く香りがして…。
何だろう、この気持ち。ボクは忍び足で台所のAちゃんを覗く。
ひと目見て満足して戻ってヒゲ剃りの続きをする。何やってんだか。

遅い朝食が終わってコーヒーを飲む。
満腹だ。この感覚は久しぶり。

「よく食べるのね。」驚いた風にAちゃんが言う。
「そういう男はイヤ？」
「いいえ、大好きよ。ひとりで食べても楽しくないもの。」

「後片付けが終わったら、服を買いにいきましょう。明日、仕事でしょ？」
考えて見れば、Aちゃんとの初デートだね。
顔がニヤケて来る。

…でも、この格好で店には行けないな。今回は“幽霊”で行くしかないね。

ベッドで横になって、“ナカムラ”をイメージして…。
身支度を終えたAちゃんが入って来た。
ボクと生身のボクを見て驚く。
「気持ち悪い？」
Aちゃんがすまなそうに小さくうなずく。
「ゴメンね。さすがにこの格好じゃ買い物に行けないよ。」

とりあえず、仕事用のスーツを一着と替えズボンを1本。シャツを数枚。ネクタイ3本。それと靴。ベルト、ハンカチ、靴下。こんなものかな？
それとオフ用のジャケットとチノパンとカラーシャツとやっぱり合わせて靴とベルト。
給料の半分は消えるじゃないか。ウーン。

「Aちゃん、ズボンの裾直し終わるまでお茶しよう。」

ボクらは近くのカフェに入った。

席について、店員に注文をして改めて店内を見回す。
店内のＴＶに総理大臣の記者会見が映っていた。

Ｏへの指示があったのではないかの質問に「彼は正義感の強い人間なので止むに止まれずやったのでしょう。」と自身の関与は否定した。「しかし、彼を信用し便宜上様々な権限を与えていた事の責任はすべて私にあります。」「よって、私は政治から身を引きます。私を支持して頂いた皆様、申し訳ありません。そして、ありがとうございました。」事実上の辞任だ。
記者会見中継が切り替わると、今回の少年兵保護に関与したと思われる国連事務総長ゴンザレス氏への議会からの追及も行われるだろうとアナウンサーが言った。
以前から問題にされていた某国の少年兵の保護に今回、強行に行動を起こしたのかが謎である。とも…。

ＴＶを見てるボクにＡちゃんが聞いてきた。
「今朝、イシカワさんも言っていたけど、昨日は何をやっていたの？」
そうか、Ａちゃんには何も言ってなかったね。

“応えてくれない子ども”たちの救出にララァの歌が効いた事から少年兵の保護までの事を話した。

Ａちゃんは驚いている。
「そんな事をしていたなんて思ってもいなかったわ。お仕事休んで、確かに帰りも遅いとは思ってはいたけど…。」
「良かったわネ。その子達が助かって。ヒーローだわ。」
ボクだけの力じゃないし、犠牲もあったけどネ。
でも、掛けるだけの価値はあったと思ってくれてるハズ。

「それと、アナタが“幽霊”でなくなったのも、
夜中にススムくんともう一人知らない子がいきなりやって来た事も、
関係あるの？」
モニター見てたんだ。
あの後、ボクは有無を言わさず彼女を押し倒していたからな…。
ボクは笑ってごまかす。
だって、知らなかったとは言え、命の恩人を追い返したなんて言えないし、
しかもHに負けてだなんて…。
ドン引きされる。

Aちゃんが“この人、また何かやったのかしら？”って顔で見てる。
そんな顔しないで、Aちゃん笑って。

（２５）（後書き）

「スーパーボール」出来たらイイなー。
長新太さんの「ゴムあたまポンたろう」って絵本を思い出しました。

そろそろ〆なくちゃナ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5839w/

世界を廻すのは…

2011年10月26日12時06分発行